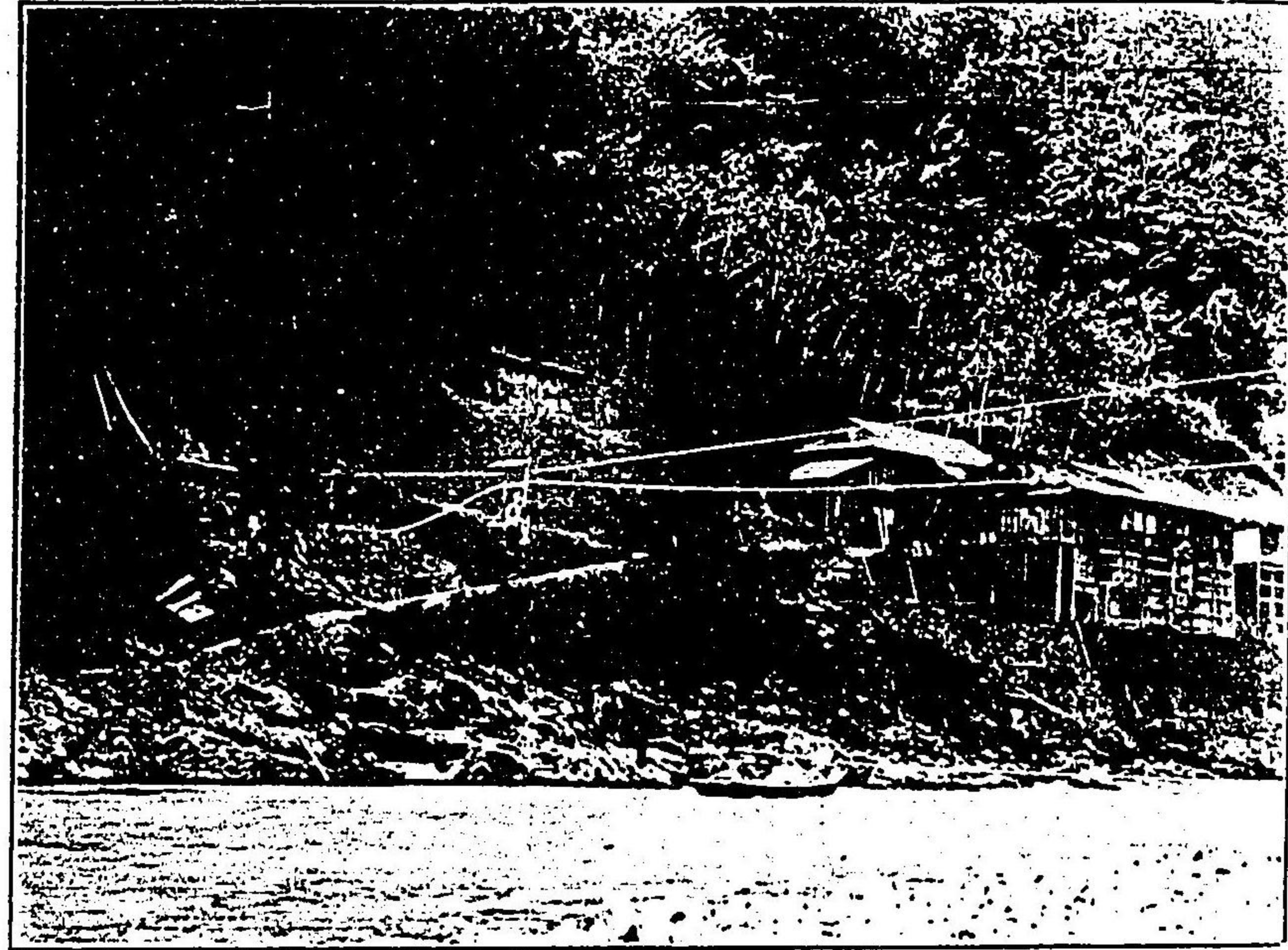


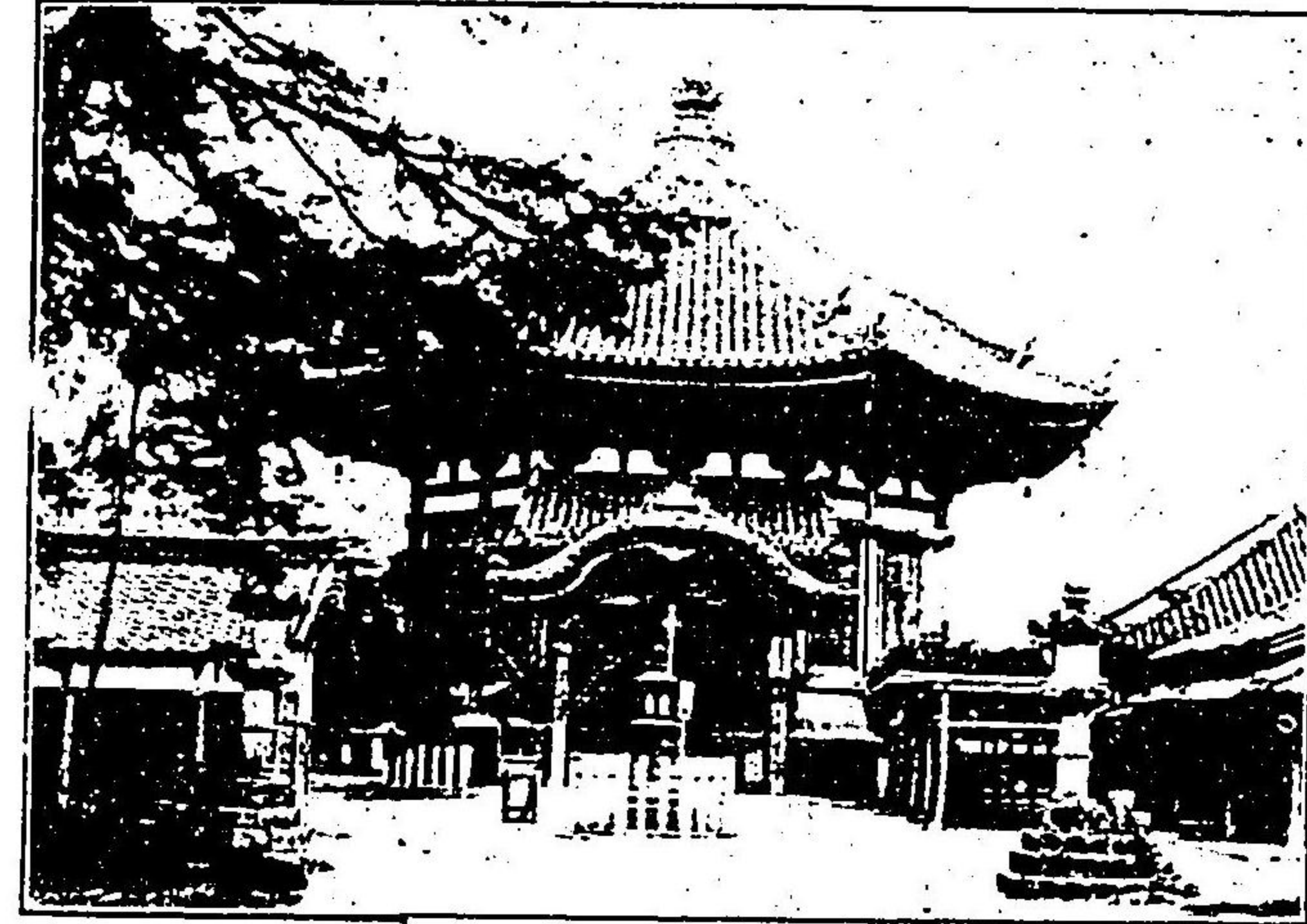
し渡網の中山川津十國和大 (甲)



鹿神口春良奈 (乙)

(第九十區)

堂間南良奈 (甲)

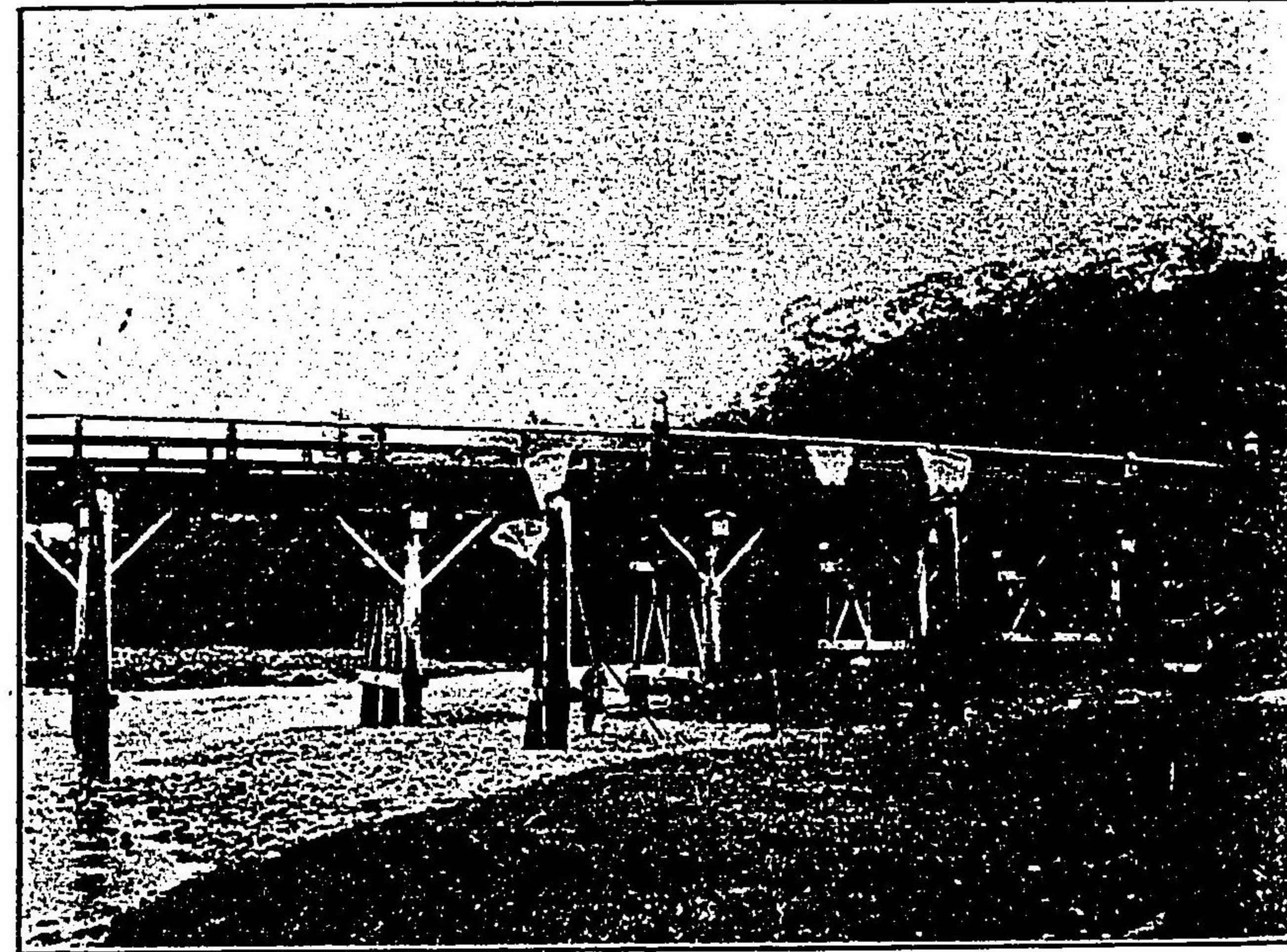


堂月二上全 (丙)

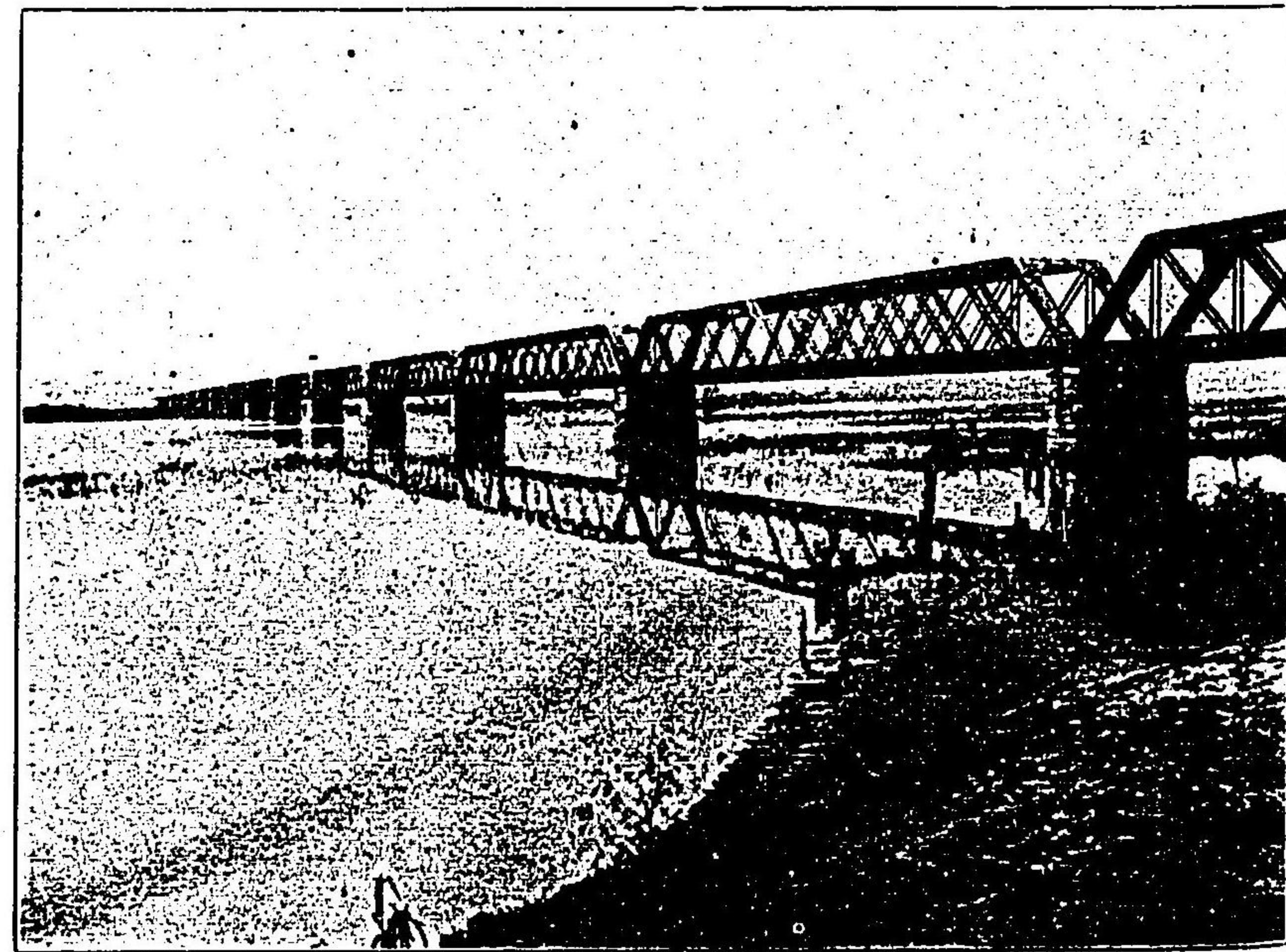
(乙) 全上興福寺

(第八十九圖)

橋治宇田山治宇國勢伊 (甲)



川田龍國和大 (甲)



(近附名桑)橋鐵川斐揖國勢伊 (乙)

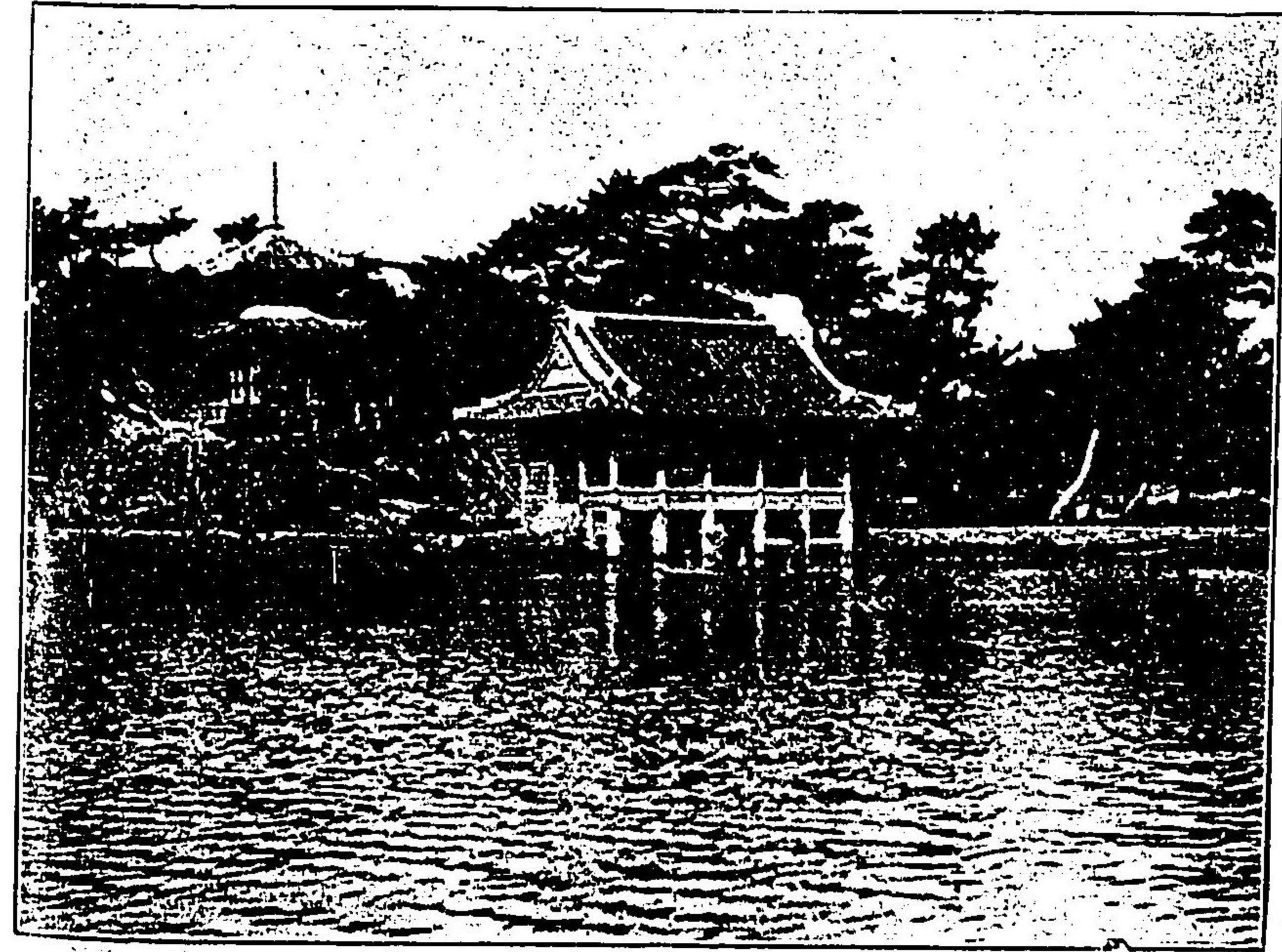
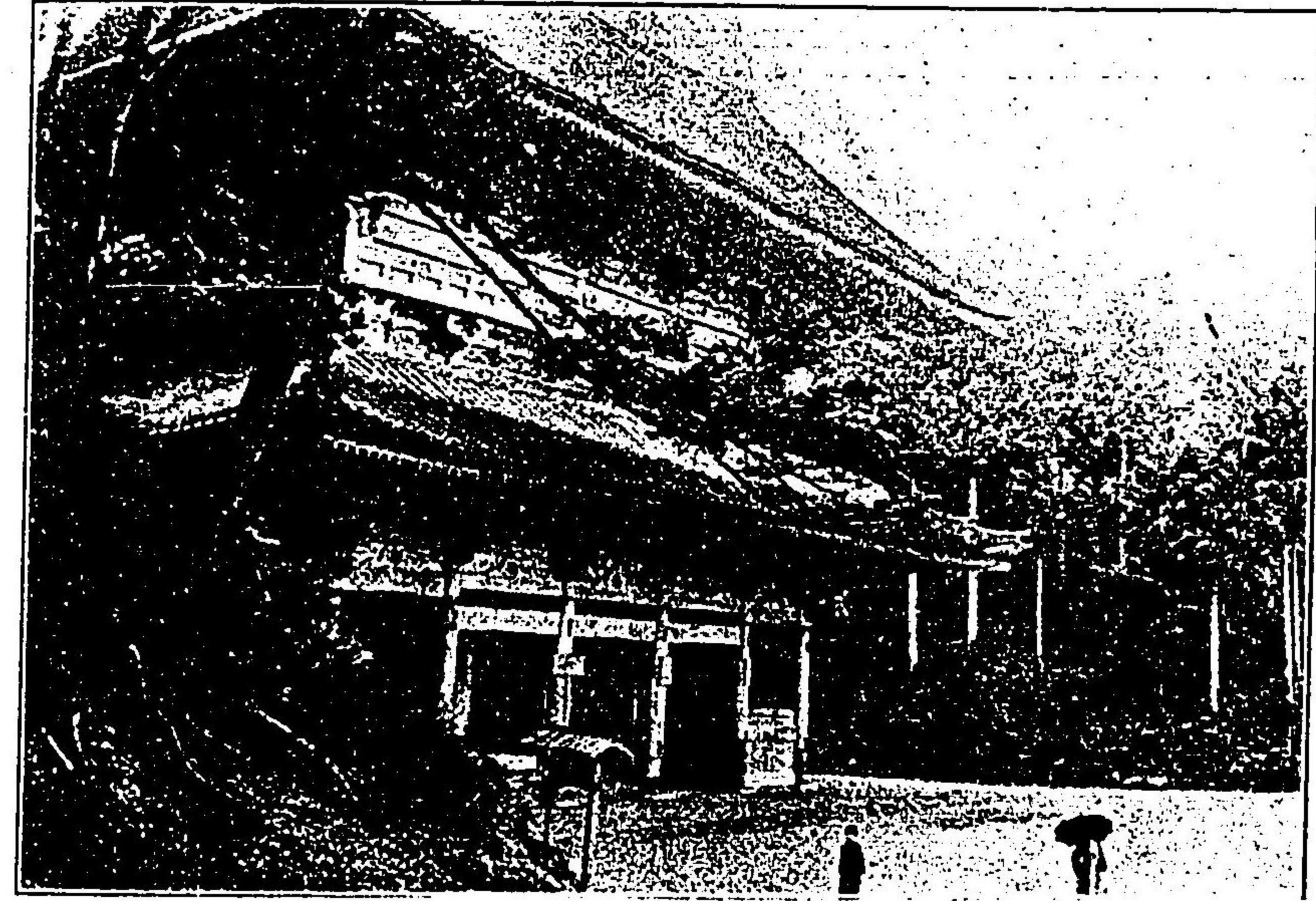


寺麻當國和大 (乙)

(第九十二圖)

(第九十一圖)

山 野 高 國 伊 紀 (甲)



(第九十三圖)

浦 の 歌 和 國 伊 紀 (乙)

東大寺

預りとなり、双方立合の上、これを焼拂ひて和解せしことありしより、今に至るまで毎春芝草を焼拂ふを例とせり。頂上を登りつむれば、鷲陵と稱するものあり。牛塚ともいふ車塚の形にして、塚側の植輪露出し、今猶その破片を得べし。この山嶺に立ちて眺望すれば、平城都當時の光景は千歳の下今日にありて猶宛として眼前にあるがごとく、丘陵の相起伏せる、河水の相交又せる、廢址堂塔の林樹の間に懸見せる、誰か感慨に胸を撲れざるものかあるべき。奈良を訪ふものの必ず一たび登臨すべき所なり。

手向山神社の前を西に下れば、直ちに南都七大寺の一なる東大寺に達す。見よ、巍然たる一大門、其の結構の宏壯なると、二王の彫刻の雄大にして生くるがごときとは、先づ旅客の眼を刮せしむ。これ、有名なる東大寺の南大門（第八十八圖甲）にして、俗に古門と稱し、天平勝寶四年の創建にして、正治元年六月の再興にかゝるといふ。附近に狛犬の彫刻あり。彫整精巧を極め、頗る奇古なり。前の二王像と共に國寶に屬す。門を入りて進むこと數歩、中門あり、昔のまゝなる廻廊は、中に絶大なる大佛を本尊としたる金堂を包みて、

大佛

その規模の宏大なる、他に多く其比を見ず。此寺は八宗兼學華嚴宗の總本山にして、文物隆盛を極めたる平城朝に於て最も佛法を尊敬したる垂武天皇が行基菩提良辨の三僧と共に力を戮せて創始せる所、昔は水田一萬町、寺封五千戸を寄附せられ、境域凡て方八町に亘り、大日本總國分寺として朝廷の尊崇頗る厚かりしもの、今は高塔潰えて建たず、境域また大に縮少せりと雖も、猶儼乎として昔時大伽藍の光景を保てり。中門を入りて進むこと數歩、傍に八角鑿透燈籠一基あり。高さ一丈五尺餘、世人稱して鎌倉時代に於ける陳和卿の造りしものと稱すれども、其古色の蒼然たる、斷じて天平以降の製作に非ず、其銅扉の彫刻最も見るべし。首を擡ぐれば、有名なる大佛を容れたる巨大なる建物は高く空中に聳えて、金銅佛の髣髴は宛として眼前に迫るを覺ゆ。(第八十八圖乙)木階を上ること數級、見よ、香烟鼻々たる邊、白き幔幕の間を透して、嚴然跏趺せる大佛像、これを仰いて誰か張目駭心せざらん。况んや、その形こそ變りたれ、其姿こそ趣を變へたれ、其大きさに於ては、天平時代創建のものと更に變るところなしと言へるに於てをや。殊に注意すべきは大

佛の蓮座に施されたる一種の摸樣なり。こは毛彫にして天平時代の彫刻にかゝれり。今、この大佛の由來を按ずるに、續日本紀に天平十五年十月十五日天皇菩薩の大願を發し、盧舍那佛の金銅像一軀を造るといふもの即ち是にして、身長五丈三尺五寸、而長一丈六尺、蓮華の臺座高さ一丈徑六丈八尺、五十五枚の花片には三千世界の圖を鐫したるもの、其後屢火災に罹りて、今は僅かに痕跡を留むるのみなるは惜むべし。本像は文德帝の齊衡二年五月、頭自から落ちたるを文山なる者これを修め、後治承四年十二月廿八日に至り、本堂講堂回廊僧舍悉く兵火に委し、佛頭再び地に委したり。源賴朝勅を奉じて勸進再興せしが、永祿年間亦三好松永の亂に遭ひて、再び烏有に歸せり。今のは元祿年間公慶上人の勸進によりて再興せるものにして、其十四年に工を起し、寶永五年に至りて落成せり。其體裁全く昔時に據ると雖も、其規模は稍縮小し、柱楹の間少しく狭く、十一に對する七の比例になりたりといふ。本堂は世界第一の木造建築にして、普通建築法と一種其方式を異にし、大佛スタイルの名は建築學者間に噴々たり。宜なり、徳川時代のものにして猶特

三月堂

別保護建造物の一たるに至りしことや。南大門及び大佛殿の東にある鐘樓は鎌倉時代に於ける標式的建築として著名なり。中門を東に出て、左すれば二月堂(第八十九回西)三月堂(第三十二回甲)あり。三月堂は天平五年僧良辨の開創したるものにして、大佛の建築に先つこと十五年、實に奈良第一の優雅なる古建築なり。屢大破し、修繕を経たるを以て、外部は鎌倉時代に補ひ建てたるもの多けれど、内陣は依然として其舊形を存し、人として天平時代の建築を髣髴せしむるに足れり。其他、當境内に於て、天平時代の建物の依然として今日に傳れるものは、正倉院及び東南院校倉校倉勸學院校倉三月堂前校倉等にして、其西なる轉害門も亦其時代の面影を見るべき貴重なる建築也。正倉院(第三十五回甲)は孝謙天皇光明皇后が聖武天皇七々の忌を修めんが爲め、大佛に献納せし御物を藏せられしところにして、今、帝室の有となりたるが、其藏する所の寶器無慮三千餘點、劍鏡武器樂器佛具服飾品文房具玩具圖書藥品香料等ありて、多くは當代に製作せられたるもの、觀る者當時の風俗を知るを得る而已ならず、その工藝美術の發達に驚かざるはなしといふ。蓋し美術及び史

正倉院

般若寺

海龍王寺

學上の寶庫なり。維新前には其監督今のごとく嚴ならず、夜は乞食の群其牆壁の下に集りて、焼火などを爲せしことありしと聞けども、不思議にも祝融の神の手を遁れて以て今日の聖代に遭ひたる、まことに天祐と稱すべし。今は勅封ありて人のこれを觀るを禁ぜり。

轉害門を出て、北すること少許、佐保川を渡りて猶進めば、般若寺あり。聖武天皇の朝には、官寺として築えたるもの、屢興廢を経て、今は全く衰へたり。金堂樓門經藏等あれど、皆鎌倉時代の再建にかゝれり。曾て樓門に掲げし扁額は木造にして、般若寺の三字を書し僧空海の筆なりと稱す。今國寶として奈良博物館に藏せり。是より西北の丘地には、歷代天皇の山陵甚だ多く、元明天皇陵元正天皇陵聖武天皇陵仁正皇后陵等あり。其東に一小高丘あり。松永久秀の築きし多門城の址なりと傳ふ。聖武天皇陵を西に進めば、六町餘にして興福院あり。それと相接して不退寺あり。大鍋小鍋の傍に車塚あり、前後左右陪塚甚だ多く、周圍島に崩されて、埴輪の排列古の儘なる跡を存せり。磐之媛皇后の陵を過ぎ、海龍王寺に至る。山門を入りて、右に本堂、

法華寺

正面に西金堂あり。西金堂は天平時代の建築にして、今、特別保護建造物たり。中に高さ一丈五尺の五重小塔を安置す。これ、即ち西大寺の塔の模型にして、叡尊の作る處と稱す。建築家は藥師寺三重塔と共に天智式の建築として最もこれを尊重す。法華寺はこれを距ること遠からず、忽ちにして其山門の高く前に立てるを見ん。此寺は東大寺の總國分寺に對する總國分尼寺にして、光明皇后の建設にかゝれり。本尊十一面觀音は當代製作中優秀なるものゝ一として尊重せられしもの、其他乾漆の維摩居士坐像、絹本彌陀三尊の繪畫等皆見るべし。

これより再び本道に出て、西に進むこと五六町、忽然、前に一帶空濶たる風景の展開せられるを見る。遠く南を眺れば、平野の極る所、遙かに二三の青螺點々として見ゆるあり。これ萬葉集に其名も高さ畝傍香久耳無の三山にして、近く東に當りては、觀音山手向山若草山三笠山春日山の諸小丘陵相連りて翠嵐を曳き、西は生駒志貴の諸山蜿蜒として相接し、その雲烟の縹渺たる、まことに一幅の名畫を展けたるがごとし。而して奈良の舊都は實にこれ

奈良の舊都

等諸山に圍まれたるこの一帶の廣き盆地に搆へられたることを想はば、誰か感慨なくしてこれに對することを得む。思へ、此の一帶の地、往昔は宮殿樓閣空に聳え、雲を貫き、唐制の衣冠に綺羅を競ひ、銀鞍白馬に風流を極めし所謂奈良の都人なるものゝ往來せしところ、其の盛なる光景は實に今猶眼前に見ゆるがごとくなるを覺ゆるにあらずや。

奈良の舊都は今の生駒郡都跡村を以て宮城の區域となし、東西八町、南北十町、東は左京の一坊大路即ち今の添上生駒兩郡の界より西の方右京一坊大路即ち今の郡山街道に至り、南は二條大路より北、北京極に達したる者の如く、市坊は宮城より南一線に走れる朱雀大路を中央として、左右兩京各市坊と北條及び北邊とに分たれ、朱雀大路の極る處に、かの羅生門を設けたり。市坊の廣さ東西三十二町、南北約三十八町にして、羅生門は郡山停車場附近に位し、今の奈良市は當時にありては、全く京外の地に屬したりき。(奈良沿革圖參照)法華寺より街道を西に進むこと數町、路傍一標柱を建て、題して大極殿址に至るの路を示す。田廬の間をたどること數歩、忽ちにして土俗大國の芝

大極殿遺址

と稱する芝生地に達す。大極殿の遺址は即ちこゝにあり。其地は一段高き臺地を爲し、南方は次第に低く、稻田種々たる中に、塚状を爲せる小芝生の二列を爲して相連るを見る。中央の臺地には、平城宮大極殿舊址と記せる一大木柱を建て、十二堂中門朝集殿閣門歩廊の遺址、皆歴々として指點すべし。而して其西北に當りて雜木林の繁茂するの地を大宮と稱し、内裏の址なりといふ。

元の本道に戻り、猶少し西に進めば、朱雀大路基點の標木あり。また、此附近に、平城天皇陵孝謙天皇陵成務天皇陵神功皇后陵あり。蕭疎たる人烟、佐紀村に至り路は三つに分れ、一は山陵村より秋篠寺に達し、一は眞直に西大寺に至り、南は都跡村を経て郡山に達す。旅客は路を北に取りて、先づ秋篠寺を訪ふを順路とす。秋篠寺は佐紀村より十三四町、神功皇后陵の西方九町にあり。光仁桓武兩帝の本願にして、寶龜十一年の開基にかゝり、勅封一百戸を賜へる大伽藍なりしが、後、兵火に罹り、漸次衰廢して、今は幾かに荒廢せる講堂を残すのみ。佛像の優秀なるものは、十一面觀音技藝天救脱菩

秋篠寺

四大寺

薩梵天大元帥明王帝釋天等の立像あり。これより田間の路を南に傳ふると十町餘、西大寺村に至る。西大寺は眞言律宗の本山にして、七大寺の一に位し、天平神護元年孝謙天皇の勅願によりて創建せられしもの、其後火災に罹りて衰頽せしを、鎌倉時代の碩徳觀尊再興して、律宗の一大道場となせり。本堂愛染堂觀音等あれども、建築多くは鎌倉時代以下にして、多く天智天平の遺蹟を留めず。されど其の寶物には貴重なるもの甚だ多く、空海筆と稱する十二天畫像十六羅漢屏風及び金銅舍利塔四種等最も著名なり。西に距る、三町、奥の院あり、五輪塔婆一基あり、眞正菩薩の墓といふ。これより青野を経て、菅原に至れば、菅原天神社あり。其附近に喜光寺あり。金堂の名残なる一字の建物は荒寥たる田畝の間に残りて、轉た人をして當時の盛を追想せしむ。菅原屋敷址、菅公誕生の池をめぐり、垂仁天皇の陵に一詣し、猶少しく南すれば、一帯の地、風情ある松林のさながら書くがごとくなるを認むるならむ。これ、即唐招提寺にして、法隆寺東大寺藥師寺と共に、奈良古代の建築彫刻を研究するもの、忘るべからざる所なり。此寺の金堂講堂三門僧房等は依

喜光寺

唐招提寺

金堂

然として千二百年來の建築を保ち、管に其寺院の規模を知り得るのみならず、其齧の痕斧のかをりに、よく其當時の神韻を味ふことを得べし。ことに、風情あるは此の寺の境内なり。山門を入れば、風致尋常ならざる松林疎々として相點綴し、一座到らざる清き砂路は、直ちに偉大なる金堂の建物に達し、其建築の堂々たる、一棟の兩端に上げたる鷗尾の異彩を放てる、境の寂寥を極めたる、自から思を無何有の境に馳せしむ。蓋し此堂は現今存在せる天平時代の建築中最も宏壯なる堂宇なるべし。(第三十二圖乙)是を遊れば、其背後に講堂あり。平城宮の朝集殿を賜りて移し建てたるもの、古色また掬するに堪へたり。その左方に連れる禮堂及び舍利殿は、往昔の三面僧房の東の一部の残れるものにして、頗る注目すべきものたる而已ならず、古の三面僧房の残れるものは、これを他ににして、法隆寺に東西兩房の存せるを見るのみなり。金堂の様式を詳説すれば、七間四面上壇の上に立ちて、屋蓋は四注形を爲し、組物は完全なる三手先にして極めて低く、前方に挺出せる支輪あり。軒は甚だ深く、地垂木は圓形をなせり。内陣は三間四面にして、格天井の形正しく、

藥師寺

彩色を施したり。外部は悉く丹を以て塗りたれど、支輪の間には極彩色の唐草を書ける痕跡あり。皆な以て當代建築の様式を知るに足るべく、史家建築家美術家の研究を重ねて猶疑かざるものあるなるべし。金堂の内に安置せる佛像は、正面は盧舍那佛乾漆座像にして、傳思記の作と稱し、左に藥師如來、右に千手觀音等の像を据ゑたり。共に乾漆にして、天平時代の作品たり。其他傳軍法力作と稱する梵天帝釋あり。頗る觀るべし。講堂には丈六彌勒座佛あり、また、極めて名工苦心の跡を存せり。金堂の右に鐘樓あり。鐘は天平年間の製作と稱し、右京唐招提寺の六字を鑄せり。其他、鼓樓開山堂地藏堂等あり。皆巡覽の價あり。これより山門を出て、坦途を南に進めば、疎林の間、一塔の高く空を摩するを見る。これ、藥師寺の近き徴なり。藥師寺は光明皇后の病氣平愈を祈らんが爲め、天武天皇九年十一月に創建せられしもの、元、高市郡にありしを、平城筑都後、養老二年を以て、今の地に移せり。七大寺の一にして、往時は盛大を極めたりしも、屢災厄を経て、當時の建築多くは烏有に歸し、今日に存せるは、巍然雲に聳ゆるの東塔ある

藥師三尊

のみ。金堂は延寶二年の再興にして、中には米人フェノルサをして世界無比の鑄造佛なりと舌を巻いて驚嘆せしめたる藥師三尊（第三十圖）の像あり。本尊の左右に日光佛月光佛あり。本尊は佛體の色澤漆のごとく、中に無限の光澤を存し、相貌豊備優美にして寫生の妙を極め、衣紋の曲線また流麗穩健に、技巧の頗る圓熟せる、千餘年來の今日、猶美術家をしてこの大作ありしかを驚かしむ。坐像長九尺にして、堅五尺、横一丈七尺の須彌壇の上に安置し、須彌壇の四面には、瓦燈形の裡に、面貌醜猥頭髮纏縮せる裸體人物の半肉彫あり、青龍朱雀白虎玄武の四獸あり、壇の上下兩縁には葡萄模様あり。佛の衣裾は全く前面に垂下し、頗る美術の精緻を盡したり。講堂にも亦これと相似たる藥師三尊を安置す。其面貌俊逸高遠にして、鼻端は直截せられ、下唇は下に縦横溝を有し、耳形の乾固なる、衣紋の曲線の遒勁にして直角斷面を有せる、頗る古色を帶べり。關野學士の兩三尊製作年代論によれば、後者は白鳳創鑄にして、前者は和銅改作なるべしといふ。東院堂は金堂の東にありて、また、中に銅造の聖觀音闍浮檀金の立像の長七尺餘なるを藏せり。其優

藥師寺東塔

秀なる金堂の三尊を凌駕す。（第三十一圖甲）東塔（第三十一圖乙）は當時伽藍建築の遺物、三重なれど、裳階を有するが爲め、恰も六層塔の觀を爲せり。組物式は法隆寺雲肘木式より三手先式に進まんとする過渡時代の手法を顯はし、法隆寺に欠けたる小天井を備ふれど、次期に生ぜる支輪はこれを缺き、肘木の下面には法隆寺雲肘寺の痕跡を認むべき彫刻を有せり。塔尖の水烟には、天人の空中に飛翔するの狀を刻し、纏衣翻つてその輪廓を作り、頗る雄麗の致を極む。蓋し本邦無二の逸品なり。而して九輪の銅柱には、舍人親王の書せる銘文を刻せり。塔と相對して、佛足堂あり。中に、有名なる佛足石あり。其上に足蹠を刻めり。後方に立てる佛足石碑は、佛跡の傳來功德及び呵嘖生死の和歌十七首を刻せり。要するに、唐招提寺藥師寺の二寺は、古代を研究するに於て實にかの寶庫と稱せられし法隆寺に次ぐと稱すべき也。

極樂院

歸途は大安寺村に、七大寺の一にして今は全く荒廢し盡せる大安寺を訪ひ、それより、田圃の間を北に進めば、十五町餘にして、奈良停車場に達す。更に、猿澤池の畔に戻れば、其南二町許に、極樂院あり。其南三町餘に元

新薬師寺

興寺あり。これまた七大寺の一にして規模頗る宏大なりしも、今は全く廢頽して見るに足るものなし。其附近に、十輪院璉城寺福智院等の諸寺あり。されど此附近見るべきもの、新薬師寺を以て第一と爲す。聖武天皇眼病卒愈祈願の爲め行基に詔して、東大寺大佛殿造營の殘木を以て建立せしめ給ひしもの、本堂(第三十三圖乙)は依然として昔の儘にして、特別保護建造物の一なり。中に、薬師如來座像十二神將塑像(第三十四圖甲)を安んず。其他薬師如來銅像千手觀音像絹本の佛涅槃圖等、觀るべきもの多し。此寺の東南九町を隔て、百毫寺あり。後方に聳ゆるは高圓山にして、春日離宮のありしところ、月萩の名所にして古來吟咏多し。

沿革

今日の奈良市と王朝時代の帝都たりし奈良那羅、寧樂、平城、諸樂、乃と樂、那、其、平、等に作るは、其の位置疆域に於て大に異なれり。所謂青丹よし奈良の都の跡は、今生駒郡都跡村大字佐紀の地方に存し、字石田水ヶ尻掛辻大頭東大宮八ノ坪九入手五反田大宮二條垣内等の地は、實に平城京の區域内に在りしものなり。奈良の名稱の始めて史に見えたるは、崇神紀十年九月の條に、武埴安彦妻

奈良の名稱

率川宮址

垂仁成務の御陵

平城遷都

吾田媛と俱に謀反し、安彦精兵を率ゐ進んで那羅山に上りて官軍と戦ふ、時に官軍屯聚して草木を蹂躪したりしかば、其の山を呼んで那羅山と云ふと、是れ實にこの名稱の由來する所なり。平城坊目遺考に今の奈良坂より半里許西、法華寺より山城國木津へ出づる道の東是れ即ち那羅山なりと見えたり。此の地方上古にありては開化帝春日率川宮に治せり。その宮址は今日の春日神社四恩院等の境域と爲りしもの、如し。又大同帝の御陵は奈良市油阪地方町に存す。垂仁帝の菅原伏見東陵は都迹村大字尼ヶ辻にありて、實に平城京の右京三條の邊なり。其の他同皇后日葉陵媛の狭木之寺間陵、成務帝の狭城盾列池後陵、神功皇后の狭城盾列池上陵の如き、皆今日の平城村大字山陵の地にあり。是等を以て推考すれば、此の地方が上古より既に開けて帝室と關係ありしことを知るべし。

持統帝ゆかりの紫色深き藤原宮を今日の高市郡鴨公村の地方に翫め、此に都すること三世十餘年なりしが、世運の進歩は茲に平城遷都を促かすに至りぬ。始め文武帝の慶雲四年遷都の議ありしが、會崩御の事ありて果さず。次

て元明帝位に即き和銅元年二月遷都の大詔煥發せられぬ。

朕祇奉上立君臨宇内以菲薄之德處紫宮之尊常以爲作之者勞居之者逸遷都之事必未遑也而王公大臣咸言往古以降至于近代揆日瞻星起宮室之基卜世相土建帝皇之邑定鼎之基永固無窮之業斯在衆議難忍詞情深切然則京師者百官之府四海所歸唯朕一人獨逸豫苟利於物其可違乎昔殷王五遷受中興之號周后三定致太平之稱安以遷其久安宅方今平城之地四禽叶圖三山作鎮龜策並從宜建都邑宜其營構資須隨事條奏亦待秋收後令造路橋子來之義勿致勞擾制度之宜合後不加。

宮城造營

かくて同年九月帝親ら其の地に巡幸して地を相し給ひ、正四位上阿部朝臣宿奈麻呂從四位下多治比真人池守を造平城宮司長官と爲し、從五位下中臣朝臣人足小野朝臣廣人小野朝臣馬養等を以て次官と爲し、從五位下坂上忌寸忍熊を大匠に任じ、判官七人主典四人を定めぬ。十月に宮内卿正四位下犬上王を伊勢大神宮に遣し、幣帛を捧げて平城宮造營の事を奉告す。次で菅原今の生駒郡伏見村及びの民家九十餘戸を遷し之に布穀を給せり。是れ即ち造宮の爲め

春日の烽

なり。爾來車駕屢此の地に行幸して或は宮地の鎮祭を行ひ、或は從駕京畿の兵衛戸の雜衛を免じて新京の百姓を綏撫し、或は平城宮司に敕して若し墳壘を發掘せば、直に埋斂して露棄することなく幽魂を慰めしめ、又た百姓の動搖するを感憐して當年の調庸悉く之れを免しぬ。此の如く銳意造宮の進捗を謀り和銅三年正月に至りて大極殿成り、同三月始めて都を遷し給ひき。然れども工事は未だ全く竣功せしにあらず、されば四年九月敕して諸國の役民造宮に勞して奔走するもの多く、禁止すれども止まず、殊に宮垣未だ成らず防備亦た備はらざるを以て、權りに軍營を建て、兵庫を禁守せしめ、從四位下石上朝臣豐庭從五位下紀朝臣男入粟田朝臣必登等を將軍と爲し、又た春日の烽を設けて平城に通報せしむ。是れ實に飛火の濫觴なり、即ち古今集に著はれたる春日野の飛火の野守出で、見よ今幾かありて若菜つみてんてふ春日野は、興福寺以東春日神社若草山の地方なり。造宮の大工事は翌五年に及んで完成せしもの、如し、即ち此の年には屢諸國司に詔して役夫郷國に還る途上の便を謀らしめ、又た東西の二京に始めて史生各二員を置きたり。

平城京の廣袤

區劃
條坊
大路

初め推古帝の朝に隋唐との交通大に開けてより、彼の文物制度は陸續我邦に輸入せられ、我之に模倣し更に同化するに至りしなり。故に平城京創立の當時に於ける制度の如きも、先進國たりし唐土の制に倣らひたり、實に後段述ぶる條坊の制此に條里の制と云はず、是は坊は里に當るの如き、孝徳帝の時輸入せられてより轉々して終に我邦都市の制度上に大影響を及ぼせり。又た班田の法後ゆの如きも彼の井田或は均田の法より由來したるものなり。此等の制度の上に建設せられたる平城京の廣袤を按ずるに、東西三十二町、南北三十八町の長方形なりし如し。工學士關野貢氏の調査に據れば、一町は方四千丈にして道路を加へて平均四十二三丈なりと。尺は天平尺にして今此廣袤を有せし奈良京は、中央にありて南北に通ずる朱雀大路を以て左右兩京に分ち、
左京は東にありて東京とも云ふ、更に全京を九條八坊に區劃す。條は東西に通じて幅四坊は南北に亘りて亦幅四町あり。最北端の區劃のみは幅三町にして東西に通ず、即ち北邊北邊の有無に就ては議論ありにして其北は北京極なり。かくて東西に通ずる大路は、京極大路より北一條南一條二條三條以下九條の諸大路

坪

平城京の境域

あり。又た南北に通じて朱雀大路と並行するものは之を何と云ひしや詳ならざれども、北浦氏は之を何坊の大路と云へり。坊を算ふるには朱雀大路を中心として、左右に各一坊二坊三坊と稱し四坊に至りて盡く。然れども靈異記に左京六條五坊の名見え、興福寺緣起山階寺流記には三條七坊の稱あり、此等の坊は東京極外の坊目なれば又た固より當然の稱なり。條坊の大路交錯して劃する所は四町平方にして、更に之を一町毎に小路を東西南北に通じて、一町平方づゝ十六區に分ち、此の一區を呼んで坪と稱す。されば一處を指定するに、左右京何條何坊何坪と云へば確かに其の位置を定め得るなり。

平城京の境域を現今の地名に對照して之を察するに、其の東京極は奈良市手貝雲井坂より春日神社一の鳥居に通ずるの道これなり。西京極は生駒郡伏見村西大寺及び菅原の西方に在りしなるべし、今は古徑全く廢滅して其の跡を詳にしがたし。北京極なる北邊は大奈閉小奈閉水上池を横過して、成務孝謙兩帝御陵の間を通じ居りしものなり、而して北一條大路は故徑を按じて伏見村西大寺附近より東方佐保村法華寺の邊に至れるを知る。又た南京極即ち

羅城門址

九條大路は添上郡辰市村九條邊より郡山町大字九條に向ひ、廢徑の斷續せるを見て察すべし。朱雀大路の南大門たりし羅城門は郡山町大字九條の東にありしなり、大和志に耕田の礎石羅城門の銘あるを得て此の所を來生と字すと云へり、以て其の境界を略察知するに足らん。又今今の奈良市三條通りは古の三條大路に一致するもの、如し。今大日本地名辭書の説く所を見るに、左京二坊大路は三條以南に於て大安寺村の南に沿ひて存す。左京一坊大路は三條南北に於て佐保川西畔に傍ひて存す。朱雀大路は滅して跡なし。右京一坊大路は都跡村佐紀の南に徹く存す。右京二坊大路は佐紀の西より南方一路洞通し、齊音寺三條六條等を経て郡山町九條に至る、號して佐紀大路と曰ふ。右京三坊大路は伏見村垂仁陵南より六條七條九條まで廢徑依然たり、其九條民家の間に辻あり縦横の交叉を爲す。二條大路は奈良市以西今屈折すと雖ども、伏見村菅原に至るまで猶存在を徵すべし。三條大路は春日大宮登大路と相通じ、伏見村垂仁陵の邊まで儼然たる坦道あり。(三條坊門も奈良市より佐保川畔まで存在す)。四條大路五條大路は左京奈良市に故徑あり、右京には亡

羅城門址

び招提寺の南に五條の大字を存す。六條大路は左京三坊大安寺南より右京三坊藥師寺北に至るまで存し、藥師寺の北に六條の大字存す。七條大路は廢滅し、右京三坊に七條の大字を存するのみ。八條大路は廢滅し左京二坊八條の大字を存するのみとあり。

平城宮址

次に其の宮址を考ふるに、奈良名勝誌の記する所に從へば、南は二條大路より北は北邊を包含して北京極に達し、東は左京一坊大路より西は右京一坊大路に及び、其の周圍には平安京の如く十二門の設けありしが、其の名稱の如きは詳ならず。今添上郡佐保村法華寺の西南田畝の中に平城宮大極殿遺墟の標柱あり、此の附近田面より高さ六尺許にして、東西二十一間南北七間の地なり俗に大黒芝と稱す實に大極殿址なり。其の後方又小芝地あり、是れ小安殿の遺址なるべし。其の他遺跡の考ふるに足るものなきにあらず。殊に土俗今猶大宮と稱し、神聖の地として耕耘せざる所あり、實に大極殿遺墟の左方に當りて樹木叢生す、是れ即ち皇居の遺址なるべし。千有餘年後の今日記録の詳載を欠きて其の審かなること知りがたしと雖とも、現存する種々

皇居址

大極殿址

の遺址に就て察すれば、平城宮址は東方は今の字東宮の地より西は大宮に及びて七十丈に亘り南北は百丈に及びしもの、如し。其の中に大安殿は大極殿と別なり一に前殿と云ふ即ち平安京大内裏の紫宸殿に當る正殿あり、其の後方に中安殿あり、更にその後内安殿あり、其の他皇后宮中宮院内院等の諸建築ありしならん、而して是等の周圍には平安宮城の如く、築地のありしことは殆んど疑を容れず。小安殿の前面にありし龍尾道、其の他十二堂中門朝集殿閣門歩廊等の遺跡歴然今猶見るべし。

京外の三班田

平城京疆域外の地には班田の法行はれ、京北京南京東の三班田あり。京北班田は北京極より始まりて、今日の秋篠村より山城の相樂川に及び四條六里あり。條は南北六町を云ひ、里は東西六町の稱なり、一里を更に六分して其一つを坪と稱せり。京南班田は九條大路以南にありて、今日に九坪十六坪廿七八坪單に七八坪と云ふ等の字となりて存するもの、是れ皆當時の班田に起因したる者なり。京東班田も同じく東京極以外の地にして八條六里ありしなり。後是の制大に紊亂せしとは云へ猶全く滅せしにはあらざるなり。斯の

興福寺

如く都城の制班田の法、皆隋唐の流を汲みて大に整頓し、皇室の尊嚴、國家の體面は前代に増して其の光彩を加へぬ。加ふるに奠都の後興福大安元興藥師の諸大寺相次て京地に移し建てられしかば、京師は一層の美觀を添えたり。

大安寺

興福寺は今日奈良市の中央にあれども、其の初め藤原鎌足齊明帝の三年に山城國山科今宇治の山科村の地に一寺を創して山階寺と稱せしが、天武帝の元年大和國高市郡厩阪今高市郡白根村大に移して厩坂寺と云へり。元明帝奈良に遷都するに及び、和銅三年之を今の地に移して興福寺と改稱し、歷朝の崇信頗る深く又た藤原氏の氏寺として隆盛を極めたり。大安寺は今廢亡して僅に村名となりてその名残を止む、實に和銅三年高市より平城京左京六條三坊の地に移されたるなり。又た元正帝の養老二年には法興寺を平城京に移し、新元興寺と稱して左京五條四坊の邊にありしも今は全く廢墟となりぬ。靈龜二年には豐浦寺を、新元興寺の西南大安寺の東に接したる地に移建して本元興寺と改稱す、今は亡びてなし。其の他高島井之上町に現存する新藥師寺の建立あり、或は藤原不比等鹿島神を春日山の麓に祀りし等の如く、平城京は其

本元興寺

新元興寺

恭仁京址

の近郊を併せて壯嚴の觀を備へたるや疑なし。かの萬葉集に見えたる、咲く花の匂ふが如く今盛なりとは、蓋し此の頃の盛時を詠ぜしものなるべし。

然れども奠都後三十年即ち聖武帝の天平十二年十二月には、山城國相樂郡恭仁郷津今木に經營して宮殿を作り、翌年三月平城の兵器を遷し、次て詔して平城の二市をも移して此に恭仁京を帝都と定め、賀世山西大道より東を左京と爲し、西を右京と爲す。今其の京城を詳にしかたけれども、或は曰く宮城は瓶原に在りしなりと、名跡志は法華寺野加茂野を宮墟なりと云ひ、山城誌は木津加茂瓶原上狛の四村を其の域内なりと爲す、河田氏の説によれば恭仁宮址は木津の内大路の邊にして、左京右京の形存す、即ち左京は立簡尻と字し右京は切通しと字す。按ずるに木津内大路は古の泉橋の大路にして即ち宇治大路なり、而して賀世山西大道が左右兩京を分ちたるより考ふれば、此の大路は恭仁京の中央にありて所謂賀世山西大道なりと。此の新京造營に費す所實に莫大なりしが、未だ完備を見ずして天平十五年に其の工事を中止し、帝更に翌年正月群臣を會して恭仁と難波と孰れか便なるやを諮問せらる。時

難波遷都

都を奈良に復す

東大寺

に多くは皆恭仁京の便を云ふ。然れども帝此の年二月難波に幸し、其地に都を遷されぬ。是に於て平城京は大に衰微したり。されば萬葉集に天平十六年寧樂京の荒墟を傷める歌に、

世間乎常無物跡今會知平城京師之移徙見者、
とあり。又た恭仁京の荒廢を詠める歌に、

三香原久遷乃京者荒去家里大宮人乃遷去禮者、
と見えたり。然れども同十七年五月には復た恭仁京の市人を平城京に移し、帝亦た行幸し兵器をも平城京に運び、こゝに平城の舊都に復しぬ。

是より先天平十三年奈良に東大寺を建立し、同十八年勅して金銅盧舍那佛を造れり。爾後孝謙帝の如きは屢行幸して或は五千僧を會して讀經せしめ、或は二萬燈の供養を行ひ常樂會を設けられぬ。是れ實に大日本總國分寺なり。又た手向八幡を宇佐より奉請して東大寺の鎮守神と爲し、或は天平寶字三年には唐招提寺を右京五條三坊今都跡村大字五條の地に創建し、天平神護元年には西大寺を創めて、漸く復た昔日の盛況を呈するに至らんとせしが、桓武帝の延

平安遷都後の奈良

曆三年長岡今の山城國乙訓郡向日の邊の遷都、次て十三年平安今の京都に奠都するに及んで平城京は全く廢都となりぬ。此の後の状態は之を延暦十七年の勅に見るに、平城の舊都は元來寺院多くして僧尼の輩濫行多かりしかば、國司に命じて嚴に檢察を加へしめたり。又た平城嵯峨二帝の如きは、一旦平城の舊京に復せんとせられしが果さずして止みぬ。殊に弘仁元年に於ける藤原藥子の陰謀は平城京回復を計りしものなり。かくて桓武已降數代を経て清和帝の朝に至りては、平城の舊都は甚だしく荒廢せるを知る、即ち貞觀六年の詔には、都城道路變爲田畝の句あり、廢頽の状想ふべし。况んや爾來星移り物變りて茲に千有餘年の久しきを経たる今日に於てをや。是れ王朝時代に於ける平城京の沿革なり、而して名は均しけれども今日の奈良市は平城京より發展したるものにはあらざるなり。今次に今日の奈良市の沿革發達を述べん。

奈良市の起原

平城坊目遺考に云く今の奈良市奈良は往古寺社の領地にして、興福寺東大寺別院新元興寺伽藍新藥師寺紀寺率川漢國眉間寺般若寺等の境内にて、奴婢被官の家居ありし所にして、平安遷都以來は春日東大興福寺に依頼し、吐田よ

平城京の大荒廢

東大寺城

り南は興福寺に屬し、由留木より北西は東大寺に屬し、寺林より南西は悉く元興寺に屬したり、其の餘は率川の森田畑竹叢にして偏に田舎の如し、されば民家町並の今日の如く續きしにはあらざるなり。實に東大寺の如きは其の寺城西は藤橋大路より東は手向山を包み、北は般若野より南方春日神社の境域に接して大小の塔宇此の間に建築せられしものなり。今日の奈良市が是等の諸寺と密接の關係あること既に述べたるが如し。されば此等諸寺殊に著名なる東大興福二寺の沿革を説くは強ち無用のことにはあらざるべし。

南都

東大興福の二寺は歴代の尊崇甚だ厚く、延暦園城二寺の北嶺の稱に對して南都と稱したり。興福寺は藤原氏の氏寺にして、其の氏神たる春日神社は實にその鎮守なり。されば藤原氏の盛時に當りてこの寺社が如何に隆盛を極めたりしかは推知し得べし、而して其の餘弊は延いて僧侶の驕暴濫行となり、刑法を畏れず佛律を顧みず、互に雲合霧集して凶暴を逞ふせり。冷泉帝の安和元年東大興福の二寺領田を争ひて兵を構へ、長保二年には興福寺の僧徒添下今の生駒郡の生を騷擾し國守之を劾奏するや、僧徒相率るて入京し強訴するに至

東大興福二寺の争

僧徒の亂行

春日神木騒動

れり。殊に後冷泉帝の康平六年には興福寺の僧靜範、成務帝の山陵を發掘して寶物を盜めり。是の頃に當りては延曆園城二寺も亦た相和せず、互に僧兵を蓄へて相闘ぎぬ。鳥羽帝の永久元年三月興福寺の僧五千人、春日の神木を奉じて勸學院に到りて強訴する所あり。翌月延曆寺の僧二千餘祇園北野の神輿を擁して入京し、興福寺の僧徒神人を凌辱すと訴へ、直に大炊殿の南門に迫り喊聲天地を震動す。朝廷如何ともする能はず悉く其の請ふ所を容る。是に於て興福寺の僧徒亦た迫り請ひ、二寺將に相戦はんとせしが、檢非違使平正盛宇治に興福寺の僧兵を邀ひ撃ちて之を破りしかば、事甚だしきに至らずして止みぬ。然れども爾來神木神輿の騒動は殆んど連年絶えざりき。

清盛僧徒を惡む

平清盛治を六波羅に開き漸く諸寺を抑制せしが、諸國の源氏起るに及んで僧兵等源氏に應援せり。初め以仁王の兵敗るや、攝政藤原基通興福寺の僧徒王に應援せしを以て、使を遣して之を諭さしめしに、僧徒等却て之を凌辱して答へて曰く、吾曹清盛法師を撃たんと欲するのみと。清盛之を聞て大に怒り兵力を以て之を壓服せんとし、治承四年十二月瀬尾兼康をして之を討た

平重衡東大興福二寺を燒く

松永久秀東大寺を燒く

しめしが却て破らる。依て直に藏人頭平重衡をして、興福東大二寺を攻めしむ。僧徒等兵を吉野十津川に募り、柵を設けて防戦せしが、終に敗らる、重衡風に乘じ火を放つ二寺こゝに燒燼し、僧徒の死傷するもの甚だ多し。此の時園城寺も亦た平清房の爲めに焚かれたり。是れ實に佛寺が武人の爲めに困められし初めに於て、是より東大興福の二寺は復た昔日の如く甚だしく暴威を振ふを得ざるに至り、延曆寺獨り京畿に盤據しぬ。

鎌倉時代足利時代を経て戰國の代となり、正親町帝の永祿十年松永久秀三好黨と相闘ふに際して、三好政康岩成左通等兵を率ゐて南都に抵り東大寺に陣す。久秀亦兵を出して南都の地に戦ふこと連日勝敗未だ決せず、久秀夜に乘じて東大寺を襲ひ火を縱ちて之を燒きしが、政康よく拒ぎ終に之に克つ、東大寺こゝに再び兵燹に罹りぬ。翌年織田信長近畿を略定して入京するや、久秀歎を信長に送りて大和の守護代に任ぜらる。是の頃に至りては興福東大已下の諸寺及び神社の封領は、皆多く武門の沒收する所となれり。されば今の奈良市の地此の頃より人民漸く移住し工商軒を列するに至りしならん。豊

奈良の町司

臣氏織田氏に代り政權を握るに及び、秀吉異母の弟羽柴秀長をして大和を領せしむ。秀長郡山城に治し、家臣井上源五郎定利を南都の町司に任じて之れを治めしめ、南都の民戸に三千四百石の屋地子を課せしめたり。是に由りて察すれば當時已に一都會の形を成せしこと明かなり。又た秀長の母は天正十七年一萬石を興福寺に寄進して四町四方の堅固なる牆垣を築造せり。此は明治維新の際破却しぬ。

奈良の七郷

今平城坊目遺考に引用せる、光明院僧正實曉の記に係る南都七郷記を見るに、足利時代の末路即ち後奈良帝の享祿前後に於ける、奈良の七郷を擧げたり左の如し。

- 南大門郷 食堂郷
- 東城戸 西城戸 脇戸 高御門 鳴川 花園 井上
- 新薬師郷 塔郷
- 上高島 下高島 新薬師 京終 肘塚 中辻 二坂
- 東御門郷 金堂郷

- 中村 上り大路 東里 西野田 東野田 芝 重持院
- 北御門郷 講堂郷

- 菖蒲池 下北小路 南法蓮 宿院 新乘院 押小路
- 穴口郷 北圓堂郷

- 苜阪北方 高天北方 阿彌陀院 内侍原 三條 東芝辻 西芝辻
- 西御門郷 西金堂郷

- 小西 角振北方 林小路 高天南方 苜阪南方 今辻子北方
- 不開門郷 南圓堂郷

- 今辻子南方 下三條 角振南方 椿井橋爪 橋本 餅飯殿

是れ等七郷は皆興福寺の支配に屬したるものにして、其の他郷村の東大寺領或は元興寺領に屬せしものあらんも、舊記の探ぐるべきものなし。以上の町名は享祿の頃に存在せしが、今日の如く繁華にはあらずして、唯だ孤村の如くなりきと。

徳川幕府の初めに當りて、郡山住居の工商相率ゐて此地に來住せしかば、

奈良町奉行

肆塵軒を並べ市街般賑となりぬ。されば慶長五年大久保長安始めて奈良町奉行と爲り、幕府直轄地として市政を布きたり。奉行所址は今の鍋屋町黒門通宿院町南法蓮町北魚屋西町に跨れり。奉行は一員にして與力七騎同心二十五人郷同心十六人等を屬せしめたり。明治元年に至りて停廢しぬ。家光將軍の時即ち明正帝の寛永十一年閏七月、奈良の町家の地子二千四百餘石及地方屋地子四百十餘石を免除せり。又た此の頃より諸侯及び士大夫の服制定まりて、從來此の地に産せし晒布が禮服の料となりしかば其の需用頓に増加し、明暦年間町奉行初めて晒布の尺幅検査の法を行ひ、橋本町に生布判場即ち検査所を設けて其の製造を監せしめたり。この検査記録に據るに、元文元年に生布二十一萬八千七百六匹、幅狭布一萬二千八百八十七匹、合計二十三萬八百九十三匹、天保十三年には十一萬五千六百二十四匹、明治元年には五萬二千五百十四匹、同十五年には二萬二千二百匹なりと、以て徳川時代に於ける盛況察すべし。

元禄年間の奈良

今元禄十一年六月御改町記に據るに、

物町數二百五町

右之内百三十七町、奈良町此内白山辻子西新在家號所城戸川上出屋敷町

此四町者、町役不相勤、

二町 大乘院御門跡下。 三十七町。興福寺下。 六町。成身院下。

四町 般若寺町一町。般若寺下入組。 十二町。 社家禰宜下。 三町。十三ヶ寺下。

一町 御代官所奈良坂。 三町皮多町。已上。

一、寺數 合六十二ヶ寺。 内御朱印十四ヶ寺

一、堂數 合二十七宇

一、宮數 合六十社

一、號所 合百六十九軒

右之外御役者能役者無役の分十二軒云々

と見えたり。以て當時の一斑を窺ふに足らん。

奈良の地が名勝舊跡に富むは皆人の能く知る所なり。加ふるに千古優秀の建築あり彫刻あり繪畫の存するあるを以て、我邦の工藝美術の研究参考の上

正倉院

に重要な地たり。殊に正倉院は我邦無二の寶庫なり、其の創立を距ること茲に千百有餘年後の今日に至るまで、未だ一たびも回祿の災なく保存せられ、所藏の寶物無慮三千點の多きに及ぶ。此の寶庫は天平勝寶八年五月二日聖武帝崩御せらるゝや、其の七々の忌辰に帝の冥福を祈るが爲めに、孝謙帝光明皇后より盧舍那佛に獻納せられし御物を藏めんとして造りしものなり。三稜の大材を疊み四隅を井樓の如く組み合して建築せり、之は元と東大寺の所屬なりしが、明治維新の後帝室の有となりぬ。古來勅封倉にして其の開閉頗る嚴重なり。御物中に於て閑斎待の香木は、足利義政寛政六年織田信長天正二年が敕許を得て其の寸片を截りたるは世に喧傳する所なり。近くは今上陛下明治十年奈良行幸の際之を截らせ給へり。

奈良縣を置く

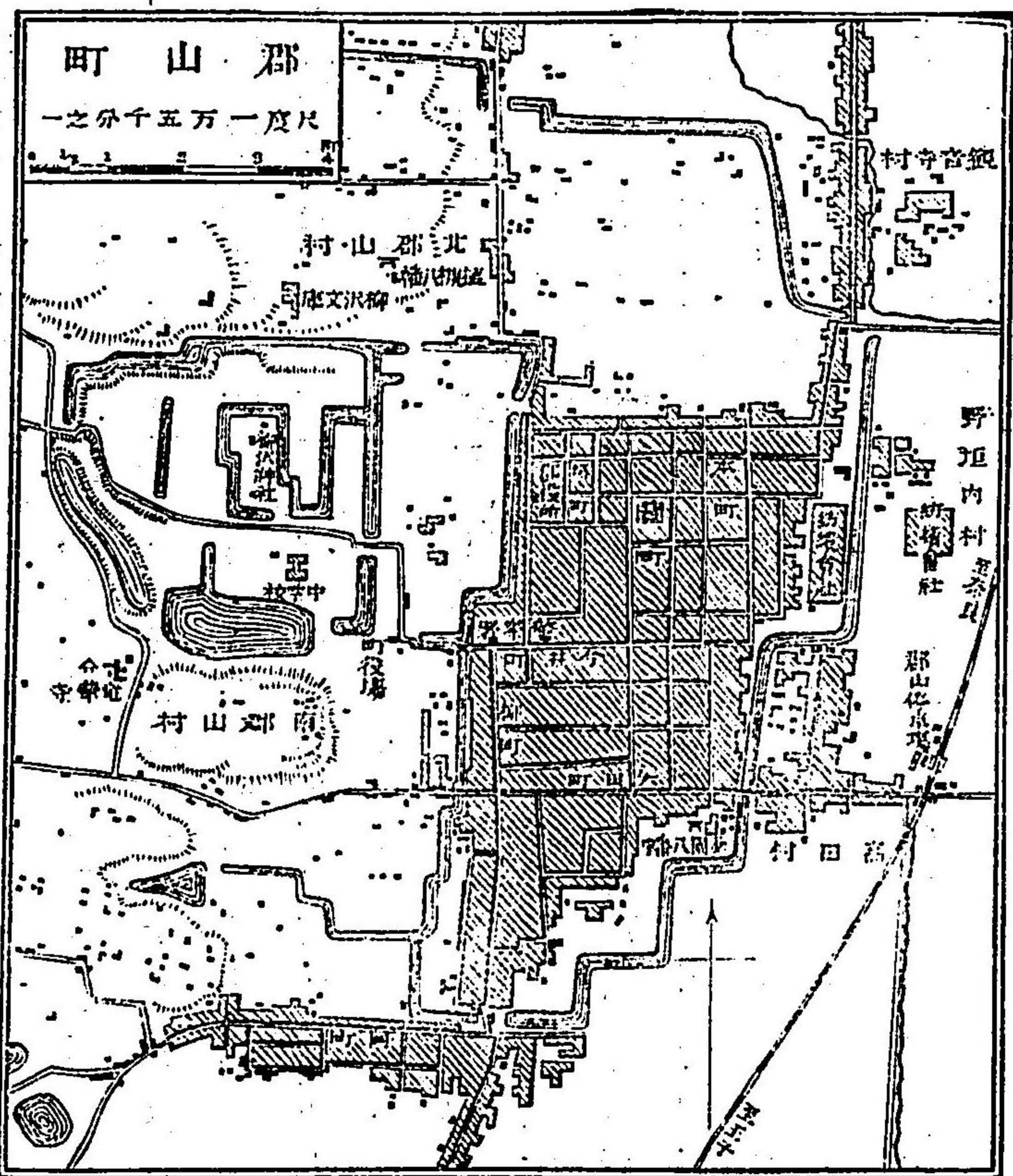
明治元年奈良奉行廳を廢し、閏四月奈良府を置き園地公許知事たり。同三年奈良縣となる、藤井千尋權令たりし時興福寺食堂を破却し、其の跡に師範學校を新築しぬ。四年廢藩の後は奈良縣大和全圓を管轄したりしが、九年廢縣となり堺縣に屬し師範學校亦た堺町に轉じたり。十四年更に大阪府下に隸

奈良縣再置

公園

博物館

し大阪裁判所奈良支廳を設け、次で奈良治安裁判所を添置せり。二十年十二月一日奈良縣を登大路町興福寺東金堂の北に再置す、實に興福寺食堂の舊地なり。次で二十二年四月一日奈良地數町を合せて奈良町と改稱せり。此の際從來ありし北法蓮町は奈良より分離し法蓮法華寺半田開合併して佐保村となりぬ。又た登大路町野田町の合併して春日野村となりしも此の頃なりき。同十三年興福寺境内を以て公園と爲し、二十二年一月に及んで東大寺境内春日山芳山花山も亦た公園地となれり。下三條町北側より率川阪上御陵への道路開通は實に十七年の事なり。奈良帝室博物館は二十五年六月始めて其の工事に着手し、二十七年十二月に至りて落成す。春日野大華表東北に在りて總坪數四百六十四坪餘、中央左右の三館十餘室あり、歴史美術美術工藝の三部に分ち珍寶逸品の陳列頗る多し、殊に古代の彫刻物に至りては大和最とも其の遺物に富むを以て、その陳列する所のもの皆是れ秀逸の絶品ならざるはなし。實に本館は東京京都のそれと並びて本邦三博物館の一なり。是れ奈良市沿革の概略なり。



奈良市を出て、
關西鐵道の幹線を
西南に下れば、最
初の停車場は郡山
驛なり。郡山町は
管内第二の都會に
して、人口一萬三
千九百餘を有し、
生駒郡役所を始め、
地方裁判所税務署
中学校あり。市街
は清楚にして、瓦
葺相櫛比し、中央
に一城址を存せり。

維新前は柳澤氏歴代の城邑にして、町内に藥園八幡神社植槻神社柳澤神社等あり。此町は金魚を以て名産とす。筒井順慶の居城とせる筒井城址は筒井村にあり。

この町より西南、二十町餘、小泉あり。今、片桐寺村に屬せり。此の東を流るゝ小流を富小川と稱し、其上流は上古長髓彦の占據したりしところなりと傳ふ。この附近古寺名蹟少なからず、西方丘陵の半腹に松尾寺あり。その北に矢田寺東明寺あり。然れども先、訪ふべきは岡本の法起寺なるべし。法起寺は法相宗にして、聖徳太子岡本宮の遺跡を推古天皇の草創せしもの、本堂に十一面觀音の像を安置せり。この境内に存せる三重塔(第三十九圖甲)は、推古朝最古の建築を研究するに就いて、最も價值あるものにして、推古時代の遺物は、美術の寶庫たる法隆寺を除きては、この塔及び法輪寺の塔の他に、その髣髴をも認むること能はずと云ふ。塔は高さ十一間半、方三間半にして、其形は頗る古風なり。法輪寺はこれより西南八町、富郷寺三井にあり。三重塔(第三十九圖乙)は前の法起寺の塔と同型にして、共に推古時代に屬するもの、

法起寺

法輪寺

法隆寺

金堂には法隆寺の本尊と其式を同うしたる薬師如來の坐像を安んぜり。其他、夢達觀音吉祥天楊柳觀音虚空藏菩薩等あり。此寺は古義真言宗にして、推古天皇聖德太子の造立せしものを御子山背大兄王更にこれを増築せしものなりといふ。

これより法隆寺は畿かに八町を隔つるに過ぎず。

我朝の古美術は奈良の古刹、ことに法隆寺にその粹を集めたりとは、學者の皆な唱道するところ、蓋し世界の美術寶庫たるは、論なきに似たり。汽車の便を假れば、法隆寺停車場より十餘町、人は車窓より田舎町の屋上高く、風情ある並木松の彼方、一塔の高く空を摩するを認むるならん。これ、即ち往昔の班鳩寺にして、南都遊覽者の殊に憶れわたれるところなり。寺は生駒郡法隆寺村大字法隆寺に位し、法相宗の大本山にして且つ南都七大寺の一なり。現今の寺域二萬八千四百餘坪、實に稀有の大刹と稱するを得べし。始め聖德太子、用明天皇の勅によりて新堂を創建し、其後、推古天皇元年より十五年にわたりて増築し、其規模の大なる當時この寺の右に出づるものなかり

金堂
五重塔

しといふ。本邦古美術中、其舊態を存せるに於て當寺に若くものなかるべく、従つて特別保護建造物及び國寶の數頗る莫大にして、建造物は二十一棟、國寶は一百十九點の多きに達せり。特別保護建造物の一なる南大門を入りて、直ちに中門(第二十七圖甲)に至る。桁行六間五尺、梁行四間二尺、樓門造にして、同じく保護建造物の一にかゝり、樓上に孝謙天皇の供養せられしと稱する百萬塔多數を藏す。仁王の像は止利佛師の作と稱す。門を中心として、昔のまゝなる回廊左右に連り、北折して金堂及び五重塔を包み、直ちに其の後方なる講堂に達し、ちのづから一廊を形成せり。(第二十八圖)金堂は頗る偉大宏麗なる建築にして、兩層を成し、下に一階の裝屋を加へたり。其の形の整調にして、其規模の儼乎たる、これに對して無限の壯美を感じざるものは、蓋し稀なるべし。桁行九間二尺五寸、梁行七間四尺七寸、ことに觀る人の眼を驚かすは、堂内の四壁悉く畫くには四佛淨土の圖を以てしたること、是なり。西壁は阿彌陀淨土、東壁は寶生淨刹、北面の東壁は藥師刹土、同じく西壁は釋迦國土にして、自餘の壁には、菩薩の立像、羅漢の住所等を描き、天井裏に

壁畫

は蓮花を描けり。此壁畫の大作たる、かの羅馬の寺院に畫かれたる壁畫も斯やと思はるゝばかり、美術生ならざるも、猶去るに忍びざらしむ。從來、此壁畫の時代に關して種々の説あり、或は鞍作止利の筆とし、或は曇徴の筆と稱し、容易に一定せざれども、全部の作法趣味素より推古時代のものにはあらずして、其後に畫かれたるものと爲すを穩かなりとすべし。日本美術略史に曰く、「此壁畫は印度中部邊の圖様の多少支那に於て變化せしものを模範として、我畫工が適宜に之を金堂の壁面に配して畫き成せるものにして、實に非凡の大作、千二三年前東西交通の事績を證明し、當代藝術の進歩を示して、煥然たる光彩を世界の歴史に放つものと言ふべきなり」と。蓋し當寺寶物の一たる四天王紋錦旗、橘夫人厨子と共に頗る珍と爲すべきものなり。此他、堂内に高さ數尺の壇ありて、上に數多の佛像を安置せり。その重なるものは、此堂の本尊なる釋迦金銅座像を第一とし、藥師金銅座像彌陀座像四天王立木像阿彌陀三尊金銅座像等皆見るべし。されどその最も卓れたるは玉蟲厨子に若くものなからん。厨子は木製にして高さ七尺五寸、高さ臺座の上に立てる

一箇の小宮殿なり。細かなる茅葺造、屋頂一雙の鴟尾を戴き、臺座の四面及び宮殿の三方に開ける扉并に其の後壁には悉く止利式の漆畫あり。其圖様は舍利供養の圖、飢虎に肉身を啜はしむる圖、須彌山の圖、菩薩相好の圖等にして、蓋し本邦最古の繪畫なり。美術略史の評に曰く、「熟々其の圖様を見るに、全く想像的の畫にして、岩石は其端一定の方向に延長し、草花の如きも、其莖葉整として相並び、佛像人物の衣端も亦皆婉曲にして模様を性質を表はせり。想ふにかくの如き圖様は人をして奇異の念を起さしめ、其妙相に渴仰せしめんと欲する意に出でしものにして、畫家自身も亦既に信仰によりて、自然かくの如き想像を顯はすに至りしなるべし。中々此種の模様は日本支那朝鮮等東方亞細亞に於ける繪畫の特色とも言ふべきものにして、此の玉蟲厨子の古畫に於て既に其の意匠の胚胎するを見るべし。されど其圖中の佛像人物の如きは、面部及び手足細長くして、他の朝鮮式の彫像に類し、又其圖立彩色も總て素朴簡單にして、固より純粹なる支那本國六朝時代の様式とは認め難し。されば此圖は法隆寺の古記に、推古天皇の御厨子にして、橘寺廢滅の

大講堂

時送り來りしものと見えて、明かに製作のことを傳へざれども、全く當代の朝鮮風によりて、歸化朝鮮人などの書きしものなるべしと推斷せざるを得ざるなりと。而してこの厨子を玉虫厨子と稱するは、壁面以外の部分悉く玉虫の羽を布き、鍍唐草透彫の金具を以てこれを押へたるが故なりとぞ。されど今は歲月久しく其髣髴を辨ずる能はず。金堂を出れば、其西に五重塔あり。方五間、高二十五間、塔内四面に泥塑の佛像人物山水等の形を安んず。皆古代の製作にかゝり、工作彩色精美を盡し、古代の文明を知るの好材料なり。要するに、法隆寺の誇りとする所は、金堂五重塔中門の三を重なるものとす。これより後方に進めば、大講堂あり。金堂と同時の建立なれど、醍醐天皇延長三年雷火の爲めに焼失し、其後六十六年を経て、一條天皇の正暦二年に再建したるもの、即ち是なり。中に、本尊薬師及び日光月光四天王の木像を安置す。これを出れば、左方に鐘樓、右方に鼓樓あり。其構造共に二重造なり。中門より起れる回廊は屈曲して大講堂の左右に達し、金堂五重塔鐘鼓樓皆なこの中に聳え、其長さ百十九間三尺餘、其東を東樂門といひ、西を西樂

夢殿

門と稱し、巽坤兩隅にあるものを慶賀門と名づく。而してこの回廊に由りて圍まれたるを中院と稱し、東の一廊を東院、西の一廊を西院と稱す。中院を東に出れば、寶藏あり。所藏の寶物皆觀るべし。猶東して東院の境内に入り、禮堂より、直ちに夢殿に至る。夢殿は聖德太子の三昧定に入らせ給ひし所に於て、最初の建築は推古天皇の初年なりしも、其後、荒廢し、天平十一年に至りて再建、爾來貞觀の修理を経て、以て今日に及べり。回廊の殆ど中央に位し、八稜形の建築にして、各面各二間三尺を有せり。本尊救世觀音は立木像金色にして、太子等身の像と稱し、全體扁平にして、左右に鱗狀の粧飾あり。寶冠は金銅透彫にして、蔓草の模様あり。蓋し天下有數の佛像なり。其他、精巧なる木像甚だ多し。夢殿の後方に、御繪殿及び舍利殿あり。御繪殿の壁には太子一代のことを描き、文以てこれを記し、繪殿略記または際子五間略記と稱す。舍利殿には佛舍利一粒を安んじて本尊となせり。また、その背後に、傳法堂あり。佛像また多し。法隆寺の附近に、中宮寺あり、其南方に廣瀨神社あり。

龍田町

これより大阪街道を西に進めば、龍田町は蕭疎たる田舎町にして、瓦葺茅屋相交り、人口三千餘を有せり。町の西端を南に流る、龍田川(第九十一圖甲)は、古來紅葉の勝地として名高く、歴代の勅選歌集この地を詠ぜしもの多けれど、其風景は寧ろ平凡なり。流に架したる龍田橋の近傍には楓樹多きを以て、秋時は繡錦の美稍見るべし。龍田神社は官幣大社にして、龍田の本宮と稱し、龍田町に鎮座せる新宮と共に有名なる古祠なり。王寺村の南方八町許に、達磨寺あり。王寺は關西鐵道櫻井線の岐るゝ所にして、地勢自づから交通の衝に當れり。

信貴山

河内と境せる地には、葛城山脈北より南に亘り、先づ、生駒山信貴山の二嶺を聳立せしむ。而して此間に、暗峠十三峠の二路あり。龍田より西を指し、男嶽女嶽の二峯の高く眼前に立てるは、即ち信貴山にして、毘沙門天を安置せる朝護孫子寺はその山上にあり。王寺驛より登路一里餘にしてこれに達すべく、本堂には舞臺ありて眺望甚だ佳なり。寺は聖德太子の創建にして、かの楠公の母の祈請を籠めたるも亦此寺なり。寺に、繪巻物中の逸品なる傳鳥

生駒山寶山寺

羽僧正筆の信貴山縁起を藏せり。生駒山はその北一里餘にありて、その山腹に寶山寺あり。本堂の西北に巉岩屹立す。これを般若窟と稱し、役行者此に棲みたりと傳ふ。寶山寺の北二十町、俵口に長福寺あり。其南、一分に生駒神社あり。西南鳴川に千光寺あり。

櫛本町

更に奈良市に戻りて、上街道一帯の地を記せむ。この街道は奈良市より一直線に南を指し、東に並びて、春日高圓より纏向三輪山に至るの一小丘陵あり。奈良鐵道の線路は、街道と交叉出入して、名邑ある毎に、一停車場を置けり。其驛名を擧れば、曰く京終、曰く帯解、曰く櫛本、曰く丹波市、曰く柳本、曰く三輪、と。而して三輪停車場は關西櫻井線の終端驛櫻井驛と犬牙相望めり。帯解及び其附近には、帯解寺圓照寺龍泉寺等の諸名刹あり。櫛本町は人口四千餘を有する一名邑にして、町役場櫛本倉庫株式會社等あり。地に、柿本寺和途下神社檜神社等あり。物産は製茶稍盛なり。丹波市町は人口八千餘を有し、市街整正、人烟稠密なり。旅客はこの停車場に近づきて、東側數町を隔て、巨大なる數多の家屋の散點せるを認むるならん。これ、有

丹波市町

三輪町

名なる迷信教天理教の主教會及びその中學校にして、其北方、蒼松茂れる丘陵には、同教祖中山某女の墳墓あり。毎年正月六日より八日までの節會と、春秋二季の大祭に際しては、信徒各國より參詣し來りて、其數幾十萬人なるを知らずといふ。また、此町大字布留に、官幣大社石上神宮あり。社殿甚だ壯麗ならずと雖も、山に據り林を負ひ、境内清酒にして、神威自から高きを覺ゆ。柳本村には、柳本櫻大和神社長岳寺穴師神社等の諸名勝あり。又此附近に景行天皇崇神天皇の陵あり。崇神天皇陵は規模宏大なる車塚にして、其御溝の水は清くして岸を繞れる隄には櫻樹駢植、花時は詣者多し。(二十六圖甲)汽車の窓に凭りて西を望めば、烟霞斜に靡ける平野の中、中央に畝傍、右に香久山、左に耳無山の三小陵を望み、その風景の典雅を極めたる、宛然土佐風の名畫を見る心地す。三輪町は繁華なる都會にして、人口約三千餘を有せり。官衙は磯城郡役所稅務署地方裁判所出張所等あり。素麵は此地の名産なり。官幣大社三輪神社(第五十七圖甲)は三輪山の麓にあり。三輪山は滿山鬱蒼たる杉樹檜樹等を以てこれを蔽ひ、遠く望むも、猶よく之を辨ずべし。社殿は唯拜

長谷觀音

殿のみにして正殿なく、三輪山其物を以て直に神體と爲せり。城内の名勝に、三輪の檜原玄寶谷双本杉等あり。また、其庭には櫻樹多く、花時は頗る美なり。

長谷町

三輪山の背後は初瀬山にして、長谷の觀音は其山の半腹にあり。順路は三輪の停車場より三輪川又初瀬川を流りて、一里餘にして達す。此附近は都を奈良に置かれし頃、公卿百官の優遊一日を消するところとして、昔より其名高く、初瀬、泊瀬、初瀬川の名の萬葉古今の中に幾度となく吟咏せられたるによりても知るべし。金屋、脇本、黒崎出雲等の諸村落を過れば、長谷山の翠微は早くも眼前に迫り來りて、其半腹に凭れる大伽藍の瓦葺の髣髴を見るを得べし。長谷町は地形上甚だ重要なる交通の衝に當らざれども、流行佛なる長谷觀音を有するを以て、賽者を得意としたる商業頗る盛に、旅店など頗る大なるもの多し。寺に近くに従ひ、肆店町を挟みて、俗氣紛々、紅塵高く颯れり。町家を離れて左に二三の小堂を觀、直ちに眼前の二王門に達す。安置せられたる二王の木像は、蓋し六七百年前のものたるべしといふ。此寺の特

色は三折九十二間の長さ回廊を以て遠く本堂に達したるさまにして、廊下半は花崗石を以てこれを敷詰め、廊の角毎に風情ある鐵燈籠を掲げ、若し夫れ春宵月朧なるの時、獨りこの廻廊を逍遙すれば、古燈籠の火美しく處々の櫻花に映じ、其景、其意殆ど千年以前に身を置きたるがごとしといふ。本堂に至る間に、紀貫之故郷の梅あり、定家の墓俊成の塔あり。鐘樓には未來鐘と稱する古鐘をかけたなり。本堂は山の半腹に位して、南に面し、八棟造にして、桁行十五間、梁行十四間半を有し、中に十一面觀音を安置せり。内陣の圓柱、厨子の扉等皆金泥を塗り、頗る壯觀を極む。其他藥師堂愛染堂大黒天堂大師堂あり。往昔名に唱へられたる櫻花は今幾かに其面影を止むるに過ぎざれど、回廊の畔に培養せられたる牡丹は近時此地の奇觀として名高く、遠くより來りて觀るもの多し。寺また珍貴の寶物を藏すること甚だ多く、就中、鐫銅板千佛多寶塔のごときは、千年以前に於ける繪畫彫刻の好標本にして、當代の美術の研究に最も信憑すべき資料を供するものなりといふ。

宇陀の一郡はこれより東方に位し、神武紀に見えたる本邦最古の遺蹟は實

榛原

に此附近に多し。初瀬より東する五十町、古の墨阪なる西峠を越れば、かの有名なる榛原あり。今、此地方の一集落を爲し、人口五千餘を有せり。神武

松山

天皇が天神を祭り給ひしといふ鳥見山の靈時マツリトキの地は、今詳かにこれを知る能はざれども、往古は此附近より櫻井の東方なる外山ウチヤマの邊にわたりて、一帯鳥見の名ありしがごとし。榛原より道路二つに岐れ、一は大野三本松より伊賀の名張に達すべく、一は高井上田タカイノカミノ神武天皇カミヤマト兄弟を誅し給ひし血原チノの神末ノ地チを奉ホウして暫シく駐チ居ル命ノ天照大神アマテラスを經スて、直ナちに伊勢イセの一志郡イツノシノに出デづべし。松

室生寺

山は榛原の南方にありて、亦山間の一都邑を爲せり。これより櫻井に至る間の半阪は、即ち往古の男阪なりといふ。松山の西方に阿紀神社あり。倭姫命が天照大神を戴き、宮所を索め給へる時暫く鎮座し給ひし舊址なり。又其東南守道に高倉山あり、神武天皇の國內の賊勢を望み給ひし地にして、始めて大和宇陀に入り給ひし穿邑は、其東南なる宇賀志村即ちそれなりといふ。此の宇陀郡の山中、猶一名刹あり。室生村の室生寺即ち是なり。地は名張街道の大野より右に一里餘の奥、山間の小盆地に位し、頗る幽寂を極めたり。昔

時にありては、頗る隆盛を極めたるもの、如く、今日、大野の大野寺を室生の北門と稱し、高井の佛隆寺を室生の西門と稱するを見ても、山中伽藍僧房の多かりしことを想像し得べし。金堂及び五重塔(第三十五圖乙)は弘仁時代よりそのまゝに傳はりたる貴重の建造物にして、當時の美術建築を研究するものに必ず一訪すべきは論なく、ことに五重塔の如きは、其様式といひ、其彫刻といひ、奈良の諸寺に残れるものの最も價值あるものに屬すといふ。且、深山の中に位せるを以て、風景頗る俗を脱し、心神自から澄清なるを覺ゆ、と。室生の東北に、曾爾村あり。其上に聳ゆる山は古の國見嶽にして、神武天皇が八十梟師を誅したまひしところなりと傳ふ。

再び大和平野の中に出て磯城郡に戻れば、櫻井町は三輪と瓦葺相望み、其間幾かに十四町を隔つるに過ぎず。關西鐵道支線の終端驛に當り、交通の衝に當れるを以て、市況繁盛なり。人口五千餘あり。其西方一帶の地は、往昔の磐余の地にして、繼體天皇以後屢、皇居を奠め給ひし所なり。東、松山街道に、忍阪あり。神武天皇の大室を作りて、八十梟師を誅し給ひし處、神武紀

櫻井町

多武峰

詳しくこれを記せり。櫻井町を南に去れば、河西下の諸集落を経て、談山神社の一の鳥居に達す。これを過れば、位山の風光次第に美に、綠樹蒼蔚として盡猶暗し。これ、即ち多武峰なり。藤原鎌足の長子定慧入唐歸朝の後、公の遺志により、攝津の阿威山より移して此所に葬り、墓所に就きて寺塔を建てたるもの、これ當社の創立にして、藤氏の盛大なると共に、一門の尊敬を集め、漸次繁榮したるなり。其後、時に盛衰なきにあらざれども、社殿は甚だ壯麗にして、今猶ほ關西の日光と稱す。一の華表を過ぎて進めば、石磴數階、其兩側には、櫻楓枝を雜へて、その幾百株なるを知らず。春秋の景推見すべし。先づ、正面に樓門を見る。これを過れば、本殿あり。外部は金碧燦として目を驚かしむれども、殿内は皆素木を用ゐて、また彩せず、清楚掬すべし。本殿の前に拜殿あり。天井は唐木を以てこれを張り、俗に伽羅の天井といふ。拜殿と本殿とを連ねて、左右に樓あり。右を東透樓といひ、左を西透樓と稱す。東透樓を出れば、攝社あり。樓門の正面に十三層の塔あり。猶塔の後より登ること十餘町、山頂に鎌足の墓あり。山を破裂山と稱し、國家

安倍文珠院

大事あるの時は必ず其墓破裂すと稱す。山上、眺望甚だ廣濶、大和平野の大、半一眸の中に集る。これより元の路を戻れば、安倍村に、安倍文珠院あり。日本三文珠の一として甚だ著名なり。

磐余

磐余の地の西南の一部、今の飛鳥岡等の附近を古は一帶に飛鳥と稱し、淵瀬定めなき譬に引かれたる飛鳥川は、源を天武の朝に樹木の伐採を禁ぜられたる南淵山に發し、岡橋の間より甘楸丘の東麓をめぐりて西北に折れ、今井八木の間に至る。允恭顯宗推古舒明皇極天武の諸帝皆なこの附近に都し給ひしを以て史跡頗る多し。岡寺は高市郡村岡村にありて、多武峯櫻井より共に一里を隔つるに過ぎず。天智天皇の御願にして、義淵僧正の開基にかゝり、管に有名なる古刹なる而已ならず、西國巡禮第七の札所として世人に知らる。これより北、五町を隔て、橋寺あり。推古天皇十四年の創始にして、金堂拜殿觀音堂等あり。北方二町を隔て、古の川原寺の名残なる弘福寺あり。寺に藏する持國多聞二天の立像は、弘仁期の傑作と稱せらる。飛鳥の安居院

岡寺

橋寺

飛鳥

榎原神宮

神武天皇陵

今井町
八木町

に、止利佛師の作にかゝると稱せる丈六の大佛像なり。これ實に崇峻天皇の朝、蘇我馬子と聖德太子と議りて創立せられたる元興寺の形見にて、當時法興寺とも飛鳥寺とも稱し、規模頗る宏大なりしもの、かの中大兄皇子が中臣鎌足と蹴鞠の遊を爲し給ひしは、即ちこの寺なり。又この附近に大官大寺の遺礎及び飛鳥神社あり。飛鳥神社の西に、向原寺あり。孝元天皇陵あり。此より北すれば、天香久山耳無山畝傍山の三小陵鼎立し、直ちに、本邦開闢の遺跡なる畝傍榎原の地に達す。汽車よりするものは、今井町より南して、此處に至るを得べし。今井町は八木町と相連り、中街道初瀬街道の要衝に當り、共に多く大和木綿を産するを以て名あり。人口併せて七千有餘を有し、畝傍停車場は兩町の中間にあり。停車場を出て、坦々たる大路を南に下れば、十四五町にして左方に綏靖天皇陵あり。田畝の間一基の土堆をなし今美しき瑞籬を設けて之を圍む。其西南に隣り神武天皇の陵あり。區域周圍四百五十間、畝傍山の麓に位し、四周繞らすに三重濠と瑞籬を以てし、松樹其間に趣致を加へて、轉た人をして神威の高きを感じしむ。榎原神宮はこれより猶南

大輕

すること少許、畝傍山の東南麓に位し、皇祖神武天皇が始めて大業を起したまひし處なることは、人皆これを知れり。神社は明治廿三年の創建にかゝり、その神殿は京都御所の一部を移して造營せし所にして官幣大社に列す。千古の靈蹟、時に逢ひて、この顯揚を見たる、誰か聖代の恩澤を仰かざらんや。この周圍に歷代天皇の山陵甚だ多し。また、西南四町を隔て、久米寺の古刹あり。これより東南貝瀬平田の附近は古の牟佐の地にして、其の北に接せる大輕は、懿德孝元應神諸帝の都したまひし輕の地名の名殘なり。欽明天皇陵天武持統天皇合葬陵文武天皇陵等皆この地にあり。平田より南すれば、道路二條に岐れ、右するものは岡宮天皇陵齊明天皇陵を右に見て掖上に出づべく、左するものは觀覺寺を過ぎて高取に入るべし。高取町は幕府の世、植村氏四萬石の城地たりし所、其東南なる高取山上に、今猶城址を存せり。壺阪寺は高取より清水谷を越えて山路を上ること十餘町の上にある。本名を南法華寺といふ。西園第六の札所として石佛の多きを以て聞ゆ。この街道を南に下れば、一里餘にして、吉野河岸の帶狀平地に出づべし。

高取町

高田町

當麻町

關西鐵道幹線の一驛王寺より、櫻井線の一線は岐れて南に向ひ、高田町より左に折れ、別に此處より紀和線の一線を起せり。而してこの鐵道は所謂下街道と相添ひ相離れて御所町に達し、重阪峠に於て吉野川以南に連亘せる小丘陵を横り、五條町に至りて吉野川の谷に出て、直ちに和歌山縣に入れり。この沿線の左右、見るべく記すべき所少なからず。高田町は下街道と河内街道との衝に當り、交通頻繁、市況隆盛、街衢また整然たるを見る。人口約七千餘を有せり。當麻寺(第九十一圖乙)は東方、葛城山脈の一峰、二上山の南麓にありて、高田町を距ること一里餘、奈良朝時代の古名刹にして、東塔西塔は天平初期の建築として頗る名高く、ことに、其九輪の高さと其八輪なるとは他と其例を異にせり。(第三十三圖甲)且つ双塔のかく完全に並び存するは他に類を見ざるを以て、建築家は大にこれを珍重すといふ。金堂は正中三年の再建、講堂は乾元二年の建築なり。曼荼羅堂は金堂の西方にありて、淨土曼荼羅は天平年間の製作にかゝり、中將姫菟糸の曼荼羅なるもの、ことに著名なり。其他、寶物少なからず。奥の院は西方にありて、大師堂には圓光大師の像を

御所町

安置せり。新庄は高田町の西南に位し、一小邑を爲し、近傍に、飯豊青天皇陵あり。其南忍海は角刺宮のありし地なり。御所町は下街道と下市街道との相會せる所、多く木綿を産し、人口五千餘を有せり。東南、披上の地は孝昭天皇の都たりし地、南方、室は孝安天皇の都たりし處、西南森脇は綏靖天皇の都たりし處なり。其附近、茅原寺嶋都波神社等あり。また稍遠く、一言主神社高嶋神社等あり。櫛羅は御所町の西方三十町に位し、山中に一名瀑あり。高さ六丈餘、其谿谷は頗る幽邃を極む。金剛山はこれより一里半、登路は二十五町に過ぎず。下街道を猶進めば、稻毛の小邑あり。其傍に置きたる停車場を葛驛といふ。地に炭酸泉を湧出し、浴舎の設あり。此邊一帶巨勢の舊地にして、古巨勢氏の住ひしところ、山を巨勢山と呼び、川を巨勢川と呼び、寺院に巨勢寺ありき。今、大字に古瀬を存せり。古瀬の西南水尻に、蘇我蝦夷入鹿の双墓といへるものあり。葛驛より南、十八町、阿田に桃園あり。近年の開園にかゝると雖も、面積は廣く、地また高原の上に位して、まことに一箇の新桃源たり。

阿田の桃園

上市町

吉野山と多武峯との間、狹長なる縦谷をなし、源を大臺原山に發する吉野川は長く其間を流れて、和歌山縣に入れり。大和平野より河岸平地に通ずる道路主なるもの三、最も東なるは多武峯越にして、道路甚だ峻峻なり。中央は壺阪越にして車を通じ、最も西なるは下街道にして、紀和線の鐵道この山地を縦貫せり。多武峰越を越えて、南に下れば、一里半にして吉野川の清流に接し、上流に妹山背山の川を挾んで立てるを見、下流に、岸に沿うて上市町の家屋と人烟とを望む。伐採せる材木の寄濼地として、稍繁華なる趣を呈し、人口二千六百を有せり。されど世人はこの町を單に芳野山の入口として知れり。吉野川の渡を櫻の渡と呼び、これより吉野山の一目千本の處に出づ。されどこは裏路なり。有名なる芳野山に登るべき正路は、猶これより吉野川に沿ひて下ること半里、六田に至れば、柳の渡あり。一條の春水、徐ろにこれを渡れば、櫻花の間に隱約する二三の茅屋、これを過ぎて五町許、前に吉野山入口の黒門の立てるを認む。阪路曲折して、氣息喘々たり。これを六田の七曲りと稱す。これより櫻樹次第に多く、左右に深き谷を見つゝ、山の背

六田

吉野山

吉野宮

とも稱すべき處を過ぐ。この間二十餘町、これを長峰の櫻と呼べり。廿八町目に、村上義光忠烈の碑あり。村上義光が大塔宮の難に殉したる地、墓は其の上方にあり。此邊より、櫻花漸く爛熳、三十町目前後の地に至れば、山も谷も悉くこれ櫻花、峯も尾も悉くこれ白雲、その美観は蓋し容易に狀すべからざるものあり。これ即ち口の一目千本にして、一に又日本が花と稱す。ことに、上市より來れる裏路の街道は此處に至りて七曲の奇を爲し、一步に一景、一曲に一興を加ふるの趣あり。この香雲の裡、吉野宮あり。官幣大社にして後醍醐天皇を祭れり。攝社三、一は御影社と稱して、藤原資朝藤原俊基を祭り、一を船岡社と稱して、兒島高德松山茲俊を祭り、他は瀧櫻社と稱して、土居通増得能通言を祀れり。遊覽者此處に至らば、試に眼を挙げよ、何等の美観、何等の壯觀、滿山悉く是れ櫻花なる中に、瓦甍長く連るは、吉野町の人家、その盡頭にはかの偉大なる藏王堂の古風なる建物高く白雲を抜き、座ろに人をして南朝の悲しき歴史を追想せしめずんばあらず。歌書よりも軍書に悲し吉野山と俳人許六も咏じたる此一帯の名山こそ、まことに花を

吉野町

以て歴史を飾ると言ふべきなれ。吉野山の人家はかくのごとく、之より山嘴を傳ひたる道路の左右崖に凭りて構へられ、上層は道路同平面にして店舗を開き、中層は家人これに住ひ、下層は物置小屋に宛てたるを見る。最も多きは、旅店にして、名産を鬻げる店舗これに次ぐ。かくてこの風情ある町を過ぎ盡せば、橋あり、一の橋といふ。これを渡り、黒門を過れば、銅の鳥居あり。つゞきて二王門あり。これ即ち金剛峯寺の總門なり。この門を入りて、石階を上れば、忽ちにして藏王堂に達す。藏王堂は金剛峯寺の本堂にして、康正元年再造、慶長十九年豊臣秀吉の修葺する所、莊嚴華麗の大建築なり。かの大塔宮が吉野落の時、其離杯を擧げられたりと傳ふる遺址は本堂の前にありて、今、其處に四本櫻あり。南朝三帝五十餘年の行在所たりし實城寺址はその西にあり。かくて此處を出て、本道を南に進めば、三町餘にして、吉水神社に至る。こは、後醍醐天皇の此地に行幸あらせられし時、先こゝに入らせ給ひて、花にねてよしやよしの、吉水の枕の下に石はしる音との御製ありし地、維新前は吉水院と稱して、藏王堂の供僧坊なりしを、明治八年、

藏王堂

吉水神社

如意輪寺

今の名に改稱して、後醍醐天皇及び楠正成の靈を祀れり。南朝時代の寶物を多く藏す。また、此附近に勝手明神社あり。源義經の妾靜が法樂の舞を奏したるは、此地なり。其前を西に入れば、大日寺あり、これより五町ばかり洞川街道を南に行けば、東方に村上義隆の墓あり。山口神社の前を左に、谷に添ひ溪を渡りて、東に上ること七町、有名なる如意輪寺(第三十八圖甲)あり。南朝當時の勅願寺にして、本堂には本尊如意輪觀音座像を安んず。楠正行が髻を截つて佛殿に納め、一族百四十三人の姓名を記し、鏝もて、「かへらじ……」との歌を刻せしと稱せらる、扉は今猶寺に藏す。また、堂に近く、山隈の地一堆の御陵北面して立つもの之を後醍醐天皇の陵(第三十八圖乙)とす。落花紛亂の時、これに詣れば、誰か當年南朝の悲劇を思ふて、涙襟を濕ほすの情に堪へざらんや。更に本道に戻りて、南に進めば、三町にして竹林院あり。庭園は小堀遠州の築く所にして、頗る奇巧を極む。これより天王橋を渡り、猿曳坂に至りて、東の溪谷を望むに、香雲變隼として日に映じ、風光の美、宛然土佐の名畫のごとし。これ、中の千本なり。中院谷に、佐藤忠信が山僧横

後醍醐天皇陵

大峰山

川覺範を討ちたる所として、首塚といふあり。其上方花櫓は忠信が義經の爲めに防戦せし處と傳ふ。かくて布引櫻瀧櫻雲井櫻等を賞しつゝ猶ほ上れば、世尊寺址あり。一個の梵鐘保延六年の銘あるものを殘せり。世に吉野三郎と稱せるもの即ち是なり。水分神社はこれより二町、金峰神社は猶それより五町餘を隔てたる所にあり。此下に蹴拔塔あり。これより細徑を求めて、右に行くと四町、昔清水あり。露とくく試にうき世そ、かはやと西行法師の詠ぜし古跡にして、近傍に西行庵址あり。此附近櫻花愈深く、幽趣言ふべからず。即ち奥の千本是なり。吉野大峰に登るには、これを本道とし、其奥三町許に、女人結界の標石あり。かくて小天井大天井の二嶺を過ぎ、洞辻を経て、鐘掛西観等の行場を経れば、地漸く高峻に、山城大和の山河皆眼中に落ち、登臨の快言ふべからざるものあり。山上に、大峰山本堂あり。宏大なる建築にして、藏王權現を本尊とせり。其後方危岩怪石相峙ち、風景自から他に異なり。山は四月十日を以てこれを開き、十月十日これを閉づ。行程六里、夏時は白衣の行者踵を絶たず。

下市町

五條町

賀名生行宮址

來路を吉野川沿岸に戻り、流に従うて下れば、下市町あり。人口八千餘を有し、人烟稠密なり。對岸の地を下淵と稱し、吉野川を隔て、一大橋を架せり。名けて千石橋と言ふ。此町より南に入ること二里、南芳野村丹生に丹生川上下社あり。官幣大社にして、天武天皇の朝の創立にかゝり、有名なる古祠なり。下市町より猶西に下ること三里、宇智郡に入れば、五條町あり。縣下より和歌山縣の東北部に通ずる交通の要路に當り、紀和線の鐵道また北より來りて、町の南部を貫き、直ちに、和歌山縣に向つて走れり。町に、宇智郡役所中學校等あり。町の西端吉野川に臨みて、五條遊樂園あり。眺望頗る佳に、夏期は香魚獵に適せり。人口七千七百餘を有し、鮎晒布等を産物とす。西に、眞土山あり。南に、御靈神社あり。五條町の南二里賀名生村宇和田に賀名生行宮址(第三十八圖丙)あり。其居館今に存して舊觀を改めず、後村上天皇遺愛の南天等ありて、來り遊ぶもの、誰れとて南朝の末路に涙をそぐざるものなし。當時勤王の郷士堀氏の子孫猶連綿として、家に、勅賜の旗幟を藏せり。此處また北畠親房終焉の地として其墳墓あり。また東南黒淵に、

吉野郡地方

十津川村

黒木御所の址あり。榮山寺は吉野川の北岸にあり。養老年間創立の古刹なり。此附近、吉野川一とく奇景をつくり、峻崖清流、頗る遊人の心を惹く。また一遊すべし。

吉野郡の一郡、山嶽重疊し、南部は殊に高峻を極む。これを以て交通の便通せず、多くは寒村僻地にして、又一名邑の其間にあるなし。唯、此地は由來林業の盛なるを以て、河流は大流細流の別なく、皆なその伐採交通路に宛てられ、従つて其沿岸の村落に、稍發達を爲したる所少なからず。ことに十津川に臨める諸村落のごときは、同名の字のもとに、十數里の部落、一種の別天地を爲し、氣風また自から他に異なり。玉置山下の折立には、文武館と稱する中學校組織の私塾ありて、郷士の子弟を教育し、其結果却つて他の都邑の教育にまさるものありと稱せらる。十津川に添うて下れば、路は溪流に沿うて、紆餘曲折、遂に紀州本宮に達す。此間山水頗る奇、雲烟の美狀すべからざるものありといふ。又、三重縣との界を流る、北山川に瀕入町の勝あり。

柳生

奈良市の東より起れる柳生街道を東に進めば、路は峯巒起伏せる間を縫ひて誓多林大柳生坂原を経て、柳生に達す。此地、奈良を距る三里、山間の一小邑たるに過ぎずと雖も、維新前は柳生氏一萬石の城地たりしを以て稍繁盛の趣を呈せり。かの有名なる梅花の山水郷月の瀨は此地を東に一丘陵を隔てたるに過ぎず。されど道路峻峻なるを以て、通常遊客は笠置街道によるか、また關西鐵道によりて島原驛より石打に出て、達するを常とせり。地、大和の東北隅に位し、桃香野月瀨長引尾山石打の五大字を併せて月の瀨村と稱す。名張川東南より來りて、村の中央を貫流し、一帶の溪山既に凡庸ならざるに、到る處梅花白く粧點して、花時の美、蓋し天下に冠たりと稱するも、決して溢美にあらざるべし。ことに、尾山の如きは名張川に臨みて八箇の谷を有し、一目千本大谷等の好景あり。頼山陽が非親和州香世界、此生何可說梅花と咏じたるも、決して過言にあらざるを見る。蓋し近畿地方最も溪山のすぐれるものか。

月の瀨

三重縣

三重縣は近畿地方の東南部を占め、伊勢伊賀志摩の三國と紀伊の南北牟婁郡とよりなり、北は岐阜愛知の二縣に隣り、西北は滋賀縣に西は奈良縣と京都府の小部分に接し、西南は和歌山縣に連り、東と南とは海に面せり。地形は東北より斜に西南に伸び、其の中央に於て、伊賀は西北に、志摩は東南に突出し、恰かも大鵬の兩翼を張れるに似たり。面積二百六十二方里餘、戸數十八萬七千餘、人口百八萬餘を有す。行政上別つて津市四日市市度會多氣飯南一志安濃鈴鹿河藝三重員辨桑名阿山名賀志摩北牟婁南牟婁の二市十五郡とし、縣廳を津市に置く。各郡の中面積の最も大なるものは度會郡にして、面積四十八方里七百三十九方籽、南牟婁郡の二十八方里四百三十一方籽之に次ぎ、最も小なるは安濃郡にして、十一方里百六十九方籽に過ぎず。人口の疎密より之れを云へば、其の最も密なるを桑名郡とし、一方里に八千八百を有し、七千九百を有する河藝郡之れに次ぎ、其の最も疎なるは多氣郡にして、

地形

一方里僅かに千七百を有するに過ぎず。

三重縣の地西に山を負ひ、東西に海を控へ、殊に東方伊勢海に面する所は平野最もよく發展して、多數の住民を收容し、各種の産業最もよく發達するを見るべく、人口密度の兩極端にある桑名多氣二郡の如き、よく此の對照を示すものと云ふべし。縣下の主なる市邑は、主都たる津市を始めとして多くは此の海岸平野の間に點綴し、其の他に此の平野より舌状を爲して西方山岳の間に入れる磐谷地、若くは南方海岸の港澳に濱して散在し、伊賀の山間には別に盆地の開展せるものありて、別個の天地を作れり。

土地既に斯の如し。之に加ふるに氣候溫和にして、海岸一帯の地概ね交通に便なれば、諸種の生産は甲乙なく發達せり。即ち農業に従事する人口を卅八萬とし、水産業の三十四萬、工業の三十八萬なるが如き、以て其の一般を量るに足らん。而して其の生産中、水産漁業は主として志摩及び牟婁伊勢南島を盛なりとし、其の産額は近畿地方の第一に位し、鯉、鱒、石花菜等の産物殊に多く、近來又眞珠の養殖大に興るに至り、工業と農業とは主として伊勢の

交通

平原伊賀の盆地に發達し、工業には製糸織物製陶等の見るべきもの多く、農産には茶菜種麥藍葉綿大豆甘薯等あり。中にも縣下茶の産額は靜岡縣に次ぎて本邦第二に位し、製茶地方十縣の一に居るが如きは夙に世の知る所なり。

縣下の海岸線は、其延長頗る大にして、單に伊勢灣に面せるもののみにて、北は掛斐川口より南は大湊に至るまで、約三十里の一大彎曲を畫きて長く通り、一帯の沙濱にして、水淺く且つ出入に乏しきも、其の間猶桑名四日市市神社大湊鳥羽等皆船舶の碇泊に適し、特に四日市港の如き、日本要港の一に推され、明治二十二年特別輸出港に指定されしが、更に同三十二年開港場となり、日本郵船會社及び大阪商船會社の定期船絶えず往復し、商工業の發達近來著しきものあり。大湊はまた志摩の鳥羽港と共に由來航海と造船業とに歴史を有するは夙に人の知る所なり。此他志摩紀伊の海岸は後方交通不便なるに反し出入に富みて港津に乏しからず。海路交通の便は云ふまでもなく、海岸一帯の地が常に縣下人文發達の素地を作りつゝあるも又宜なりと謂ふべし。

縣下の陸路交通は其の主要なる者十條あり。即ち北方尾張より來り、桑名四日市龜山關等の諸邑を経て近江に入る東海道。三重郡に於て東海道と分れ、神戸白子津松阪を過ぎ宇治山田に至る伊勢街道。鈴鹿郡關より棕本窪田を経て津に通ずる伊勢別街道。津より片田長野平松平田等山間の小邑を過ぎて西に入り伊賀上野に至る伊賀街道。伊賀上野より古山を経て名張に至る名張街道。關より東海道と分れ加太^カ柘植佐那具上野島^カ原を経て山城に入り、やがて奈良に出づる大和街道。一志郡六軒より二本木伊勢地阿保名張を過ぎて大和に入る初瀬街道。松阪より櫛田川の流に沿ひ大石宮前波瀬等を経て紀の川齋谷に出る和歌山街道。松阪より山間の道路を過ぎ、相可より更に西に折れて野後長島尾鷲木の本を経て和歌山縣に入る熊野街道。宇治山田より汐合川を渡り、朝熊山の北麓を過ぎて志摩の鳥羽に至る鳥羽街道あり。就中伊賀街道初瀬街道熊野街道等は概ね山間の溪谷を辿り時に車馬猶容易に通ぜざるの不便あり。鐵道は主として關西鐵道に屬し其幹線は名古屋市より木曾川の大鐵橋を渡りて本縣に入り桑名四日市を経て西走し、加太越を上り分れて幹線

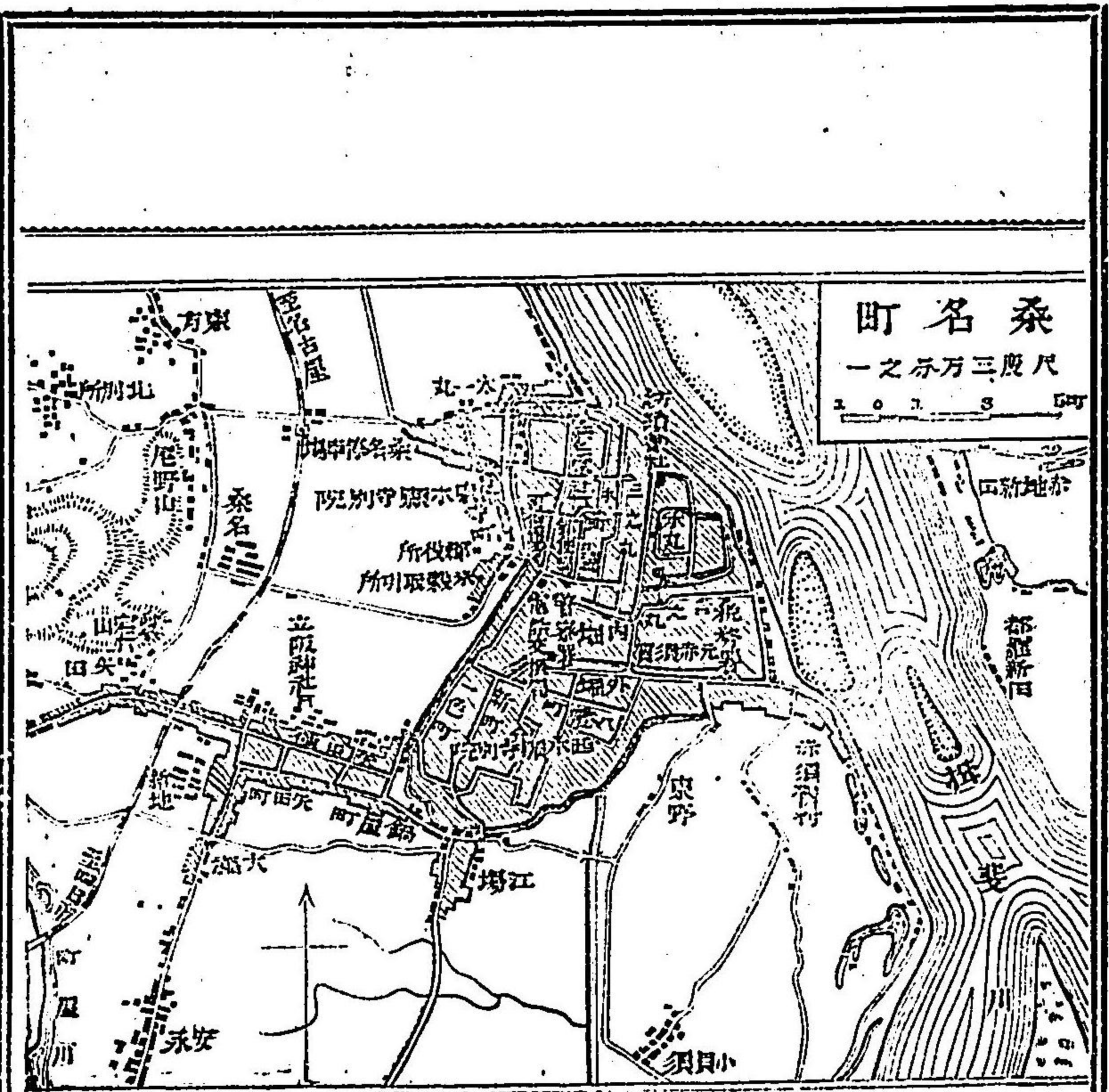
は伊賀盆地を貫き木曾川谷に出て遂に奈良に至り、一は近江に入りて草津に至りて官線に會せり。此他幹線中の一驛龜山よりは更に支線を分ちて本縣の首府たる津市に至らしめ、參宮鐵道之より南に延びて大廟の所在地たる宇治山田町に達せり。而して宇治山田よりは別に電氣鐵道の設ありて海岸の絶勝二見ヶ浦に及ぶ。若し夫れ他日伊賀鐵道勢和鐵道の開通を見んか其交通の便一層大なるものあらん。

水路の中最も舟楫の便あるは揖斐川及び木曾川にして、縣下の流域は共に僅かに三里に過ぎざるも、揖斐川の如き桑名より美濃大垣に至る迄優に川蒸汽を通じ、濃尾平野の産物が川船によりて川を下り來り其河口の桑名に集るもの少しとせず。其の他に在つても宮川は十五里、櫛田川は八里、雲出川は五里、町屋川は七里の間扁舟を通ずべし。これを要するに縣下の交通は其の西南方に於て未だ充分の設備を見る能はざるも、東北方特に海岸一帯の地は著るしき發達を示し居るものと云ふべし。

尾張より來れる鐵道列車彌富の停車場を辭し木曾川を渡れば、縣の管區桑

名郡に入るべし、郡の面積七方里餘、人口六萬二千九百餘を有す。地は西北に高く東南に低く、西北隅に聳ゆる多度山は一に箕山と稱し、山甚だ高からざるも山上松杉蒼蔚として頗る眺望に富み、多度山八勝の名あり、山麓多度神社あり。此の近傍また落葉川の清流、丸山の勝區あり。

桑名町は舊久松氏十一萬石の城下にして揖斐川の下流に位し、港津をなし市街は南北に長く東西に短し、戸數三千五百餘人口二萬餘、縣下六市街の一にして、桑名郡役所稅務署等の官衙あり。商業殊に繁盛を極め、就中米商の取引最も盛にして、東京の蠣殻町、大阪の堂島に次いで、本邦有名なるものなりと稱せらる。市街は平行にして、三面繞らすに濠を以てし、吉の丸に近く貯水場あり。其最も繁華なるは米商會所の附近にして、本町江戸町片町等又頗る賑はへり。吉の丸三の丸等の地昔は高樓粉壁巍々として人目を奪ひしが、維新後之れを毀ちて宅地耕地となせり。大字三崎に桑名神社あり、中臣神社を合祀す。大字鍋屋町にはまた天武天皇社あり。淨土寺法盛寺等の名刹また尠からず。町の名産に時雨蛤白魚燕を畫きたる塗物盆煉瓦瓦等あり。



桑名町を南に町田川を渡れば三重郡に入る、昔は朝明川を中心として、桑名郡と三重郡との間に朝明郡を置きたりしが、明治三十一年三重郡に合す。鐵道線路は始終此の低地を南に奔り、三重縣第二中學校の所在地たる富田の小驛を過ぎて四日市に向ふ。附近に荳生城址千種城址薦野城址等あり。第九十二圖乙

員辨郡は伊勢の北部にありて町屋川の流域を占め、西北は山岳高く聳ゆるも、其の他は丘陵平野相連り、村落相望む。伊勢北部より

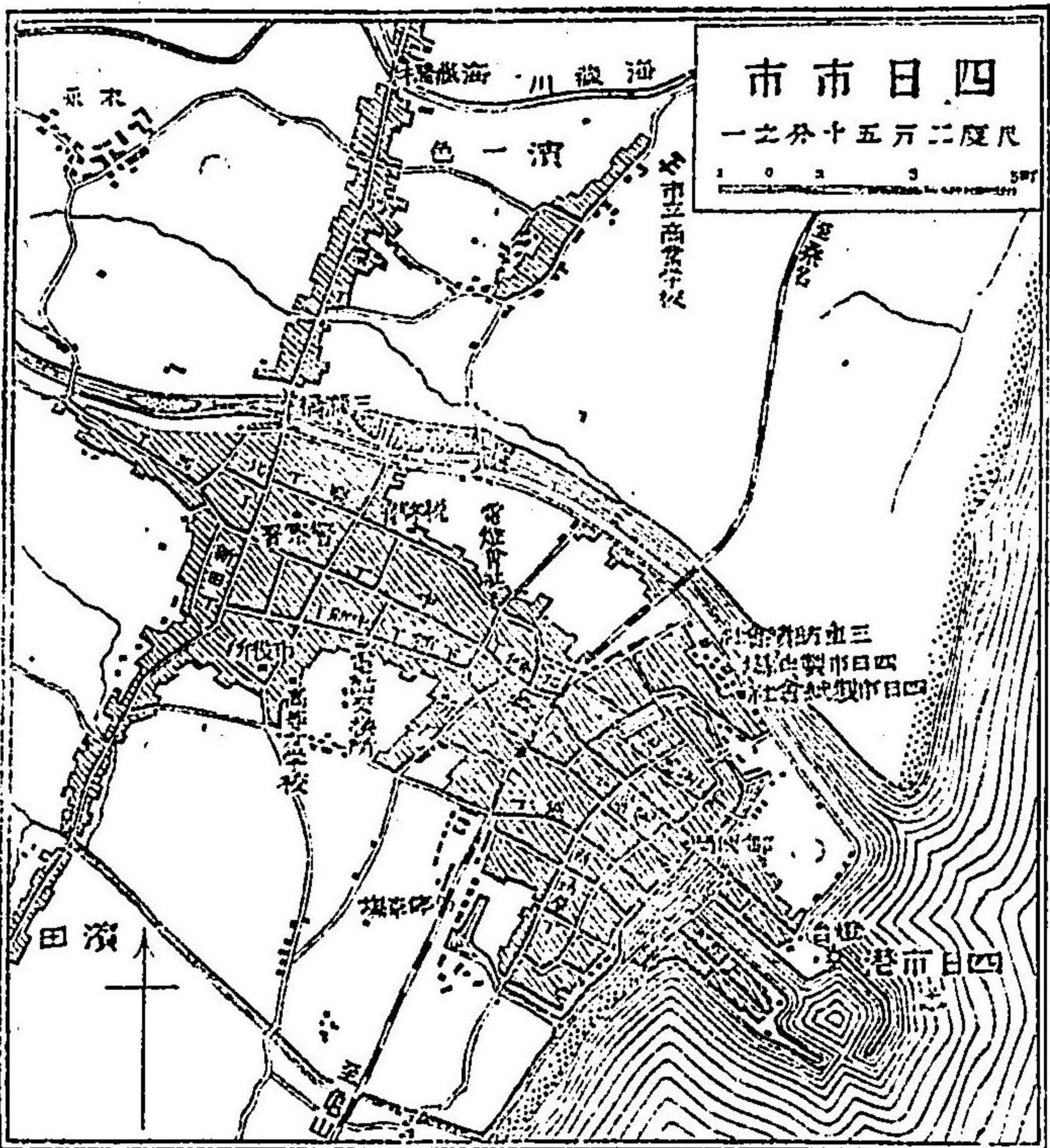
湯の山温泉

養老山脈の西部を経て、美濃關が原に出づる街道と、三國が嶽の南を掠めて近江に出づる街道とは共に本郡を通じ、山間の各種々の鑛物を出す。治田の銅山は今衰へるも古へ熾に採掘したる事あり、又石搏地方は黄寶石、石灰等の産を以て聞ゆ。流域の中央の大泉原には今員辨郡役所を置けり。

湯の山温泉は、郡内菰野村宇湯の山に在り。四日市市を距ること五里餘にして、西南北の三面は、入道岳、鎌嶽、御在所嶽、水晶嶽、釋迦ヶ嶽等の高峰に圍まれ、只東の一方遠く開けて、遙かに伊勢灣を隔て、尾張三河の丘陵を望むべし。四日市よりせば三岳川の流に沿ひ、齋谷を辿りて菰野に出て達するを得べし。川の上流に飛瀑あり。飛沫雪の如く湯の山の一奇觀たり。温泉は單純泉にして煮沸して入浴の用に供す。附近櫻村に長福寺址櫻あり、又川島村大字川島に伊勢義盛の墳あり。

四日市市

四日市市は桑名の南方四里の所にありて、更に南方五里にして津に達すべし。四日市の港市は伊勢海の西岸に位し、東海道參宮街道の衝に當り、戸數五千餘、人口三萬百餘、明治三十一年市制を敷きて縣下二市の一とはなれり。市街



出入甚頻繁なり(第十三圖甲)此の市に取引さる、商品の重要なるものは、米、肥料

は三岳川に沿ひ、東西に長く、商店旅舎を列ね、商業の繁盛遠く津市を歴しつゝあり。其の港灣は自然の形勢良好ならずと雖も伊勢海の主港をなし、横濱港へは日本郵船會社の定期航海ありて、關西鐵道と連絡し、熱田、津、鳥羽及紀伊、大阪へは大阪商船會社の定期船往復し、此他汽船帆船の

油にして、藏町桶ノ町には米問屋多く、肥料問屋は中納屋町濱町下新町等にあり。大工場には四日市製油所四日市製紙株式会社三重紡績株式会社また此處にありて、停車場を距る五町に過ぎず。市役所稅務署監裁判所支部大阪稅關出張所商業會議所等の設備間然するところなく、學校には商業學校高等女學校等あり、北に隣れる海藏村には三重郡役所あり。市の產物としては紙糸萬古燒等あり。

四日市を發してより便宜の爲め伊勢街道に従ひ、神戸白子の二驛を見舞ひ、再び關西鐵道に頼り沿道の地を説明せんか。神戸町は川原田を距る約一里、河藝郡にありて、舊本多氏の城邑たり、戸數七百人口四千三百餘を有す。關西鐵道の猶ほ未だ龜山より分岐して津に至り、參宮鐵道に聯絡せざる當時に在つては、伊勢街道中の名驛として般賑を極めたりしが、今は稍衰頽の傾なきにあらず。驛内字本多町に神戸城址ありと雖も、今は耕圃となりて、唯其の外濠を存するのみ。此の地夏時螢を以て著はる。

此の邊一帶の地灌漑に便なるを以て田圃尠からず。玉垣の小驛を経て更に

神戸町

白子驛

南に折れ、道は白子驛に達す。驛は河藝郡の東南に在りて、伊勢灣に瀕し、戸數一千餘人口五千五百餘を有す。其の南北は神戸町に比して長けれども、單に街道を挟みて商賈の軒を連ねたるに過ぎず。然れども驛内に河藝郡役所稅務署等の設けあり。此の町舊名を白兒と云ひ、又栗真庄とも云へりしとか、寺家の形紙菊一文字の羽物等此の地の產物なり。白子町及び寺家一帶の海岸を稱して、白子ヶ濱といふ。

伊勢街道の津に至るまでは此の他に寺家豊津大部田等の小驛あるも、こゝに再び川原田に歸り、西に折れて龜山に向ふべし。即ち鈴鹿郡に入れば、西北は入道山仙ヶ岳鷄足山三箇山等の山塊所在崛起し、鈴鹿山加太山は西南隅を壓し、餘脈は延いて阿濃郡境の錫杖ヶ岳と相連り、縣下有數の森林を爲せども、街道及び鐵道線路は始終相續れて鈴鹿川沿岸の地方を西に奔り、庄野を過ぎて龜山に向へるなり。

龜山町は舊東海道五十三次の一驛にして、戸數一千三百四十餘人口八千百餘を有す。舊石川氏六萬石の城下なり。關西鐵道は今名古屋より此の地に來

白子ヶ濱

龜山町

り二線となり、一つは近江に向つて西に奔り、一は津市に向つて南に走る。山來東海道の名驛たりしもの、更に鐵道の分岐點たるを以て、街衢特に殷賑を加へ、貨物の集散甚頻繁なり。龜山公園は舊龜山牙城の地にして眺望に富み又町に鈴鹿郡役所稅務署區裁判所三重縣女子師範學校等また此處にあり。關西鐵道の幹線はこれより西方關を経て柘植に至り、更に分岐して一は北折近江に入り、一は伊賀を経て大和街道を京都に入ると雖も、此處より津を過ぎて山田に至らんには、龜山より分れて南下すべし、關西鐵道の支線即ちこれなり。

龜山分岐點以南汽車は河野田の一小隧道を出て、下庄（下庄）の小驛を過ぎ、一身田（一身田）に向へり。此の間線路は始終丘陵に沿ひ、遅緩なるS字形を爲して南に奔り、一身田に至りて關に通ずる街道に合す。

此の道は關より津市に出づる別街道にして、途中高野尾より棕本に跨る一帶の地を稱して豊久野一に等由氣野と云ふあり。往古は曠漠たる原野なりしが、今は殆ど開墾せられて田園となれり。字錢懸に一松林あり、貞幹亭々と

豊久野

して蒼翠天を蔽ひ、夏時旅客の涼を納るゝに適す。中に錢懸松の小祠あり。祠中老松の古幹を安じ賽者多く之に銅錢を懸け其數計るべからず、傳説多けれども信ずべきものなし。

此の附近字目細に片淵と云ふ所あり、關屋の清水と稱す。今は方一間許の渠を存するのみ、この名また西行が、かたふちに身を投げやと思へどもさすがに命惜しきなるらんと云へる和歌より出づと傳ふ。大字忍田村に永隆寺ありて、寺前に稗史的の傳説ある偽橋あり。

別街道はこれ等二三の古趾を過ぎて、關より津に至るべく而も今は鐵道の便開けしより、旅客の此の街道を過ぐるもの極めて稀なり。

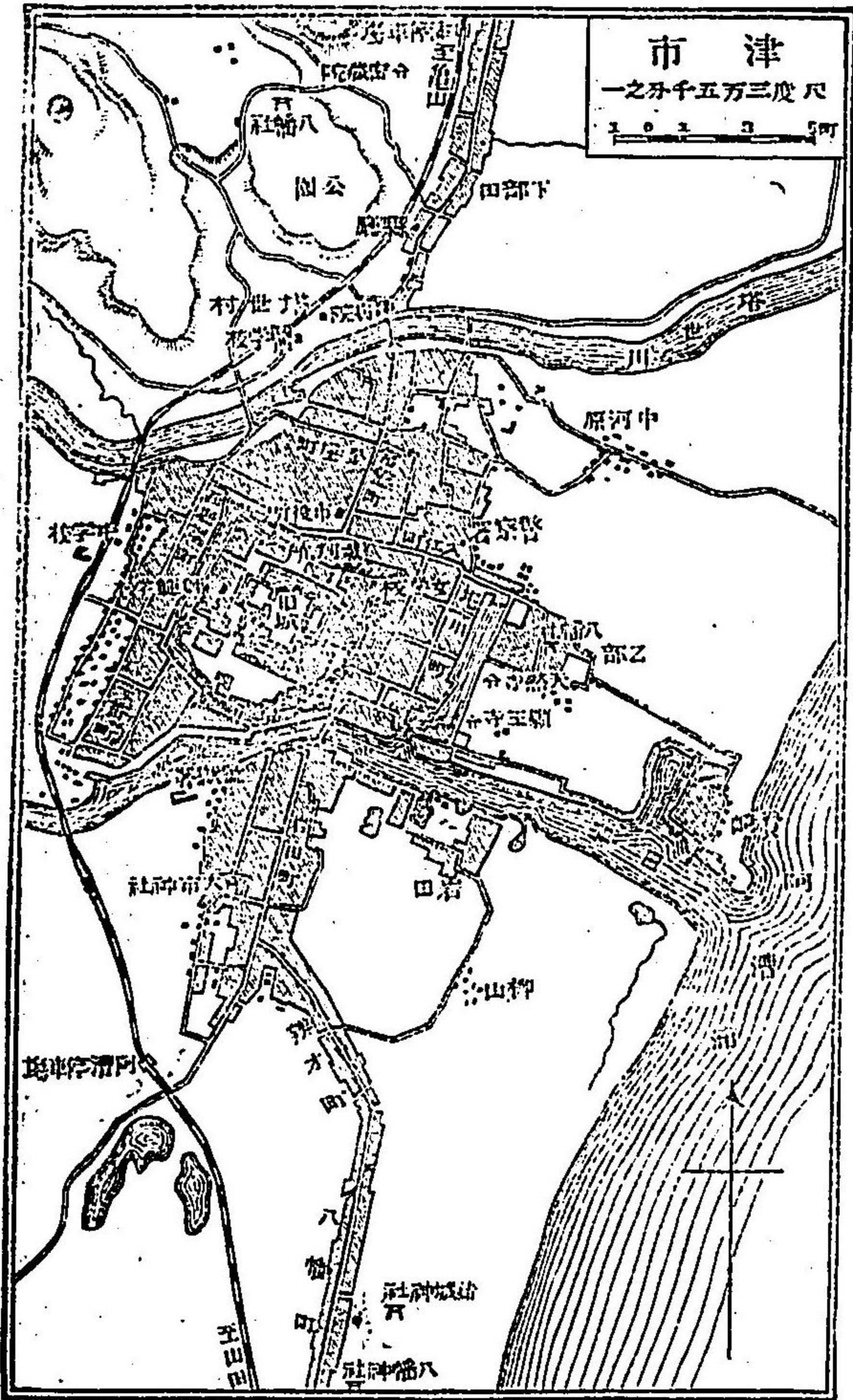
一身田村は以上述ぶるが如く龜山より津に入るべき鐵道線路と、此處より關にいたる別街道との衝に當り、戸數九百餘人口四千八百七十餘を算し、今は地方自治制によりて、豊野平野大古厨中野の各村と合併す。停車場は驛の西端にありて窪田と相對せり。村内字一身田に眞宗高田派の本山専修寺あり寺境一萬零八百六十四坪嘉祿二年宗祖親鸞上人下野國芳賀郡大内庄柳島の地

一身田村

津市

に草創し、後ち後堀河天皇寺號を專修阿彌陀寺と賜ひ勅願所とす、寛正六年僧眞惠の時今の地に移せりと云ふ。

縣の首府津市は一身田と高茶屋の間にありて、東は阿漕浦に臨みて、贊崎



港を有し、岩田川其の中央を貫流す。舊藤堂氏三十五萬石の城下にして、東西一里二町、南北一里二

十町、戸數六千五百餘人口三萬五千九百餘を有し、市坊の數八十八の多きに達す。街衢は岩田塔世の二川を以て橋南橋内橋北の三區に分かれたれ、市况繁盛なり。宜なり古來伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつの俗語ある事や。只其の港市たる贊崎の設備完全せざれば、汽船碇泊に不便を感じ、商業の遠く四日市市に及ばざるを遺憾とす。

高野尾村より來れる志登茂川が、急に南折して海に入るべき處より津市は始まりて一直線に南に奔り、塔世川に至るまでは宿驛の狀をなして商賈は街道を挟み、汽車は其の西に沿ふて津公園の小丘を遶り、市の西端を迂回せり。津停車場は下部田の西にありて、傍らに密藏院あり。行く事八町にして公園に達す。園は小丘に據りて櫻樹多く、杜鵑花に名あり。中央に洄水を湛え潺湲流れ絶えず。丘頂に象觀亭耕耜臺等ありて、西に群峯の翠色を眺め、東に伊勢内海の帆影を瞰るべし。園内にまた廣明館の設けあり。此の地元城主藤堂氏の別業なりしが、維新後大に荒蕪に歸せしを、明治十年四月當時の縣令岩村定高官に稟して公園となし、藤堂氏亦其の舉を贊して樹石亭樹を献じ、

釜屋町
常盤町

以て今日の勝區を見るに至れるなりと云ふ。丘の東隅に高山神社あり、藩祖藤堂高虎を祀り、毎年四月及び十月の二季を以て祭典を行ふ。公園に近き此の邊一帶の地を橋北と稱す。三重縣廳議事堂病院等此所にあり。

塔世川を渡りてこゝに橋内に入るや、單に街道を挟みし人家は急に左右に膨脹して複雑となり、其の最も般賑を極むるものは大門町分部町伊豫町等に於て、富豪紳商薈を陳ね、車馬の往來恰かも織るが如し。

塔世川を渡り所謂橋内の區内に入れば中央に舊城址ありて南方岩田川に枕す。慶長年中藤堂氏封を此處に受け、奕世之に居る。明治維新に至りて遂に廢せられ、樓櫓破壊して今本丸西丸は唯其の石壘を存するのみ。東丸は老樹鬱蒼として繞らすに濠を以てし、之れを内堀と稱し、夏時多く蓮を生ず。四圍に土壘あり外濠を繞る。常陸町より入るべき北の城門を京口門と稱し、西を伊賀口門、南を中島門と云ひ、其内部を丸の内と號す。今は陸軍所管地となりて、中に安濃津地方裁判所縣立師範學校等あり。又此に有造館の址あり、文政中城主爰に學堂を建て大に文武の道を獎勵したる所、明治四年封土返上

四堀端町
一番町

と共に之れを廢し、今は農商務省大林區署の苗圃となれり。市役所亦其附近にあり。

此の舊城址より西は西堀端町一番町の淋しき市街あり。東は堀川町を過ぎて乙部に至る迄人家櫛比せり。觀音寺は其中中央最も繁華なる大門町にありて、藤堂氏累世の菩提所なり。本堂二王門等の結構頗る宏大にして、境内各種の興行物茶店等軒を連ね、劇場勸工場等の設けある事大阪の千日前、東京の淺草に酷似せり。榮町には又四天王寺の名刹あり、麻戸王子の草創に係ると云ふ。前者は眞言宗にして、後者は曹洞宗に屬す。此の他乙部の天然寺願王寺西來寺、大門町の大寶院等皆市内名刹の一として知らる。

市の名産は緞子紗團扇阿漕燒等にして、又伊勢綿と稱する木綿を産し、一箇年産額百萬反に達すと云ふ。阿漕燒は、舊幕の頃一旦絶滅したる安東燒の後身とも稱すべきものにして、再興以來年尙淺きも、専心意匠を凝して、其の成功を期圖せしが爲め、近來頗る需用を増し、販路漸く擴張せり。此他市場としては魚類市場五、青物市場一あり。

贊崎港

安濃郡藥王寺より發する岩田川は市の南部を貫流して海に入り、其の河口に、贊崎港あり。規模小なれど、汽船は日々此處に寄港す。此の海岸は一帶贊崎浦と云ひ南方岩田川を隔て、安濃浦を望み、夏期海水浴の最も盛なるところにして、夏期に至れば、日出前より浴客來集す。濱上休憩所の設けありて、近來京阪地方より來り浴するもの年を追ふて増加するの傾あり。

阿漕浦

贊崎浦の南に阿漕浦あり。青松白沙相映帶し、風光佳絶、人をして宛然畫圖中にあるの感に堪へざらしむ。俗に傳ふ往昔此地神宮に獻ずる御贄を漁する所にして、漁獵嚴禁の地なりしが、一漁夫の夜に乗じて網を投ずるものありしが事露はれて刑せられ、之より後毎年其事ありし夕に當り、海上人なくして網を投ずる聲あり。里人爲めに祠を建て漁夫の幽魂を慰むと、蓋し古今六帖の逢ふことを阿漕がしまにひく網のたびかさなれば人知りぬべしとの和歌に附會したるものならん。今は字柳山に一碑を立て、蕉翁月の夜の何を阿古木に鳴く千鳥の句を刻す。浦に近く三重紡績會社津工場及び津高等女學校の宏屋巍然として立つを見る。

藤水村

阿漕驛の附近に藤水村あり、勝區に富む。同村西行櫻址は大字垂井成就院内にあり。法城神社は又大字藤方八幡宮の林中にありて、結城宗廣等を祀る。明治十三年七月、聖烈巡幸の時祭祀料を下賜せられ、尋て社殿を造營す。十五年一月遂に別格官幣社に列したり。

藤方浦

藤方浦は一に藤瀉と云ひ、藤方山とも稱す。阿漕浦の南藤水村大字藤方の海濱を云ふ。上古は磯山と稱せし有名の名勝にして、東南方遙かに志摩の峰巒を烟波渺々の間に望み、眺望極めて可なり。春暄秋晴來り訪ふものまた渺しとせず。

參宮鐵道は阿漕停車場を出て、一志郡の東端を貫き、松阪を経て山田に向へり。此の邊一帶の地、西部は群山基峙して、伊賀大和と國境をなし、矢洞山尼ヶ岳布引山等は互に相屹立し、矢洞山は一志郡の中央部に聳え、餘脈は南方に奔りて、頗る峻嶮を極む。東部は稍平衍にして海岸に至るまで、地味概ね肥沃、米穀の品質最も良好なり。一志米の名世に喧傳せらる。雲出川は八知村及び八幡村の上流に發し、東北流して竹原村に入り、こゝに多氣村よ

り發する八手俣川を合せ、更に長野川を容れて矢野村に至り海に注ぐものにして、灌漑極めて便なり。

これに加ふるに郡内の驛路數條に別れ、交通の多方面なること縣下此の郡に勝れるはなし。即ち參宮街道は津市より來りて本郡に入り、雲出村三渡村を経て南に走り飯高郡の松阪に達し、初瀬街道は津市より來り久居に至り、分岐して二條となり、一つは西方に走り田尻村大字出垣内を経て伊賀の名張町に及び、一つは西北の方に走り、片田村長野村等を経て伊賀の上野町に達す、通稱これを伊賀街道と呼べり。況んや東部の海岸に沿ふて飯高郡に入り、松阪町に接続する參宮鐵道の便あるに於てをや。

久居町

久居町は津市を西に距る事二里餘の所にあり。一志郡役所所在地にして、初瀬街道伊賀街道の分岐點なり。戸數九百餘人口二千九百三十餘を有し、舊藤堂佐渡守五萬三千石の城邑にして、一志郡第一の名邑たり。交通の衝に當るの故を以て商業頗る殷盛にして豪戶軒を連ね、高津神社玉旋寺八幡神社柳の井戸幸町の鐘等の諸名勝あり。穀酒站等此の地の名産なり。

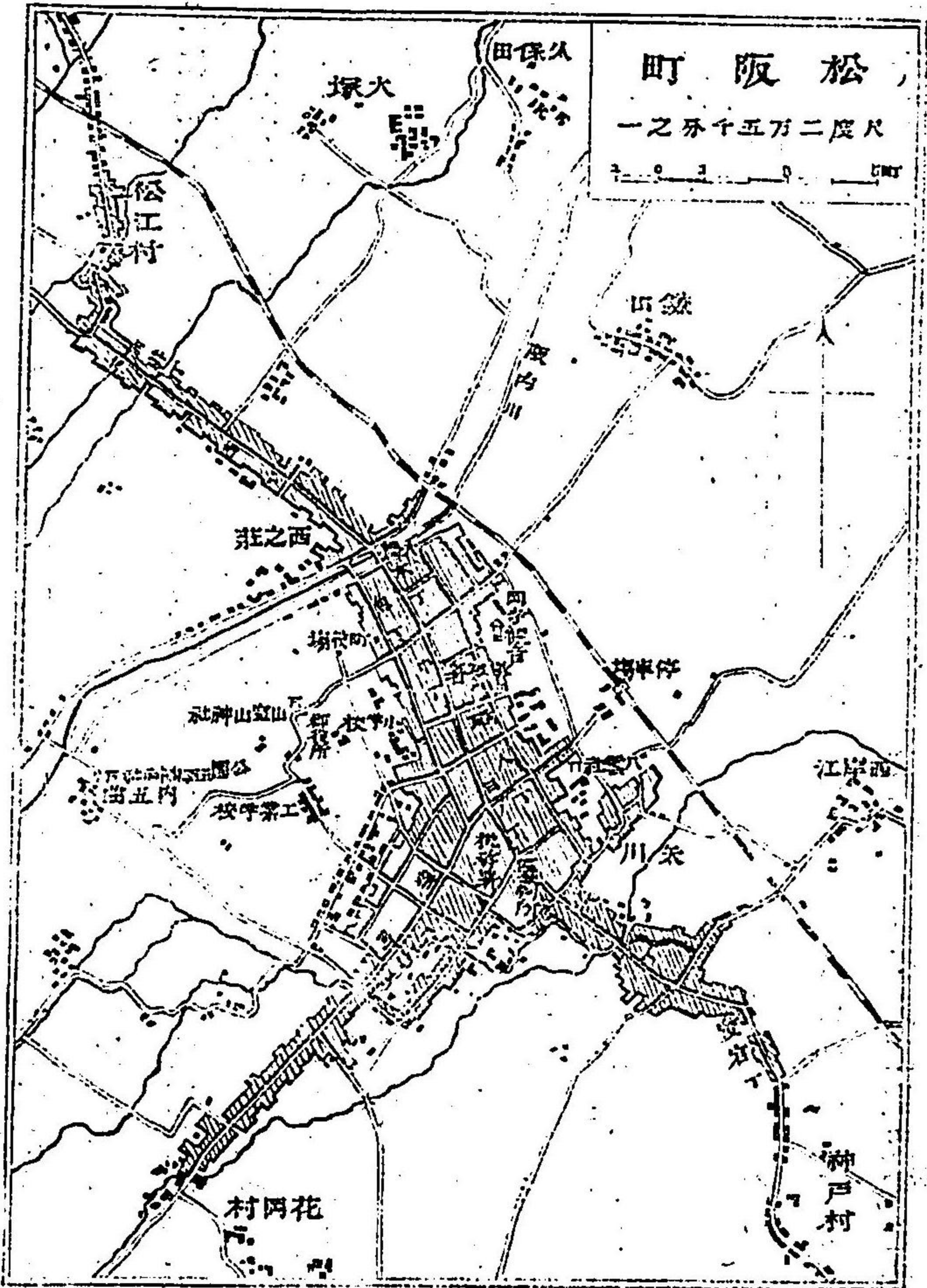
小戸木桃林

小戸木桃林は久居町の西南小戸木村字若宮新開中島等より戸木村の地に亘り、雲出川の北邊に屬す。反別五町歩にして大約七千五百株あり。寛政年間に培植するところと云ふ。其の南方新家村字西林久保落合高木等に連るところに新家桃林あり。反別二十五町の廣きに亘り、大約三萬七千五百株ありて、村民が毎歲これによつて得る收入二千五百圓に下らずと云へり。

松阪町

鐵道は此間始終參宮街道に沿ひ、高茶屋六軒の二小驛を過ぎて、飯高郡に入り、松阪に達す。此間高茶屋の東南に加良須の濱あり、眺望に富み海水浴場の設ありて來り浴する者多く中に加良須神社あり。六軒の西約一里のところに白米城址あり、阿阪山の絶頂枳形をなせる城址なり。往昔國司北畠滿雅足利勢に圍まれ、水竭きたれば白米にて馬を洗ひ、貯水多きが如く給りて敵を退けたる古蹟なりと傳ふ。

松阪町は津市と山田町との中間にありて、西南は丘陵を負ひ、北に阪内川を擁し、東一里にして一志浦に接す。戸數三千人口一萬三千九百を有せり。此地往昔は北畠氏の治所なりしが、天正年中豊臣氏蒲生氏郷を此の地に封す。



至るまで、紀州藩の領する所たり。市坊十有八、伊勢街道は町の北端川井町

後服部一
忠古田重
勝等交、松
阪に治し、
徳川氏天
下を一統
するに及
んで、近
傍十八萬
石を徳川
頼宣に加
賜し、明
治維新に

殿町

より一直線に其の南端愛宕町に貫通し、停車場は市の東邊にあり。運輸四達交通至便の一商區にして、豪商温戸櫓を列ね、商業の般盛なること津市に譲らず。最も繁華なるを本町中町新町等とし、飯南郡役所稅務署區裁判所工業學校等の設けあり。名産には松阪木綿を最とし、髪附梳油等頗る世に知らる、又其附近と共に壺屋紙の産あり、曩に此の町の大半烏有に歸せしが、今は漸く舊形に復し、市況また昔に異ならず。

町の西部殿町に松阪公園あり。此の地又昔は四五日の森と稱し、宵森四間生森とも誌せり。元龜元年北畠氏の臣瀬田長助始めて此處に城を築く。後天正十二年北畠信雄豊臣秀吉と隙あり、秀吉因つて蒲生氏郷を一志郡松島城に置く。十六年に至り信雄を那須に放つに當り、氏郷其の城を此處に移し松阪城と改め、大に輪奐の美を加ふ。氏郷會津に轉ずるに及び、服部一忠古田重勝相繼いで移り、遂に紀伊侯の領となる。徳川氏一國一城の制を定めしより天守門樓を破壊し、唯其の石壁を存す。明治十四年五月官に請ふて公園となす。土地高燥、老樹巨木空を掩ひ幽凄の趣に富む。境内に意悲神社南龍神社

の祠あり。東方伊勢内海を望み、帆影點々たる處、規模廣大ならざるも、亦誇るに足るべし。山室山神社は公園の東北にありて國學の泰斗本居宣長翁を祀る。市内の古刹には愛宕町に龍泉寺管相寺、字中町に清光寺等世に現はる。去つて近郊東岸江村に下樋小川あり、深長村大神々社の境外南隅に深長の泉あり。池の廣さ凡そ三十餘坪、深さ凡そ三尺、毎春播種の時涌出し、秋收の候に及んで涸渇すと云ふ。町の西北方岩内村に瑞巖寺と稱する巨刹あり。俚俗稱して石觀音と呼ぶ。寺境山を負ひ池に枕し、奇石怪岩多く、陸前の松島に似たりと云ふの故を以て、小松島とも稱せり。境内觀音川の北岸なる櫻繩手と稱する處より山頂に至るまで、櫻樹頗る多く、暮春の候杖を曳く者尠からず。

岩内村の西約一里伊勢寺村に國分寺あり。仁和寺末にして眞言宗に屬し、方俗伊勢寺と稱す。側らに小祠あり井本神社と云ひ、又其の傍に古井あり。深さ五尺、其の水清冽、村人之れを飲用す。此の他墳墓にして名あるは本居宣長の墓なり。こは松阪町の南一里餘、花岡村大字山室村字高峰にあり。傍

櫛田村

らに石碑あり、其高足平田篤胤が追慕の詞なきからはいつくの土になりぬともたまは翁の許にゆかなんを刻す。松阪町よりは道路平坦優に俥を驅り得べし。

鐵道線路はこれより南徳和に至りて參宮街道と全く相離れ、櫛田川の上流を渡りて、相可の小驛を過ぎ、田丸に至りて再び街道と合し、更に別れて宮川筋向橋の二驛を奔り山田に入るものにして、徳和より田丸に至るまで概ね丘陵の間を縫へり。參宮街道は之に反し平衍にして曲折なき往還を櫛田齋宮下有爾小俣に通じ山田町に入る。

今雲く歩を參宮街道に進めんか、徳和より南、豊原の小驛を過ぐれば櫛田村あり。人口一千九百五十五を有し、商家街道を挾んで櫛比せり。往昔參宮鐵道の未だ開通せざる當時に在つては、旅客の此の驛を過ぐるもの頗る多く貨物の集散も亦決して尠からざりしが、今は稍衰頽して舊時の儼だも見るべからず。村の南端に櫛田川あり、源を勢和の境界高見山に發し、飯高郡家野村を経て蓮川を合せ、法田村に來りて稻木川を分岐し、松名瀬村を経て海に

朝見村

入るものにして、延長約二十五里に亘る。村に榊田橋あり榊田川に架し全長四百八十尺に及ぶ。

大淀浦

榊田村の東に朝見村あり。大字田村字西之口に又空也上人の墓あり。石浮屠高さ九尺餘、表面に梵字及び空也上人の四字を刻す。附近一乗寺村に亦仁木義長の墓あり。

齋宮村

大淀浦は多氣郡大淀村沿海一帯の地を稱するものにして、東は二見ヶ浦及び志摩の諸島嶼を望み、東北は尾張の師崎と相對し、海岸一帯の松林鬱蒼として白沙と相映じ、風韻頗る掬すべし。字有爾町野に一老松樹あり。業平松と稱す。昔在原業平尾張に赴く時此にて送別をなし、齋宮と相唱和せる古跡なりと傳ふ。延寶年中大風の爲めに折られ、代官某其の名の湮滅せん事を憂ひ、更に植るに一株を以てすと、今存するもの即ちこれなり。

齋宮村

齋宮村は徳和と小俣との中間にある小驛にして、人口三千百四十餘を有す。此に齋宮址あり。字御館及び柳原に亘る地にして、今の參宮街道の右側にして耕地となれり。東西四十五間、南北六十七間、字蛭の澤に又齋宮花園の跡

相可村

あり。菖蒲叢生し、花時恰も紫莖を布くが如し。附近の地種油の産あり。徳和より榊田川を渡りて相可驛に入れば、和歌山別街道は此に起り西方相可村を過ぎ、更に南に折れて仁村に至り、此に山田より來れる和歌山本街道と合す。鐵道線路は相可より山腹丘陵の間を縫ひ、田丸に至りて再び和歌山街道と相交又し、東に折れて小俣を過ぎ山田町に入る。

田丸驛

相可村は榊田川を挟みて飯南郡射和村に對し、一小市街を爲すものにして、人口三千二百餘を有し、鮎獵を以て名あり。停車場附近に神山一乗寺あり。榊田川の西岸にある丘陵にして、山甚だ高からざるも、伊勢海を隔て、遠く尾參の巒嶂を望み、風光極めて佳なり。市街の西南には又天照山あり。山上に法泉寺あり。つかれぬる我を友呼ぶ千鳥が瀬越えて逢鹿に假寝こそすれと西行の詠じたる千鳥ヶ瀬は、同村字内畑相鹿上神社の南にありて、微々たる細流に過ぎず。

田丸驛

田丸驛は山田より來る和歌山街道と參宮鐵道線路と相交又する衝點に位し、人口二千三百餘を有し、一小市街を爲せり。宮川驛又其の東にありて、小俣

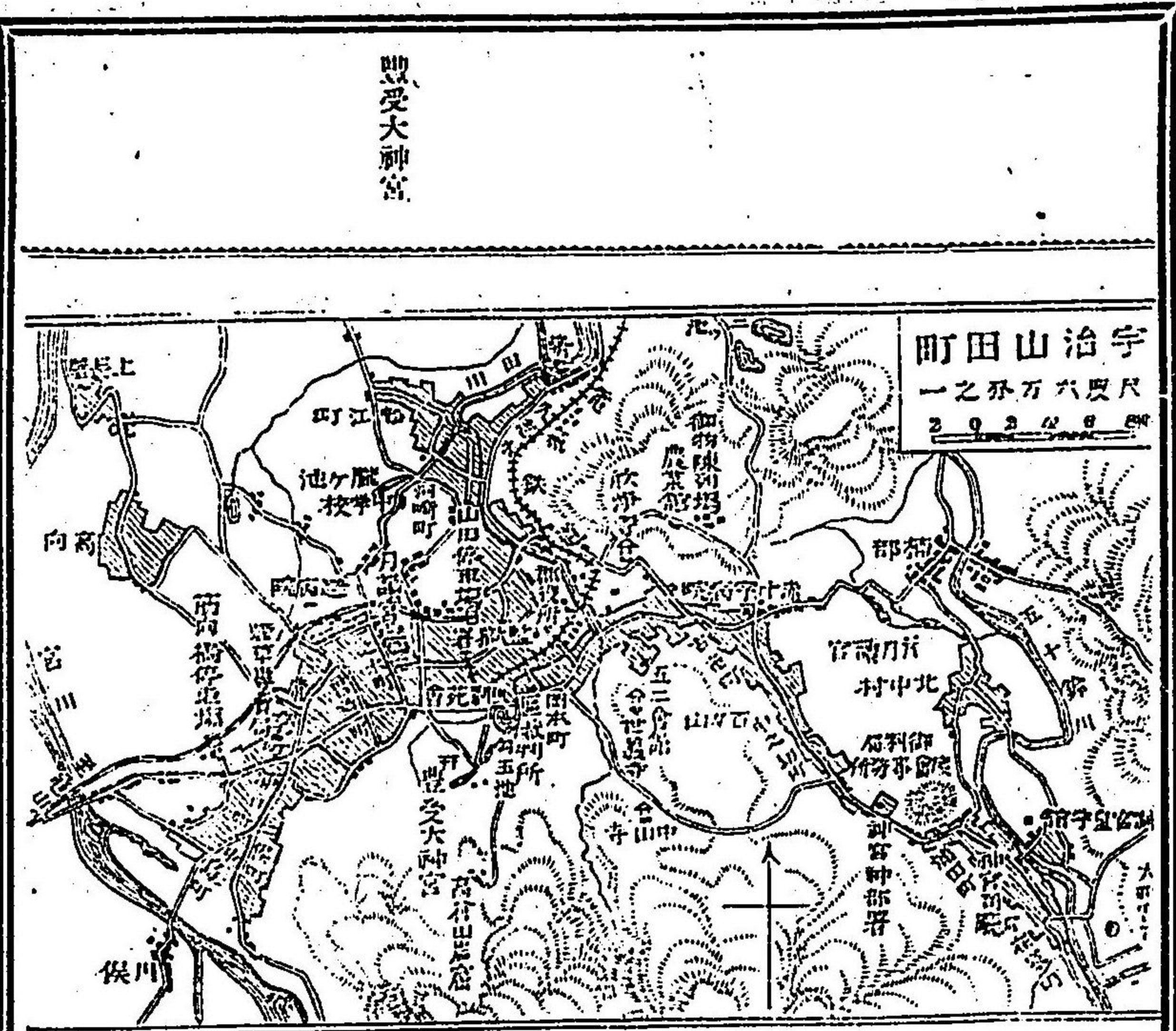
宮川

宇治山田町

と相接し、北の方二十餘町にして明野ヶ原あり。

宮川は伊勢第一の長流にして、源を多氣郡大壑ヶ原に發し、大内山川藤川の二流を合せて東流し、圓座村に至りて更に横輪川を受け、宇治山田町の東端を流れ、小林村に注ぎ海に入るものにして、水源より河口に至る延長約三十二里餘、山田町附近の堤防には多く櫻樹を植え、花季爛熳として一望雲の如し。宮川を渡れば即ち宇治山田町あり。

宇治山田町は宮川の東に位し、相の山即ち尾部阪以西を宇治と稱へ、其以東を山田と稱す。明治二十二年町村制の實施に際し、相合して宇治山田町となれり。此の地山來大湊の所在地なるのみならず、志摩大和紀伊各街道の衝に當り、東北に大湊神社の二港を擁し、交通の便亦備はれるを以て、諸國より參拜する者四季常に絶えず。随つて全市街繁盛にして其の般賑殆ど津市に下らず、戸數六千六百餘、人口三萬三千三百八十餘を有す。道路は平衍ならず且つ迂餘曲折長く連り殊に古市宇治の市街は細長く之に沿ふて發展せり。町に神宮司廳渡會郡役所區裁判所支部稅務署縣立第四中學校神宮皇學館等あり。



り。鐵道線路は宮川を渡り筋向橋停車場を過ぎ、町の中央山田町に達す、之れを參宮鐵道の極點とす。町の最も繁華なる街衢は常盤町八日市場町古市町等にして、名産は春慶塗宮木箸篠簞茶傘紙葺入等にして朝熊山には萬金丹の本家あり、尾上町に五二會陳列場ありて、縣下の物産を蒐集し、之れを販賣せり。

豊受太神宮は一に外宮と稱し、山田町の南端に在り、停車場を出て直に南向すれば之に詣るべし。宮域は寛濶幽邃にして、社殿また森嚴を極む。本社には豊受太神を祀り、瓊々杵尊天兒屋

皇太神宮

命天太玉命を配し、雄略天皇の二十二年七月之れを創建すと云ふ。每二十一年遷宮式を行はせらる、外宮神苑の前に農業館あり、豊受太神宮の神徳に因み、明治二十四年初めて之れを建設し、現今其の出品數一萬餘點に上り、學理と實際とを參酌して選擇分類し、斯業現況を觀察せしむ、賽客の多數が農業者たるを以て其裨益する所少なしとせず。附近岡本町の南に宮崎文庫あり、慶安元年の創建にして藏書二萬卷、往時室鳩巢貝原益軒伊藤東涯等遠く來りて閱覽講演せし所なりと云ふ。外宮の近傍高倉山の丘陵に天の岩戸なるものあり、蓋し塚穴の極めて宏大なるものなり。

外宮を距ること約一里、宇治の南端に皇太神宮あり、一に内宮と稱し外宮と共に皇室の祖廟をなし、天照皇太神を祭り、天手力雄命萬豐秋津師姫を合祀す。垂仁天皇の二十五年倭姫命神勅を奉じ始めて神宮を此地に建てしより今日に至るまで二千年に垂んとす。山田より宇治の市街を過ぎ五十鈴川の清流を渡れば則ち神苑に入るべく一道の芝生綠甍を展べたるが如きの間稚松之を點綴して清楚の光景既に全く塵寰を遠かるを覺えしめ、白砂砥の如き大道

を進めば大山大將奉獻の巨砲と東郷大將奉獻の天砲彈とは苑内にありて異彩を放ち前者は明治二十七八年戦役に鹵獲せる所、後者は三十七八年戦役の戦利品として共に神明加護の謝恩を表せる絶好の紀念たるもの、詣者肅然として先づ襟を正さざるを得ざるなり。漸く進めば古松老杉翁鬱として天を衝き蒼古幽邃の趣を加へ愈々崇高の情に堪へざるものあり。五十鈴川の水に口嗽きて左に轉せば則ち内宮の神殿林樹の間に隱見するを拜すべし。内宮の建築は外宮と同じく所謂唯一神明造りの式に依り上古以來多少の變化はありたれど、白木造りの樸古にして然かも壯嚴犯すべからざる形式を具へ、外宮と同じく每二十一年に改築して正遷宮を行ふことと定めらる。改築の頃に際しては造神宮使の工匠は、凡て古式の裝束をなして事に従ふなど詣者をして自から千古の昔に還るの想あらしむ。内外兩宮が舉國尊崇の中心となれるは絮説するまでもなく、四時の祭祀が壯嚴なるは固より、其他事あれば常に勅使を遣して奉告し、殊に明治三十七八年役を畢りて平和克復するや聯合艦隊先づ來りて爰に詣て、尋で車駕親臨克捷奉告の祭を行ひ給ふ、蓋し曠古の盛儀なりと

神社港

大湊港

二見ヶ浦

宇治山田町の東北約二里にして神社港あり。汐合河口と相對し、灣内水淺きも、海上參宮の要港に當るを以て大阪商船會社の汽船定期茲に寄港し、又熱田との間に小汽船を往復し市街の小規模なるに比しては商業發達せり。又神社港より十數町にして大湊港あり。宮川の河口にありて古來航海業と造船業とを以て其の名高く、現時に於てもなほ縣内重要の工業地として、造船及び船用鐵器の製造地あり。大湊造船所市川造船所松崎造船所吉川造船所内田造船所菊川鐵工所等其の主要にして今又造船徒弟學校の設あり。

宇治山田町より東々北約二里、汐合河を渡ればまた二見ヶ浦(第十三圖乙)あり。宇治山田町との間に電氣鐵道を通ず。浦は二見村大字江村の海濱にあり海を隔て、近く參尾の山岳より遠く駿信の峻峯を望み風景掬すべし。殊に此の浦をして其名を高からしめしは、海岸十數間を隔て、相對する立石の存在にして、御荷鉢系に屬する輝岩より成れる若黒色の危巖が波濤に洗はれて兩々相對峙するの状宛も自然の門戸の如く、若夫れ水平線上曠々として上り來れる

鳥羽町

旭日を其間に迎ふるの偉觀は實に天下の絶景と稱せらる。附近海中に亦鯨石鼻岩雞冠岩屏風岩等の奇岩あり。孰れも同種の岩石の風浪の浸蝕を受けて種々の奇形を呈せるものなり。毎歲一月元旦庶民群集して此の浦に旭日を拜する習慣あり。沿岸の地肆店軒を並べ多く貝細工を鬻ぐ、其東端水蝕より成れる一小洞窟ありて、俗に天ノ窟戸と稱し、旅人また此に賽するもの多し。近來此の浦に海水浴場を設けたり。

鳥羽町は二見ヶ浦の東一里許の處にあり、宇治山田町を距る約五里、舊稻垣氏の城市にして、戸數一千四百餘、人口五千七百、志摩郡役所海務署稅務署鳥羽商船學校鳥羽鐵工場あり、港は伊勢海の口に當り、灣内迂餘曲折し、其の東北方は深さ三尋より五尋に至り、荅志菅坂手等の諸島其の前に羅列し、天然の良港をなし外洋航海の船舶の爲めには好避難所たり。商況は遙かに四日市市に及ばざるも、鐵工場其の他造船に關する工場あるが爲め、市街は比較的繁盛なり、府城趾は海に枕して一廓を爲し、風景頗る佳なり。名産に濱木綿東海婦人貝名あり、宇岩崎の海岸には夏時海水浴場を設け、來り浴する

日和山

答志島

ものまた尠からず。
町の西北隅に日和山の小丘あり。三河の伊良子崎と相對し、伊勢灣口に羅布せる大小の島嶼を俯瞰し、晴天には東方遙かに富士山を望むべし。舟子必らず此の丘に上りて天候を相す、故に此の名ありと。眺望の絶佳なる縣下無双と稱す。

桃取辨天島

菅島

答志島は鳥羽灣口に枕して、遙かに三河の伊良湖岬と相對す。周圍約六里、答志・桃取の二村に別たれ、戸數六百、人口三千百餘を有し、島内答志村字和具に九鬼嘉隆の墓あり。口碑に傳ふ。嘉隆關ヶ原に敗れ、遁れて此に匿る。子守隆功を以て父の罪を償はんことを請ひ、許されて使者此の島に至りしに、嘉隆己れを害する者なりと誤認し、遂に自殺せしにより、遺骸を此に埋め之を祭ると、島内にまた塚あり。
桃取村の前面に桃取辨天島あり。眇たる小島なれども、西は飛鳥を隔て、二見ヶ浦を望み、南は鳥羽港に面して、風景絶佳夏時納涼の好適地たり。
菅島は答志島の南にありて、加布良古崎と相對す。周圍三里餘、人口六百

神島

加毛燐源

朝熊山

餘を有す。其の東端白崎に菅島燈臺あり。燈光は四等不動白色にして、照射七里に達す。海岸一帶は御荷鉢系に屬する巨岩怪石相屹立して、青松離々として其の上に生じ、風光また掬すべきものあり。
神島は一に壘島と稱す。其の形壘に似たればなり。伊勢灣口に在る一孤島にして、人口七百三十餘を有す。千載集に「卯の花にいてことくし神島の波もさこそは岩をこえしか」とあるは此の島なり。島中蔬菜に乏しく、土民魚肉を以て主食とす。舊鳥羽藩の罪人を流せし處なりと云ふ。三河の伊良湖岬に至る三十二町餘に過ぎざるも、怒濤澎湃として容易に船を海岸に寄せ難く、有名なる海門の難所と稱せらる。島の南岸に石灰洞窟あり、蓋し地下水と海水との浸蝕作用より成る者なり。
鳥羽を南に距ること約二里餘、加毛村に至れば、こゝに加毛の燐礦あり。明治三十四年の發見に係り、現に採掘に従事す。其の成分は本邦燐礦中最も良質のものにして、將來有望の國産たるべしと云ふ。(鐵業參照)
朝熊山は伊勢志摩兩國の境に跨り、登路四條あるも、宇治内宮よりするを

的矢港

尤も平易とす。縣内有數の勝地にして、頂上に在る古刹金剛證寺は、本尊虚空藏菩薩を祀り、像は空海の作なりと傳ふ。門前に萬金丹の本舗あり。屢、回祿の災に罹りたるも、本堂は輪奐の美甚だ見るべきものあり。寺を距る三町、曇見峰の東麓に吞海庵あり、庵前の望嶽臺は又眺望の勝を以て知らる。絶頂より下ること七町朝熊峠と稱する岐路に當り、一旅店あり、所謂十八ヶ國一望の勝地と稱せらる。山麓朝熊村に朝熊神社あり、櫻大刀自神を祭る。

街道は鳥羽町を南に折れ、加毛村を過ぎ、南方的矢港に向ふものと、西南方磯部村に向ふものとの二線となり、更に磯部より分岐して一方は波切村の岬角を繞り、金比羅山の頂上を経て御座村に至り、一方は南折神原村を過ぎて濱島に達せり。磯野村の分岐點は志摩の中央山塊たる青が峰の北麓に當り、これより道は峻嶮を極む。正福寺は其の中腹にあり。天平年中行基菩薩救命によりて開基すと傳へらる。本尊は十一面觀世音にして、堂宇の壯麗また一縣の大寺たるに背かず、山頂は眺望の勝あり。

的矢港は志摩三大灣の一に位し海水深く灣入し、安乗崎菅崎灣口を扼し、

安乗崎

渡鹿野島は港の前面に當り、灣内風浪靜かなるを以て、外洋航行の船舶風波に避ふや、必ず難を此に避け、港頭常に帆檣林立し、又造船所の設けあり。

的矢港より海岸に沿ふて菅崎を北に繞れば、縣下最東端の岬角に出づ。即ち鐙崎これなり。渺漫たる海波長く斷崖の裾を嚙み、南は安乘大王の岬角畫の如く、東は三河の峯巒雲烟の間に浮ぶ。國崎村は小灣を隔て、其の對岸にあり。内宮鎮座の時より神部の地と定められ、鮑を取りて捧げし古例今尙存し、毎年鮑熨斗を調製す。此邊古來蟹婦頗る多し。

菅崎と相對して的矢港を包める安乗崎は、的矢港口の南山嘴にして、的矢灣内を一眸の中に納め、志摩三河の風光亦頗る壯觀なり。灣は深く且つ長く陸地に浸入し、飯濱よりの矢に至る間、舟に此灣を下れば、光景宛然川を下るに異ならず。迂曲また甚だしく、其狭き所は僅に二町を越えざる所あり。

志摩最東端の岬角鐙崎に至りて踵を廻へし、更に磯部村よりの矢灣頭を繞り御座村に向へば、大字上五郷に伊雜宮あり、皇太神宮の別宮にして、宮域一町九反歩、附屬神苑あり。其西南八町の山上大字惠利原にはまた佐美長神

大王崎

社あり。附近の鵝石は高二十餘間、横七十餘間の巨岩にして、大小数千の奇石其周圍を圍繞し、松樹これに點綴して、恰も松島を山上に見るが如き觀あり。人此の岩に東面して呼號すれば、直ちに反響してこれに應ず。岩の頂上は扁平にして、廣袤約五畝餘、登覽すれば、志摩南岸一帶の奇勝指呼の間にあり。

國府村に國分寺の古刹を訪ひ、更に南に向へば波切村大王崎に達す。大王崎には海軍望樓あり。麥崎の前面には岩嶼基布散點し、遠く能野那智の峯巒を水天髣髴の間に望むを得べし。其の北方英虞灣神明浦には眞珠貝養殖場あり。御木本幸吉の事業なり。眞珠貝の天然産の珠粒稀有にして、千個中一個の眞珠なき程なるを慨し、研究多年始めて養殖法を發明し、特許を受け、明治二十六年八月創めて此に養殖場を開き、凡六萬坪の海底に二年生眞珠貝を放ち、四年を経て採取するの計畫を以て現に百萬個の介を飼育せり。其の成績は極めて良好にして、今は海外に輸出の途を開くに至り、實に縣下特殊の事業たり。

白濱

濱島

五ヶ所
名倉灣

船越より片田布施出和具越賀の諸小村を過ぎ、道は金比羅山の頂上に通ず。立つて四方を見れば、東南方に小島大島鳴神島神島の恰かも飛石の如く洋中に羅列するあり、西北方は御座灣を隔て、濱島を望み、其展望極めて壯大なり。御座村の西四五町のところは白濱あり、東西凡そ十三町、南北三町餘、蒼浪白砂を洗ひて風光掬すべし。

對岸濱島に縣立水産試験場あり。明治三十二年の創立にして、漁撈製造養殖の三部各種の試験を爲し、縣下諸所に養殖場を設け、就中海參紫菜の製造及び諸種罐詰製造試験は成績良好にして、將來重要な物産たる望みあり。

濱島より以西海岸の出入益甚だしく、これに沿へる道路はまた良好ならずと雖も、其附近の眺望は反つて伊勢灣に面せる海岸に勝ると遠し、殊に濱島の西北にある五ヶ所村、榎柄浦に枕せる贊島等は眺望最も佳なるものなり。道路は榎柄より神前錦の小邑を過ぎて長島に入る。途に名倉灣あり。水を隔て、村内朝間の山腹を望み、此處もまた風趣に富めり。附近錦村の灣頭に丹敷戸畔の塚あり、塚は人家櫛比せる街道に面し、毎年正月七日神武祭を行ふ。

長島町

村内不行谷の古墳あり。此の邊一帶の地は上古丹敷と稱し、丹敷戸畔の領せし所にして、神武天皇東征の時過ぎ給ひし地なりとの説あり。

白浦

長島町は紀伊北牟婁郡に在る一小都邑にして人口四千五百四十餘を有し、海陸交通の衝に當り、商業繁盛なり。港内の入口を江の浦と稱し、漁船の繫泊場たり。前面大向ひの山脈東に延びて海に入るところ、月夜山影模糊として江上に浮び、形ち恰も涅槃像に似たりとて、稱して寢釋迦山と云ふ。白浦は桂城村にありて、風景絶佳、長島錦より渡船の便あり、附近島勝浦には海浪の浸蝕により成れる洞穴ありて海水之に通じ、里俗之を天満洞門と云ふ。附近の岩礁巉崕數十仞、松樹點綴して姿態萬容、眞に東紀の仙郷と云ふべし。

今少しく長島町以南に於ける街道につきて述べんか、濱島より來れる狹隘なりし道路は長島町に入りて、始めて廣濶なる熊野街道に合し、三浦の小邑を過ぎ、馬瀬に至りて本街道は直ちに西に奔り、船津和賀引本の小邑を経て尾鷲に向ひ、馬瀬より分岐したるものは東して鳥腰に向ひ、更に西折して須

須賀利港

賀利に通ず。

須賀利と引本との間小灣深く入るものを須賀利港となす。港は東北西の三面に山を繞らし、南は海に面するが故に、夏暑からず冬暖に、避暑避寒の地に適せり。村内に普濟寺あり、眺望の佳を以て聞ゆ。

引本町

引本町は戸數六百人口二千九百四十餘を有し、海灣南より北に向ひ、深く陸地を咬む事二里餘、波靜かにして恰も湖水の如く、風浪を避けて此處に來泊する船舶頗る多く帆檣常に林立せり。市街は海岸に沿ふて楡比し、風光明媚、また海産に富めり。

船津村

引本より北西に入る事約四里にして船津村あり、此の邊一帶の山林は氣候溫暖なるが故に杉檜の類密生し、赤羽川を利して搬出また容易なれば、山林の事業大に發達す。更に進む事五里餘、御料殖林地を經過すれば、千古斧斤を入れずと傳ふ大臺ヶ原山の森林に入るべし。舊藩政の頃和歌山藩士の探險せし後、明治の初年松浦某之を開拓せんとして果さず、近來御料林の經營により、船津より大臺ヶ原を穿ち大和吉野郡河上に出づる道路を開通するに至

尾鷲町

れり。附近に大蛇ヶ倉大木森瀧魚跳溪等の奇觀あり。
 尾鷲町は北牟婁第一の市街にして、戸數一千六百餘人口九千八百八十餘を有し。東西十町、南北二十餘町に亘る。此の地古への藩府にあらざるも、京阪地方及び名古屋地方に貨物を運輸するの要港たるを以て鉦買豪商夥なからず。郡役所稅務署等の設けあり。津市より三十里三十町、和歌山縣新宮へ十四里三十餘町の所にあり。灣内廣くして、桃頭婆留雀島裸島等の小嶼恭布羅列し風趣に富めり。南浦の西方にある丘陵を中村山と云ひ、港内の景致を一眸に集むる地たるを以て、町民相謀りて近く一公園地と爲せり。附近丸木浦はまた漁業繁盛の地にして、大敷網と稱する漁網はまた此の地の特色として世に知らる。

木の本町

熊野街道はこれより鬼山峠の山間を貫き、迂回して木の本町に出づと雖も、現今海岸に沿ふて直ちに木の本町に通ずるの道を開けり。
 木の本町は南牟婁郡の中央にありて、西北に一帶の長丘連阜を負ひ、東は滄渺たる太平洋に面し、郡内第一の都邑なり。尾鷲より陸路十一里、海路二

荒阪村

十裡の位置にありて、戸數八百人口四千六百七十餘を有す。舊和歌山藩の所領たりし日は、代官を置きて郡内を統治せしめたる所にして、東西五町、南北十町に亘り、郡役所稅務署區裁判所の設けあり。此處より泊峠大吹峠の二小坂を越ゆれば新鹿村大字波田須に達す。此の間道程約一里半、道路より海岸に偏し秦徐福墓と稱するものあり。往昔秦始皇不死の藥を東海に覓めんとし、徐福を蓬萊に遣はしたるが、徐福は片帆滄溟を搜りて熊野に上陸し復た還へらず、遂ひに此處に住みて逝きたりと云ふ、傳説信すべくもあらず。此の海岸一帶由來奇勝に富み、市街を距る東十町の海岸に至れば鬼ヶ城あり、巨巖屋宇の如く高さ十餘間、其の下深く窟をなし、怒濤其の根に吼えて奇絶名狀すべからず。文字岩また町の西北花城山の西麓字壘堂と稱するところありて、鉦岩の高さ約二十間、幅約十二間、岩面に驚去徐仙子深入前秦雲借問超逸趣千古淮似宕の五絶を刻す、文字の大きさ方一尺五寸、橘南祭の刻むところと云ふ。

波田須より新鹿を経て逢神阪を越ゆれば荒阪村に至る、村は木の本町より

約三里の處にあり、風趣掬すべし。附近に二木島港あり、港は汽船の寄港所にして木ノ本との往來最も便なり。

縣下の名勝として世に知らるゝ瀨八町は、南牟婁郡に屬する熊野川の一支流北山川に沿へる多度及玉置との間凡八町許の稱にして、木ノ本町より約八里餘の北にあり。奔流此處に至りて淀みをつくり、水面鏡の如く滑かにして、兩岸の絶壁は屏風を立てたる如し。溪流の深きところ十五尋、舟を此處に泛べて遊ばんか、赤壁の勝も雷ならずと云ふ。此の溪或は山崩れの爲め河水を閉塞してかゝる一種湖水に似たる状態を生ぜりと云ふ説あれども、若し此の湖が山崩れの爲め河流閉塞せられて生じたるものとせば、水餘りに深きに過ぎ、兩岸數十丈の絶壁はまた閉塞湖として説明する能はざる所なり。蓋し思ふに往古茲に一瀑布ありて浸蝕作用の爲めに漸次退却したる遺跡ならんか。地は山間に偏し交通不便の處にあるに拘らず、旅人の杖を曳くもの多き、また其の如何に風光の優絶なるかを知るに足らん。又此の上流十數町の處にも新瀨八町とも稱すべき所ありて其の風光の奇絶なる敢へて舊瀨八町に劣らず

と云ふ。

かくて瀨八町の勝を訪ひて再び木の本町に出づ。町の西南約五町餘有井村大字有馬の海邊に至れば又花の窟と云ふあり。巖石壁立する事二十七間、正面に方三間許の壑を作り、玉垣を周らし拜所を設く、花を以て祭るより起れる名なりと猶致ふべし。

熊野街道はまた始終縣の東南海岸に沿ひ、殆ど一直線に奔りて、有馬市木阿田和井田等の諸邑を過ぎ、熊野川を渡りて和歌山縣に入れり。

桑名より參宮街道に沿ひ、志摩半島を周りて此處に至れば、即ち縣下の海岸線を繞り盡したるものなり。今は更に筆を新たにして龜山以西に及ばざるべからず。龜山より以西鐵道線路は山谿の間を過ぎ、街道と相繼れて關町に入れり。

此の驛由來東海道大和街道の要衝にして、往昔日本三關の一と聞えし鈴鹿の關の遺跡なり。戸數七百餘人口四千百五十餘を有し、鈴鹿郡第一の大邑たり。停車場より西北約四町大字新所に有名なる地藏院あり、院は天平十三年

關町

鈴鹿山

僧行基の草創にして、本尊の地藏は一休和尚の開眼なりと傳ふ。西北三十町市ノ瀬より國道を右折して行くこと十五六町にして筆捨山あり、山甚だ高からざるも、奇岩起伏し、八十瀬川は涓々其の麓を繞る。齋藤拙堂其の勝を贊し、千仞峭崖誰得攀古松倒掛怪巖間良工苦心不能畫投筆名高乘筆山の一詩を賦す。附近阪下村に琴橋址鏡石不斷櫻等の奇勝あり、白川村大字鷺山に羽黒山の絶景また見るべし。

之より阪ノ下の小驛を過ぐれば鈴鹿峠あり、即ち郡の西端にして、伊勢近江の國境にあり。昔は東海道の要關たりしなり。此の山海抜三百七十三米に過ぎざるも四近峰巒重疊俗に入八百八谷の稱あり。山頂に鈴鹿神社あり。就中西行法師の鈴鹿山うさよをよそに振すて、いかになり行くわが身なるらんの古歌入口に膾炙す。

峠より以西近江に入り土山水口三石部等の諸驛を過ぎ、草津に至りて中仙道に合して京都に向ふ。一方に於て大和街道は關より分岐して加太峠を越へ柘植波野田の小邑を経て、笠置奈良に通ぜり。鐵道線路は鈴鹿峠の峻嶮を避

け、舊東海道を離れ大和街道と相續れて加太より柘植に至り、此處に於て草津線と大阪線とに分れり。

柘植驛は上柘植の北に在る小驛なれども、伊賀盆地の咽喉をなし兼て近江路の要衝に當れり。此の地由來俳聖芭蕉の出生地として夙に世に知られ、芭蕉の碑は停車場を距る約十町の所にあり。草津線は柘植よりして、貴生川三雲右部の小驛を過ぎて草津に出て、中仙道と合するも、今は大阪線によりて伊賀川に沿ひ、佐那具驛を経て上野に向ふの沿道を觀察せん。

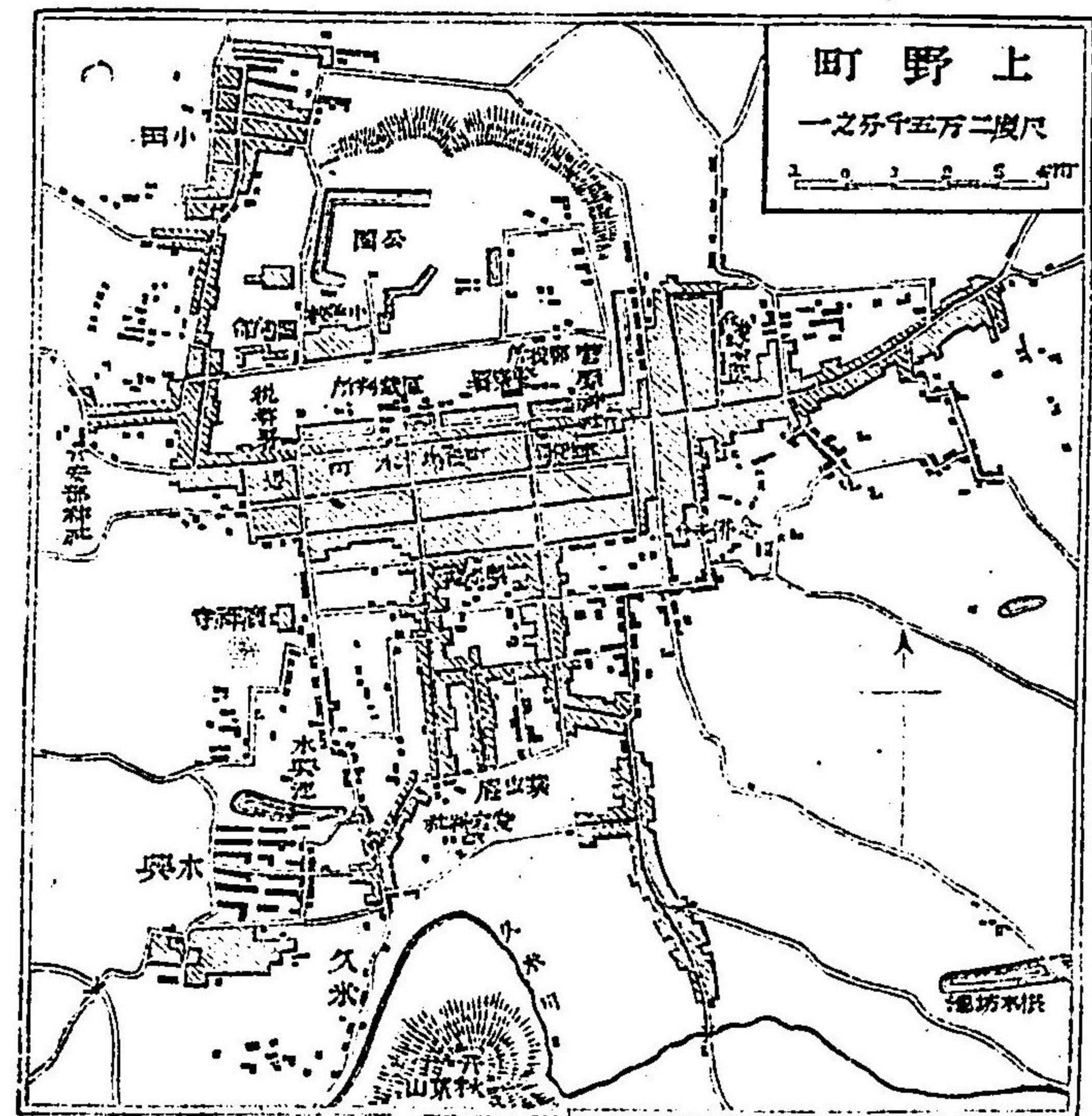
佐那具驛を過ぐれば線路は稍平衍となり、上野驛に至る。而も舊街道は西の澤より別れて西走し、上野町の中央を貫きて島ヶ原驛に至り再び線路と會せり。

上野町は舊藤堂氏分城の地にして戸數三千二百二十餘人口一萬五千四十餘を有し、伊賀の政治商業の中心をなし、阿山郡役所區裁判所稅務署縣立第三中學校(第五十二圖)、圖書館等の設あり、市街の最も主なるものは向島町西町東町赤阪町本町等にして、物産には傘最も名あり。

上野町

上野公園

上野公園は舊城丸の内にありて、明治十九年より公園となし、衆庶遊覽の



處となす。舊城の一名を白鳳城と稱し、規模宏大にして、輪奐の美を極めたりしが、廢藩の後多くは破壊し、今は只石壘を存せり。此の地第三紀丘陵の上に位し、壁頭に立ちて瞻望すれば、翠松老櫻の間伊賀盆地の風光を一眸の中に集むるを得べし。町の附近に又廣禪寺念佛寺等の巨刹及び芭蕉故郷塚あり、更に町を出

名張町

つる事少許鍵屋の辻に達す。荒木又右衛門復讐の地として名あり。又花の木村大字大野木鷹芝より木興川原に至るの間には等夜野あり、今井山には今井兼平の墓あり、附近の岩倉峽は花崗岩の奇巖溪澗を挟み、激流其の裾を嚙んで流る、水力電氣發動所の設けありて、上野町の電燈に供せらる。

上野町より正南淺宇田の小驛を過ぎ、山間の道を進めば名賀郡に入る。郡の西端に名張町あり。上野町を距ること四里十四町、東西約九町、南北約三町、戸數一千百九十餘人口五千四百二十餘を有し、名賀郡役所稅務署等あり。此の地は大和街道の一驛なるを以て、商業盛なると上野町に譲らず。地に名張第址あり。(天正十三年羽柴定次伊賀に率たる時、松倉右近勝重八千石を領して始めて此處に城を築き、後屢變遷し、藤堂氏の封を津に受くるに及んで其の支府とす)。町の西北を流る、名張川は一名を梁瀬川又は東川と稱し、古歌に「やなせ川ふちとさだめぬ世ときけば我身を深くたのまれぞする」と云へるは此の川の下流を詠ぜしなり。今此の附近に架するところの橋を新町橋と云ふ。鮎はまた此の川の産物として世に知られ、町の物産には葛澁油最も世に

赤目四十八

知られ、松茸香蕈の類又此の地方に甚だ多し。名張町に市守宮、瀧川村に延壽院道觀長者の宅址等あり。

赤目の瀧は瀧川村大字長坂にあり。飛泉多く、世に赤目四十八瀧と稱す。名張町より南方約二里、山麓延壽院迄は新道腕車を通じ、院より溪澗に沿ひ盤廻して登ること二町にして行者瀧に達す。此より以上不動布引荷擔琵琶等の瀑布あり。頃者荆棘を拓き、峭厲を夷らげ、登山に便ならしむ。世に傳ふ役行者が此の山を開きし時、不動明王赤目の牛に騎して出てたるより其の名起ると。地固より脱塵の仙境にして、嘗に銷夏の勝地たるに止まらず、春秋の探勝また甚だ佳なり。

滋賀縣

本縣は近畿地方の東北部に位し、東南は岐阜三重の兩縣に隣り、西南は京都府、北は福井縣に界す。東西長十五里二十二町、南北二十五里二十三町、管内の全面積二百五十八方里三千九百七十九方秆中間に八十方里九一千二百

地形

方秆の琵琶の大湖あり。分ちて大津市滋賀高島栗太甲賀野洲蒲生神崎愛知犬上阪田東淺井伊香の一市十二郡とし、縣廳を大津市に置きて之を管す。戸數十三萬一千四百六十にして人口七十一萬四千五百四十八即ち一方里平均二千七百六十四人一方秆百七十九人に當るも本縣内には琵琶の大湖を有するを以て試みに其面積を控除すれば、人口密度は一方里三千八百人一方秆二百四十七人にして、京都府に比し少しく優れり。各郡中面積の最も大なるものは高島郡にして、四十一方里七五六百四十三方秆、甲賀郡之に次ぎ、三十四方里八五(五百三十六方秆)、其最も少なるは、神崎郡にして、七方里五五(百十四方秆)に過ぎず。而して縣下最も人口の密なるは野洲郡にして、一方里に四千九百七十六人を容れ、最も疎なるは高島郡とし、一方里僅かに野洲郡の四分の一に過ぎず。

本縣は四方山岳を以て圍まれ、殊に東方には伊吹山脈南北に走り、西方には比叡山脈亦之に平行して同方向に連るあり。地勢此等の山岳より次第に中央に向て傾き、爰に一大盆地を造り、中に琵琶湖(第七十二圖甲)を湛ゆ。されば

縣内河川の多くは、皆源を四圍の連山に發して、中央の湖水に注ぎ、其主要なるものは栗太郡の大戸川、甲賀郡の横田川(下流野洲郡の野洲川)日野川、愛知川、犬上郡の犬上川、阪田郡の天ノ川、東淺井郡の姉川、高島郡の安曇川等にして、其他の諸川及び支流屈指するに迫あらず。八百八水の俗稱亦空しからず。然れども此等の諸川、平時は水量極めて少なく、或は時に全く乾涸せる者あるも、一朝霖雨に際すれば忽ち濁水暴溢し、堤防の決潰を來し、又湖水の汎濫を見る患あり。而して湖水は其の南端より流出して勢多川となり、京都大阪の二府を貫き下流は宇治川淀川となり大阪灣に排出せらる。是等諸川の土砂を排出し來りて構成せる湖邊の地は一帶の平野をなし、湖西は地勢西より東に傾斜し、其北部は原野多きも、南部は湖岸に狭少なる耕地あるのみ。されど湖東は土地平坦にして沃野廣く高度の生産力を有せり。又南北は一般山岳に富み、峯巒起伏して平野稀なりと雖、南部の製茶、北部の養蠶は、東部平野の米作に次ぎて、管内著名なるものなり。されば縣下は概して地味肥沃に、村落よく開け、全人口の大半農を業とせるなり。

交通

縣下の交通は、陸に於ては、東海關西北陸の三大鐵道及東海關西兩線を連絡せる近江鐵道の外東海中山北國北國脇街道の四大街道、及び西近江路朝鮮人御代參若狹街道等の街道あり。共に相待ちて縣の内外に交通の遺憾なからしめ、又水上には大湖湖南古川の三汽船會社各數艘の汽船を琵琶の湖面に浮べて、交通の連絡を保てり。縣下の交通豈又便ならずや。今少しく此等交通の詳細を述べし。

鐵道

東海道より來れる鐵道の幹線は、美濃の關ヶ原より、一縷の狹隘地を過ぎ、本縣に入りて阪田郡に出で、湖岸の米原町より犬上郡彦根町に至り、愛知神崎蒲生野洲栗太諸郡の西方湖岸近く、或は之に沿ひ或は之より離れ、愛知神能登川八幡野洲等の市街を過ぎ草津に於て關西線を併せ、湖口勢多の鐵橋を渡り、滋賀郡大津市の停車場馬場に來り、逢坂山の隧道を過ぎ、京都に達すべく、其本邦主要の幹線なるを以て、旅客貨物の交通極めて頻繁なり。其米原驛より北に赴くものは、長濱町を経て、敦賀に向ふ者にして、延びて北陸諸國に入り、日本海岸と太平洋岸とを連絡する主要なる交通線をなせり。又

街道

關西鐵道は草津驛より東方に向ひ、甲賀郡に入り、伊賀柘植ツグキに入り、終に伊勢四日市を経て名古屋に至り、東海道線と連絡し、又其驛貴生川驛と、東海道線彦根驛とを連絡する山の手鐵道は、即ち近江鐵道にして縣下の東方の地方的交通に便利を興ふ。

此等の鐵道線路の外に重要な交通路としては、昔の中山道街道は美濃より來り、關ヶ原に於て線路と分れ、寝物語を越えて縣下に入り、醒ヶ井驛に於て再び鐵道線路に合し、又分れて米原の東を過ぎ、鳥居本に至り、高宮にて近江鐵道を横切り、暫らく本鐵道と併行し、神崎郡五ヶ莊に於て又鐵道と合し、又分れて老蘇森を越え、日野川を渡りて鏡山の麓を過ぎ、篠原を経て野洲郡野洲森山の諸村を経て、東海道驛の草津に至る。國境より草津迄の街道十五里十八町にして、道路概して平坦なり。

東海道は三重縣阪の下より鈴鹿嶺を越えて本縣に入り、甲賀郡土山に來り、野洲川の中流横田川の左岸に沿ひ、水口町を過ぎ、三雲に至り、關西鐵道と併行して石部を過ぎ、中山道街道及東海道鐵道と共に草津に合し、猶東海道

鐵道に沿ひ勢多の唐橋を亘り、大津を經、逢阪山を越えて、京都に入る。其三重縣界より京都府界に至る延長十五里餘、昔は本邦主要の街道にして往來絡驛たりしも、今は當年の盛況を見ず。又東海道街道の一驛土山驛より分かれ口野八日市等の市街を経て中山道に出づるもの、其道程七里二十町、之を御代參街道と云ふ。路に鎌掛の峻あれども、甚しく交通の不便を感ぜず。又東海道の一驛野洲より發し、中山道と共に東海道鐵道を挟み、八幡の小事を経て、湖岸を過ぎ、彦根町に出て、遂に鳥居本に於て中山道街道に會する十里餘の街道を朝鮮人街道と云ふ。北國街道は鳥居本より北に向ひ、米原に於て東海道線を横切り、長濱町に出て、木の本柳瀬を過ぎ、福井縣に入るものにして、北陸に出づる最も主要なる街道たり。而して別に北國關街道と稱するものは美濃關ヶ原より中山道と分かれ、來りて本縣に入り、姉川の上流に沿ひ、伊吹山の麓春照に至り、伊部を過ぎて北國街道に會するものを云ひ、北陸と東海東山との捷路をなす。春照長濱間を連ぬる長濱街道は、長濱より正東に走りて美濃に出づる直路なり。

琵琶湖の東或は南に於ける街路、略ぼ此の如くにして幾多の市邑は之によりて連絡せられ、交通の便少なからざるも、湖西に於ては平地狭くして人口尠く、殖産の業亦東南部に比して遜色あるを免れざるを以て、交通路の如きも亦湖岸を走れる一線と、之より分かれて四方の山地に入る枝線のあるに過ぎず。即ち其街道は大津より湖岸の長汀を縫ふて、蜿蜒北方に走り堅田今宿等を経て高島郡の安曇川を渡り、今津に至り西に轉じて三坂嶺を越え、若狭の小濱に出るものと、猶北に進みて海津を経て越前に出づるものあり。

以上主要なる交通線路の外、猶縣の南方には横田川の左岸東海道の一驛、三雲より西南に向ひ、一路遙かに勢多川の支流大戸川の溪谷を溯れば、伊賀山城の界に近き多羅尾に至り、左すれば伊賀の上野に出づべく、右すれば即木津川の溪に沿ふて、山城笠置に出で、終に大和の奈良に至るべし。何れも皆道路險なりと雖、村落互に相連りて宿泊の便を缺かず。又湖東の平野より伊勢美濃に出づるには安樂越水澤峠八風峠五會越等あり。

水上の交通に至りては、湖上の汽船は、日日湖岸各地の連絡を保ち、陸上

琵琶湖

の便を助く。殊に湖西沿岸の地は未だ鐵道の設あらざるを以て其交通は主として此等汽船の便によるなり。湖岸にある主要なる港は、大津堅田南小松荒川南比良能登川柳川松原彦根米原長濱鹽津等にして、大湖汽船會社及び湖南汽船會社古川汽船會社等の汽船常に其間を往來す。而して河川に至りては多くは水量少なく、舟を行るに由なく、唯湖の南方を破りて南下せる勢多川は水量多きも、湖口より三里にして國境に近づくに及び、兩崖相迫り來りて巨巖怪石河底に起伏し、激流急湍、所謂鹿飛び米磨等の險をなし、爲に水路を沮碍し、其舟楫を通ずるは湖口より僅かに一里餘に過ぎざるなり。然りと雖別に有名なる疏水工事ありて、湖の西南より長等山下の隧道を経て、頃刻にして京都の粟田口に達する運河ありて交通の便を與ふ。

琵琶湖は殆んど本縣の中央に位し、北に廣くして南に狭く、形琵琶に似たり。我國第一の淡水湖にして全縣面積の六分一を占め、此國の古名淡海亦是に依て起れり。此湖水が瀬戸内陥落地帯の一部として陥落によりて成れるは既に述べたるが如し。而して四圍の山脈より發する諸川は皆こゝに流入して

土砂を流し、湖岸に三角洲を作りて著しく第四紀新層の發達を促し、湖面を縮小せしむると同時に、次第に新地の面積を擴張しつつあるなり。湖岸は出入甚だしく、長汀曲灣參差相連れるのみならず、又陥落浸蝕の殘したる奥沖多景竹生等の諸島は或は湖岸に或は湖心に散點し、爲に湖水の風景をして一段の美を加へしむるものあり。比良屋田三井寺粟津矢橋唐崎右山勢多の八勝は古來世上に喧傳する所なるも、湖水の勝景をして盡く算へんか、更に其幾倍なるを知らざるなり。湖水は斯く風景の美と交通の便を以て知らるゝの外、猶水産の利を伴ひ、鮎・鮎・モロコソタカ・鱒・鯉等を始め、其他鮭・鯉の漁利少ならず。沿岸の人民之に依て衣食するもの六千人以上に達し、其産額年々四十萬圓以上に及び、又湖岸の平原が湖水灌漑の利によりて穀産に富むるが如き、實に琵琶湖は本縣の生命なりと云ふ、亦誣言にあらざるなり。

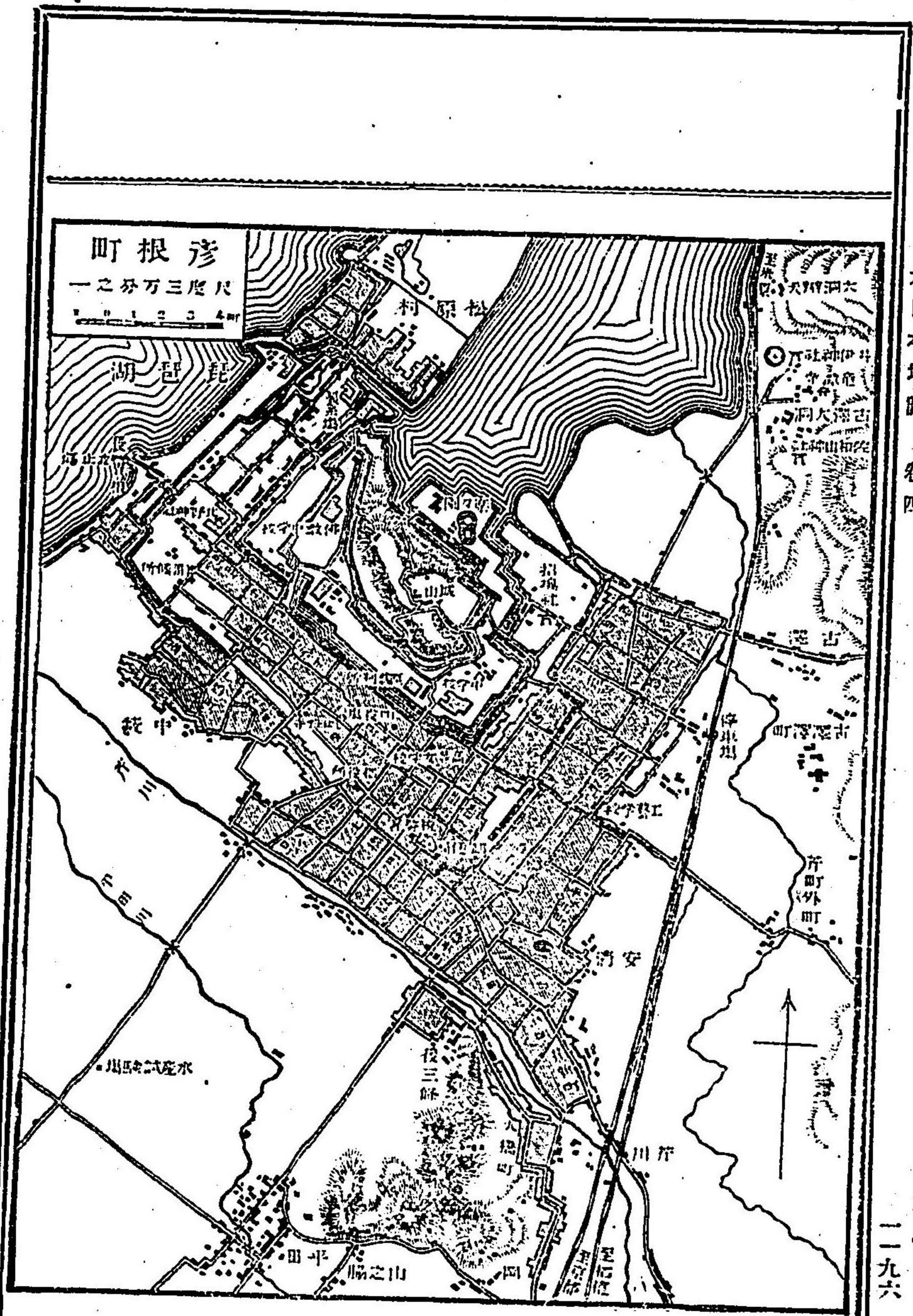
今之より本縣下を回りにて其地方の状況を見んか、先づ東海道汽車に搭し、岐阜縣關ヶ原驛を發し、西西北に向へば、地形漸く迫り、再び開瀾の地に出づれば、地は既に滋賀縣管内に入れるなり。鐵路の右方に當り直ちに眼中に

醒ヶ井村

映じ來るものは即ち伊吹山(勝吹山)にして、峻峰巍然として高く聳え、海拔一千三百七十一米、晚春猶殘雪を戴き、江州第一の高山となす。山は又日本武尊の故事を以て名高く、又藥草に富み、伊吹艾は古より其名産とする所なり。已にして汽車西南に向へば頃刻にして醒ヶ井驛に着す。驛は即ち舊中山道の一驛にして、地に清泉あり、日本書記に所謂日本武尊居醒の泉とは之を謂へるなり。此の村に近江住友製絲場あり。其の規模大ならざれども、亦本縣下屈指の製絲場たり。汽車は舊街道を離れて猶西に向へば、入江村米原に至る。米原は湖の東岸にあり。北國街道の一驛たるのみならず、鐵道の北陸線と東海道線の分岐點に當り、加ふるに湖中汽船の便を控えて、水陸の利二つながら宜しく、交通頻繁にして將來益、販を極むる所なるべし。磨針嶺は米原の南方にあり。前に湖水を臨み、後に龍仙山を吞ひ、眺望の勝あり。米原を發して西南南に向へば彦根町に至る。町はもと井伊氏三十五萬石の舊城市にして、東西廿一町、南北十三町、市坊數四十九、戸數三千百八十八人口は二萬餘を越ゆ。町内に犬上郡役所區裁判所稅務署等の諸官衙、縣立第一中學校高等

米原

彦根町



女學校
私立第
三佛敎
中學等
あり。
工場に
は山中
製絲場
及琵琶
製絲場
あり。
鐵道は
東海幹
線の外

高宮村

に又此地を起點として南方に走れる近江鐵道あり。湖上の汽船は市外の長曾根港に發着して、水陸の便を控え、縣内屈指の都會なり。湖岸の小丘に彦根城あり、金龜山彦根寺ありしを以て一に金龜城とも稱す。維新の後明治四年より陸軍省に屬し、二十四年に御料地となり、同廿七年に井伊氏に賜はり、近來に至りて公園と成し、樂々園の稱あり。頗る眺矚に富み、湖上絶勝の一として其名世に高し。測候所亦此園内にあり。佐和山城は彦根の東北佐和山にあり。湖東の雄鎮を以て名ありしが、關ヶ原の役後井伊氏彦根に城を構へしより、此の城を廢し、今は廢墟を存して滿目蕭條たり。山麓に大洞と稱する地あり。支湖に臨み櫻樹多く花時は一帶の香雲碧波と相映じ來り遊ぶもの多し。井伊神社は井伊氏の靈を祭る。外村半雲の碑亦此の境内にあり。多景島は長曾根港を去る西方一里周圍四町餘の小島なれども、湖上の勝景を以て知られ、中に日蓮宗の見塔寺あり。白石島は其西微南に當りて湖上に聳立する岩礁なり。高宮村は彦根町南方の小驛なれども、水上藤細工場縮緬共同組合場等の工場あり。彦根より姑らく官線と離れ近江鐵道に乗り換へて東南

高野村
愛知川

に向へば、線路は畧ぼ中山道舊街道に沿ひ、左に鈴鹿山脈の峰嶽を望み、是等連山の間より發する犬上川愛知川の平野の間を奔るべし。此平野は肥沃なるも、其上源地方森林濫伐の爲め、豪雨の至る毎に忽ち水量を増し、平野に充溢して洪水を起すこと稀ならずと云ふ。愛知川の谷はよく開け其上流に村落多く、石搏越八風峠を越ゆれば、三重縣の桑名四日市に出づるを得べく、蓼島はまた峠の西麓にありて一宿驛をなし、加之近傍政所鑛山あるが爲めに山間の一都會を成す。河流を下り峡谷を出でんとする所を高野村と云ふ。村内に一寺あり、永源寺と云ふ。禪宗臨濟派の本寺にして紅楓を以て著はれ、攝の箕面山、山城の高雄山と共に稱せらる。入若し此地に遊ばんとすれば、能登川或は八幡より八日市を過ぎ山上村に出づるを例とす。路廣くして能く車を通ず。

愛知川驛は愛知川の北岸にあり。此の地は中山道街道及び近江鐵道の一驛たるのみならず、亦東海道鐵道を距ること遠からず。交通運輸甚だ便にして商業盛なり。愛知郡役所稅務署も亦此の所にありて、一郡の主腦を成す。愛

八日市町
日野町
土山町

知川驛を發し、鐵橋を渡り東南に向へば一里弱にして八日市町あり。人口五千餘を有する神崎郡の一都會にして、近江鐵道と御代參街道の衝路に當り、商家多く櫓を列ね物貨輻湊すること昔より盛なり。然れども本郡政治の中心は、中山道に沿へる五箇莊村にして此處に神崎郡役所あり。八日市町より蒲生郡に出て、市邊村を経て岡本に出て鐵道に分れて東に向ひ御代參街道に沿ひ日野川を遡れば、四里弱にして日野町あり。戸數一千餘人口六千八百餘を有し、龍王山の裾、高燥なる臺地にあり。亦繁華の一市街にして、居民は八幡町と同じく古より諸國に行商を爲すを業とし、到る所に支鋪を置く。世人之を日野商人又近江商人と云ふ。富山縣賣藥行商と好一對にして、而かも徳川時代より豪商輩出せし地なり。日野町を出て猶御代參街道を東南に行けば、暫時にして鎌掛峠二百四十五米を越えて土山町に至る。土山は御代參街道の終點昔の東海道街道との會合點にして、溪谷の一村落なれども、紅茶櫛等の産あり。町の東方に田村神社あり、田村鷹を祭る。

再び近江鐵道岡本に歸り、鐵路東南に向へば、甲賀郡に入り終に水口町に

水口町

安土村

八幡町

一一〇〇

至る。水口町は又土山驛と同じく東海街道の一驛にして、戸數一千三百人口八千二百餘を有し、甲賀郡役所稅務署區裁判所等ありて、横田川齋谷地方の中心を成し、商業の盛なること亦郡内第一とす。此の地の籐細工は水口細工と稱し、文庫笠煙草入等ありて世に其名高く、今は大に海外に輸出す。鐵路は猶南に進み終に貴生川を渡り、關西鐵道貴生川驛に合す。更に彦根に歸り、是より復東海道鐵道に山りて河瀬能登川を過ぎ安土村に至れば、安土山あり。山は小なれど山頂に城趾あり。織田信長の經營せる所、今は荒廢して滿目蕭條たり。山の半腹に總見寺あり、遠景山總見寺と號す。佛堂の内に信長信忠の像を祭り、大湖に對して風景の美云ふべからず。安土村より猶西南に向へば八幡町に至る。其間の湖岸には奥沖の二島あり。奥島は不動尊及び長命寺を以て顯はれ、沖島は漁業を以て名高く、今は七十餘の漁家ありて鱒鮒鰻等の漁獲最も多し。八幡町は八幡停車場の北にありて、朝鮮人街道の衝に當り、彦根町を距る六里二十五町餘、市街の廣さ東西十町、南北六丁、戸數一千五百餘人口七千三百に餘り、湖岸屈指の市邑にして、浦

生郡役所區裁判所稅務署あり。又其接續村宇津呂村に縣立商業學校あり。近江セメント會社の工場亦此町にあり。鐵道の外湖上の汽船多く爰に寄泊して、交通運輸の便を兼ね、商業繁盛なり。町は日野町と同じく近江商人の根據地にして、各地に行商するもの少なからず。市の北には八幡山の城址あり。天正年間豊臣秀次の築きし所と云ふ。麓八幡神社は譽田別尊神功皇后及び玉依姫を祭り、境内廣く社殿の構造亦壯麗なり。毎年四月の卯祭には特に賑ふを以て、遠近より來り賽するもの多し。町の正西一灣口に岡山あり、小丘なれども、山上には八疊石八艘隱等の巨岩ありて眺曠に富み、山麓には筆ヶ崎視ヶ淵等の勝あり。

八幡町より猶西南鐵路に沿ふて進めば日野川を渡り之より漸く湖岸を離れ、野洲を過ぎ栗太郡草津町に至る。野州川鐵橋の東に高く聳ゆるは三上山にして、一名杉山又蜈蚣山と稱し、其形の富士に似たるを以て又近江富士とも云ふ。山峰兩分して南を雌山、北を雄山と云ふ。野州村は中山道街道及朝鮮人街道の交又點にして、野洲郡役所あり。草津は栗太郡の一都會にして、古よ

野州村
草津村

矢橋浦

り、東海中山兩街道の追分として繁華なる宿驛をなし、今は東海關西兩鐵道の交叉點として大驛をなせり。戸數二千六百人口五千四百、栗太郡役所稅務署等あり。有名なる姥が餅は古來旅客の慰藉を以て知らる。又此の地の竹鞭は世に名高く海外に輸出せらる。

草津の西矢橋街道を過れば、一里許にして一津あり、矢橋浦と云ふ。湖岸の要津にして路一里半にして大津に達するを得べし。前は遙かに大津打出の濱を隔て、四明峯に對し、湖上の歸帆亦近江八景の内に加はる。草津の南には野路の玉川あり、さを鹿のしからむ萩に秋見えて月も色ある野路の玉川の古歌は即ち此の川を稱するもの、本邦六玉川の一にして又萩の名所たり。

草津より更に關西鐵道に乗り換へて、東に向へば地勢漸く逼り、野洲川の谷を過ぎ、上流横田川の左岸に沿ひ、石部町三雲、貴生川、深川、大原等の諸驛を経て伊賀の柘植に出て、大阪奈良より來れる幹線と會し、伊勢に出づ。昔の東海道街道は、此の線路に接近して三雲に至り、分れて東北に向ひ、水口町に於て近江鐵道を切り、猶横田川の上流を溯り、土山に至り、鈴鹿峠を越え、

石山村

伊勢の關町に達す。街道にある石部町は甲賀郡内屈指の町にして、草津を距る二里餘、戸數七百人口三千、近傍より産する石灰は此の地に於て販賣せらる。再び草津に歸り、東海道鐵道によりて南西に向へばやがて湖口勢多の鐵橋を過ぐべし。勢多川は汪洋たる大湖の水を收めて栗太滋賀兩郡の境を流れ、黒津に於て大戸川を併せ、是より峡谷をなし、鹿飛び米かしの急湍を造り山城に入る。(第二圖乙)鐵道橋の下流には、有名なる勢多の長橋あり。東海道の通ずる所にして、別に青柳橋勢多の長橋から橋とゞろき橋等の名あり。川の中流に小島ありて大小二橋に分れ、小橋は長さ廿三間、大橋九十六間高欄古色を帯び、近く石山の翠巒に對し、所謂勢多の夕照は亦近江八景の一として知らる。石山亦八景の一にして、長橋の下流滋賀郡石山村にあり。綠樹蒼鬱たる丘上に石山寺あり。紫式部源語を編むの所と稱せらる。大理石磊々たる庭園の間を辿りて崖頭に出づれば、所謂觀月臺あり。勢多川其麓を流れ、遙かに大湖の汪洋たるを望み、眺矚最も佳にして殊に觀月の勝臺の名を辱かしめず。石山の地又莖を以て著はれ、山城の宇治川と併ひ稱せられ、遠近の士女

來觀するもの少なからず。

長橋を渡れば、粟津ヶ原の松林一帯田畝の中に横はり、其晴嵐は又八景の一に數へらる。壽永の役義仲兼平の戦死せしは此地にして、兼平の墓は松原の西北三町許の所にあり。一基の石碑行客をして轉た凄沍の感を起さしむ。

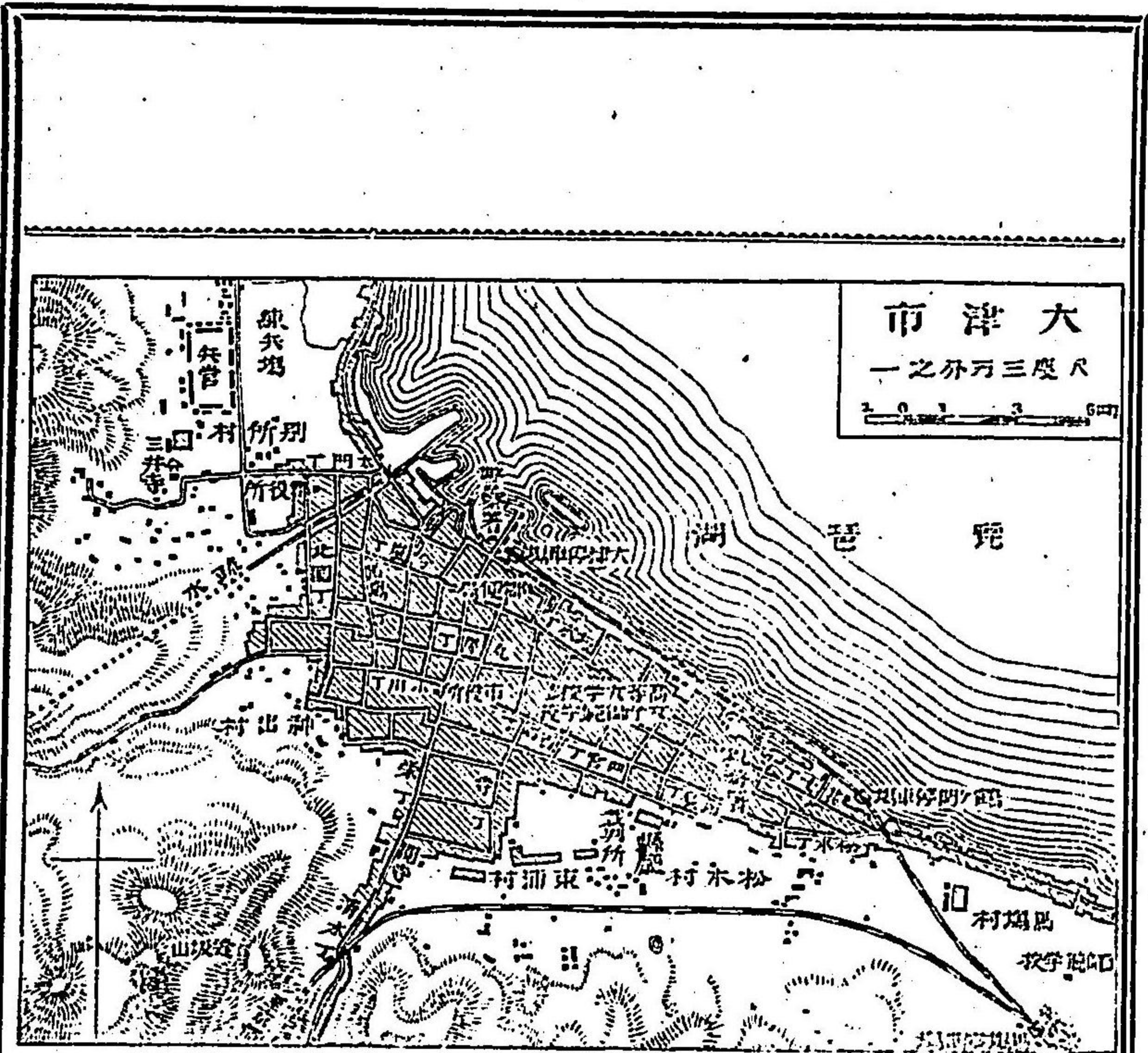
膳所町

膳所町は、舊本多氏の城邑にして、古より日枝神社の神饌を此地より供せしを以て名あり。人口七千餘、師範學校及び第二中學校あり。市街の側茶臼山には招魂社を安んず。市街は湖岸に沿って連続して遂に大津市に至る、

大津市

大津市は縣の西南隔に位し、水陸交通の便を具へて、本縣政治の中心を成せり。市の廣さ東西二十五丁、南北十二町、戸數五千八百人口殆んど三萬八千に達す。官衙には滋賀縣廳滋賀郡役所大津市役所大津地方裁判所廣裁判所稅務署等あり。學校には縣立女子師範學校市立高等女學校等あり。其他會社銀行等少なからず。中にも近江製麻紡績株式會社は、其創立比較的古く、職工徒弟を合して其數六百餘名あり。盛に麻絲及織物の製造に従事せり。此地にまた歩兵第九聯隊の兵營あり。停車場のある馬場驛は市の東にあり。木會

馬場



義仲の墓と俳祖芭蕉の墓亦た其の附近にあり。市の西方長等山の麓には天台宗寺門派の本山三井寺あり。圓城寺と稱す。近松寺は圓城寺の後方山の半腹にあり。境内、多く櫻楓を植ゑ、春秋の候來たり訪ふもの甚はだ多し。更らに羊腸たる坂路を攀づれば、安然塔あり。三井寺の眺望とともに絶勝の名あり。市の北方錦織村は昔の大津にして、御殿の跡あり。即ち成務天皇の志賀の高穴穗宮、天智天皇の大津宮皆此の舊跡にありしなり。彼のさゝ波や志賀の都はあれにしをむかしなからの山櫻哉と、

忠度が詠みたりしは即ち此の地なり。志賀都廢替の後、一旦名を古津を改めしを、後世其の位置を南方現時のところに遷して、大津と呼びしなり。市の西北に弘文帝の陵あり。鐵道は大津より西南に走り、逢阪の隧道を過ぎて京都府に入る。東海道の街道も亦逢坂山を越え、關の清水の跡を尋ね、鐵道に沿ひ又山城に入り是より道岐れてことなり、一は山科に、一は伏見に至る。疏水は大津市の三保崎より西南三井寺の麓を開鑿して、逢坂山の北小關越の下に長隧道を貫き、山城に入る。更に是れより湖西の地を觀察せんか、大津を出て、長汀曲浦をたどり、北に向ひ滋賀浦に出れば、幾もなくして唐崎に至る。坂本村の東端湖岸にあり。一幹の老松翠蓋廣く地を蔽ひ、數百基の支柱漸く其枝を支ふ。唐崎の夜雨亦八景の一なり。比叡の峻峯高く其西に聳え、山上に延曆寺あり。地滋賀縣に屬するも、記事は便を圖りて京都府の條に述べたり。寺に近く紀貫之の墓あり。山麓坂本村より登ること五十町にして達すべし。坂本村には官幣大社日吉神社(第五十七圖乙)あり。大津市を距る二里弱と云ふ。本社七、末社十四あり。其の山王祭には俗に血祭と稱し雜沓を極む。

堅田村

蓋縣下第一の祭なり。堅田村は之より北方一里餘湖岸にあり。岸に近く湖中に一堂あり。世に堅田の浮御堂と稱するものにして、海門山満月寺と云ふ。堅田の落雁は又八景の一に數へらる。堅田村より左に分れたる間道は、比良山の西を過ぎ安曇川の流に沿ひ、やがて三坂峠を越え、若狭の小濱に出づるものなり。堅田より北に進み、眞野濱今宿を過ぎ、比良の浦邊を辿れば、南には和邇川の三角洲、北には雄松崎の突出するありと、其間に一大灣を擁し、比良嶽は其の西方直ちに一千二百餘米の高さを以て湖上を壓するを見るべく、頂上の白雪三月に至りて消えざることあり。比良の暮雪は八景中の殊に名高きものなり。猶湖岸に沿ひ行けば小松村あり。街道を距る少許にして瀑布あり、布引瀧又溶拜瀧と稱す。高さ廿七丈餘、湖西の一壯觀たり。明神崎或は五位崎は小松村の東北比良山脈の盡頭高島郡の界にありて、長く湖中に斗出し、白砂青松一勝區をなす。崎を回れば大溝町あり。町は一に勝野と稱す。高島郡中屈指の市區にして、是より途又二つに分れ、西に向ふものは堅田より安曇川の上流に沿ふて來れるものと、市場に於て相會し、三坂嶺を越えて

大溝町

青柳村

今津村

海津村

長濱町

小濱に出づるものあり。又北に進めば、縣下の大河安曇川の下流を渡るべし。安曇川は源を山城に發し、比良嶽の西方を北に向ひ、市場の近傍に於て大屈曲を成し、山を出て、第四紀古層を二分し、泰産寺野を右に饗庭野を左に見東流して猶其下流に廣大なる三角洲を造りて湖に注ぐ。新儀本莊青柳等の諸村皆其三角洲の上にある。青柳村には近江聖人中江藤樹の邸址あり、饗庭野の北方今津は、湖邊の港津をなし、亦若狭街道の要路に衝り、湖上汽船の往來陸路と相待ちて物貨輻輳市況の殷賑なる郡内第一にして、高島郡役所區裁判所等あり。戸數九百餘人口四千五百六十あり。今津村より三里餘にして海津あり。越前街道の要路にして商業の盛なる今津に譲らず。大崎は東南に斗出し、一灣を隔て、葛籠尾崎あり。湖岸急斜絶壁をなせる所少なからず。海津より北に赴くと二里にして國境七里半越を過ぎ、越前に入る。郡内都會の數少なきも、村落到る處養蠶の業盛なり。

再び湖東阪田郡の米原に飯り、敦賀線に依りて長濱町に至り、是より猶北方に向はん。長濱町は米原を距る二里餘敦賀線及び北國街道の要路に當り、

木の本村

郡内第一の港市にして水陸の便を極め、百貨輻湊豪商櫛を列ね、商業頗る盛にして、人口一萬一千餘あり。町に阪田郡役所區裁判所稅務署等あり。學校には縣立の農學校あり、近江製絲工場またこゝにありて、其の産額甚大なり。有名なる濱縮緬は此の地の産なり。この地昔は今津と稱せしが、豊臣秀吉居城を造りしより長濱と改む。古城址は今桑園となり終りぬ。

長濱町よりの鐵道は、北國街道と北國脇街道の中間を北に走り、姉川を渡りて虎姫村を過ぐ、村に東淺井郡役所あり。暫くにして支流の高時川を渡りてその北方木の本村に至る。こゝには伊香郡役所及び郡立伊香農學校あり。鐵道の一驛たるのみならず、北國兩街道の合點に當り、商業交通共に郡内に主たり。北方余吾村に余吾湖あり。湖は琵琶湖と同じく陥没によりて生ぜし者にして、附近の地天龜天正の古戰場たり。鹽津濱は又郡中の一小市をなす。鐵道は余吾村を過ぎ柳ヶ瀬村を経て、有名なる大隧道を過ぐれば、敦賀に向ひ、又街道は猶北方に向ひて椽木峠を越え福井に至る。

和歌山縣

位置

廣袤

人口密度

和歌山縣は近畿地方の南に位し、西南一帯の地は海に面し、北は和泉山脈を以て大阪府と界し、東は重疊せる連山を以て奈良縣の南部を抱き、又た熊野川の巨流に由て三重縣に接す。縣の廣袤は東西凡そ廿三里、南北凡そ二十四里、面積三百一十一方里(四千七百九十七方籽)にして、縣廳を和歌山市に置く。其の管する所は一市七郡にして、即ち和歌山市及び海草郡、伊都郡、有田郡、高野郡、東牟婁郡の諸郡とす。戸數十二萬六千三百九十餘、人口六十九萬六千七百七十餘にして、一方里平均二千二百四十人(一方籽百四十五人)に當り、各郡の中面積最も大なるものは東牟婁郡にして、面積八十一方里(千五百五十方籽)、其の最も小なるものは海草郡にして、十八方里(二百六十八方籽)に過ぎず。而して縣下人口の密なるは海草郡を第一とし、一方里平均七千七百人(一方籽四百六十人)を數へ、東牟婁郡の一方里平均千九人(一方籽六十六人)を最も疎なるものとす。

地勢

本縣は山嶽頗る多く、西南沿海の地並に紀ノ川、有田川、日高川の如き大河の兩岸に接する部分のみ稍平坦なり。和泉山脈は伊都郡、海草郡の三郡に跨り、紀伊見峠、土佛根、來雲山の諸嶺を起し、蜿蜒として、東西に走ること凡そ二十三里、吉野連山は東北に來り、高野山、生石峯、白馬岳となり、日高東西牟婁の三郡は連山縦横に亘り、殊に東西牟婁の兩郡は高峯嵯峨として、行路險峻を極む。大塔峰は二郡の境に屹立し、縣内第一の高峯と稱せらる、法師ヶ峯、大森山、大坂峠、大雲取山、小雲取山等其の東西に聳え、連峰綿延として聯亘せり。徳川頼宣の領土となりて、口熊野と稱せらるゝものは即ち東西兩牟婁郡を指す。斯の如く縣下殆ど山岳重疊して、土地險峻なれば従て奇勝の地に乏しからず。瀑布には彼の本邦屈指の稱ある那智瀑布の如きあり。殊に海岸に至ては山嶽直に海に逼りて、岬角灣澳に富み、絶景又少なしとせず。熊野九十九浦の如き即ち然り。季候概して溫暖にして、且つ濕氣の供給に富み、雨量の多き全國多く其儔を見ず。

本縣の地勢既に斯の如くなれば、山地にありては木材、薪炭の産額極めて多

交通

く、西北紀ノ川の縦谷は田野稍開け、有田川の流域は密柑の産出を以て名あり。其の海岸に瀕する地は漁業盛に行はれ、海産物の收穫甚だ多し。殊に東牟婁郡沿海の捕鯨の業の如きは、近年頗る盛況を呈し、大に注目すべきものあり。

大坂街道

縣内に於ける鐵道は、大阪府より來り和歌山市に出て、之れより紀伊川の縦谷に沿ひて東行し、縣内を横貫して、奈良縣に向ふものあるのみ。主要なる街道は和歌山市を中心として六個あり。(一)大阪街道は縣下の街道中最も大なるものにして、和歌山市より東方和佐村大字栗晒を過ぎ、紀ノ川に架せる田井ノ瀬橋を渡り、川の右岸に出て川永村を経て、北折雄ノ山を踰え、山口村大字瀧畑を過ぎて大阪府に出づるものにして、其の間三里三十二町餘、悉く車馬を通ず。(二)大和街道は和歌山市より紀ノ川の縦谷に沿ひて、那賀郡の岩出名手の諸驛を過ぎ、尙ほ東進して伊都郡に入り、粉河妙寺名倉橋本隅田の諸町村を経て、鐵道線路と殆ど相平行し、奈良縣に至る十三里十一町餘の道路を云ひ、(三)和歌山市より西北松江村を経て、加太港に至る三里二十三町

大和街道

淡路街道

高野街道

龍神街道

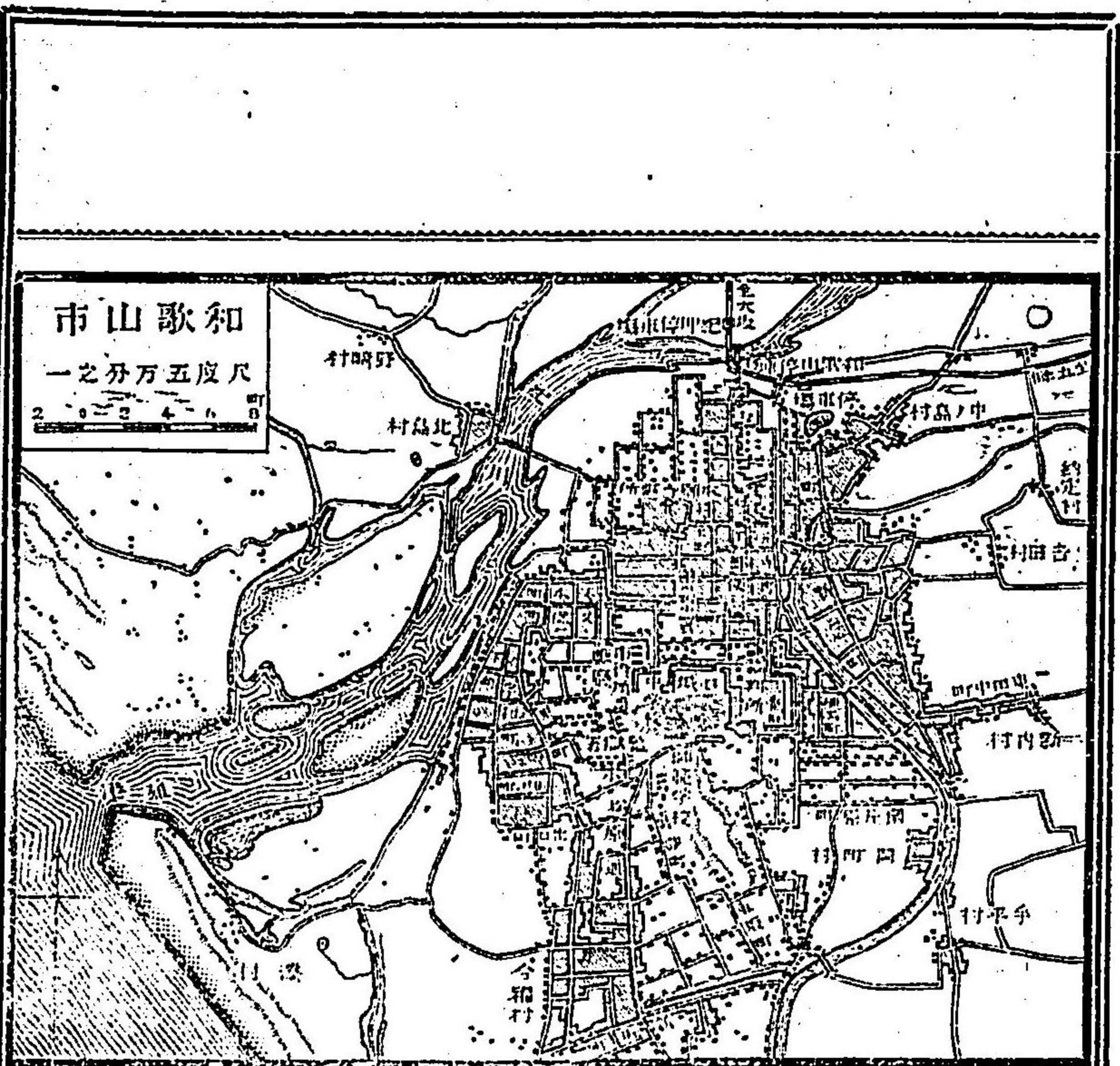
熊野街道

餘の道路は淡路街道と稱す。(四)高野街道は大和より來り、伊都郡紀伊見峠を経て、橋本町に至り紀ノ川を渡り、左岸の學文路河根を経て、高野山に達する道路にして、其の間六里廿町餘あり。紀伊見峠より河根までは人車を通ずるも、河根より高野山までは所謂高野の山路にして車を通ぜず。(五)和歌山市より宮岡崎西山東の諸村を経て、那賀郡に入り、東野上村大字動木下神野村大字神野を経て有田郡を貫通し、日高郡龍神に達する道路は、所謂龍神街道にして、總里程十八里三十町の間約十二里二十八町は、車を通ぜざる峻難の道路なり。(六)熊野街道は和歌山市より海岸に近く南進して、日方内海の町村を経て鹽津村に入り、更に濱中椒の二村を過ぎて有田川を渡り、湯淺町を経て鹿が瀬峠を越え、御坊印南南部を過ぎて田邊町に到り、是より道路は二岐に分かる。一は中邊地と稱し、東北東の山路を指し、近露本宮天満の諸驛を経て新宮に達し、他は大邊地と稱し、殆ど海岸に沿ひて富田坂佛坂の峻坂を経て周參見に出て、長柄坂其の他幾多の山脊溪谷を過ぎ、紀州南端の一都會串本を経て古座川を渡り、古座高池の諸驛を経て、下里天満に至り、遂に新

宮町に達す。而して天満は大邊地中邊地兩街道の會合する所なり。道路は兩街道共に概ね峻峻にして、車馬を通ぜざる所甚だ多し。之れを要するに本縣の交通線は、和歌山附近の鐵道線路四近を除く外、他は概ね車馬を通ぜず。殊に田邊串本間の如きは、道路最も峻惡にして、行人の甚だ艱む所なり。唯、海岸地方は、大阪商船會社の汽船期を定めて大阪及び愛和縣熱田との間を往復するに際し、沿岸諸港に寄港するあり。波甚だ穩ならずと雖ども旅人の往復、物貨の輸送概ね之れに由る。熊野川沿岸附近の交通は多く此の熊野川の水流を利用す。

和歌山市

吾人若し南海鐵道の便を利し、大阪市灘波より堺市岸和田町を経て、深日驛より飯盛山を東方に望み、孝子の隧道を通過し、紀ノ川を横ぎらんか、直に野崎村大字福島にある和歌山北口停車場に達すべし。和歌山市は往古吹出の里の稱ありし地にして、徳川頼宣の此の地に封ぜられしより、市街益々繁盛に趣き、現今其の繁盛なること實に縣内第一に位す。紀伊河口海岸を距ること二十餘町の所にありて、戸數一萬三千二百九十餘人



和歌山市

一之分万五度尺

口六萬八千に近く、廣袤東西凡そ二十町、南北凡そ二十八町、市内には紀ノ川を引き溝渠を通じ、水運の利ありて、橋梁亦多し。其の城北にあるものは京橋と呼び、市の中央に位し、縣内里程元標此處にあり。全市街を大別して、番町廣瀬新町内町宇治湊吹上の七區となし、就中内町は最も繁榮の巷、商業上樞要の場所なりとす。本町四丁町ブラクリ町元寺町新通り等は又た繁榮なる街路にして、大厦巨舗相連なり、人車の往來常に絶えず。内町組の萬町及び西田中町は蔬菜市場にして、南大工町は

生業

魚市場なり。毎朝魚類蔬菜の競賣を開始し、甚だ雜圃を極む。和歌山出島の魚市場は百五十年以來の舊魚市場にして、現今合資會社組織にて盛大なる取引を爲せり。本市民の生業は概ね商工業にして、殊に本市の生産に係かるヲランネルは紀川ネルと稱し、其の製造工場の如きは各所に散在し、一々枚舉するに遑あらず。湊紺屋町二丁目に在る和歌山紡績會社、之れに對向する和歌山織布會社、市の東端向芝ユカシマにある南海絹絲紡績會社の如きは、重要な者の二三に過ぎず。其の本市並に附近より産するもの一ヶ年平均百萬反、價格四百萬圓以上に及ぶと云ふ、以て其の盛況の一斑を知るに足るべし。其他數多の工場よりは、綿ネル、雲齋紋羽織寸袖木を製産し、奈良漬砂糖漬醬油等と共に市の重要な物産をなす。

竹垣城

縣廳及び市役所は西汀町ミヤにありて、地方裁判所區裁判所縣立病院警察署第一中學校高等女學校、四十三銀行紀伊銀行等は孰れも番町にあり。和歌山城は市の殆んど中央虎臥山上にありて、竹垣城と稱す。城濠其の東北を繞り、三層の天主閣雲霄を凌ぎて、巍然翠松の間に聳ゆる所、即ち本丸にして、市内

天妃山

第一の壯觀を呈す。本城は天正年間羽柴秀長の部將桑山重晴の築造にかゝり、其の後徳川頼宣更に之れを經營修繕したるものにして、廢藩後陸軍省の直轄に屬し、外圍は總て取り拂ひ、亦昔日の觀なし。城内に天妃山なる丘地あり、高さ數十丈、山嶺巖巖重疊し、巖上に臺灣佐賀西南の諸役に戰没せる者の忠魂を祭れる紀念碑、並に征清紀念碑を建つ。山上は四望開濶、眺望絶佳にして、去る明治二十九年以來公園となし、一體の地に櫻樹を栽ゑ附けしかば、春風駘蕩櫻花笑ふの時は一段の佳觀を添ふ。西麓片岡町に有名の古刹松生院あり、向陽山蘆邊寺と號す。眞言宗にして、不動明王を本尊とす。松生院の南に縣社刺田比古神社あり、大國主の神を祭祀す。一に岡ノ宮と稱し、古松蒼鬱として翠色甚だ深し。内町の西部にある西本願寺の懸所は、信徒之れを呼んで鷲ノ森御坊と稱す。堂宇高大壯麗を極む。吹上は城南高地の總稱にして、昔時城西の地海濱にありたるとき、白砂海風に吹き上げらるゝにより此の名を得たり。吹上島崎町に禪林寺あり、隣りて感應寺あり、身延派の法華宗にして、僧日陽徳川頼宣の命を蒙りて創立せり。本堂の後方丘上の地には

松生院

吹上

禪林寺

雄水門

水門吹上神社

鳴瀧

加太港

德川家の廟墓あり。市の西方紀ノ川左岸は雄水門(勇水門)と稱し、往古神武天皇東征し給ふとき、皇兄五瀬ノ命流矢に脛脛を射られ、皇師利あらずして、遂に船を此の地に寄せられ給ひしに、瘡痛甚だしかりければ、命劔を撫し、慨哉大丈夫被傷於虜手將不報而死耶と宣ひて、雄詰し給ひ、遂に薨せられし史上有名の港なり。現時は小野町と稱する一小市街に過ぎず。小野町の水門吹上神社は一門の中に水門吹上の兩社並び建ち、水門は御見蛭子、吹上は大己貴命を祭神とし、福神と稱して來り賽する者多く、單に小野町の蛭子と唱へ、本社の名を呼ぶもの却て少なきに至り。本市の北一里有功村大字齒部に鳴瀧の勝あり、奇石怪岩の間に飛泉懸かり、側に不動尊祠辨財天祠等あり、秋天紅葉を以て著はる。

本市より西北海岸に沿ふ道路、即ち淡路街道に據り、野崎松江磯脇を過ぎて進めば、加太港に達すべし。其の松江村の海岸は二里ケ濱と稱し、白砂長汀續くこと二里餘、翠松其の上に生じ、風光明媚なるを以て名あり。加太港は和歌山市を距ること三里、紀伊水道東北隅の一良港にして、人口

加太神社

友ヶ島

四千九百三十、商家旅店軒を併べ、頗る繁盛の地なり。本港より日々白良海峽を経て、淡路に渡る便船あり。大阪行の汽船亦た此の地に寄港す。現時附近の地に砲臺建設せられ、要塞砲兵の駐屯するもの少なからず。此の地海岸の風景に富み、避暑海水浴に來たるもの少なからず。物産には裙帶菜及び鱒あり。加太町の西南に加太神社あり。祭神四座少彦名命月讀命大己貴命氣足姫命を祀る。

友ヶ島は又た苦ヶ島と云ふ。地島沖島神島の三島より或る。傳云ふ昔日神功皇后三韓より凱旋せられ、御坐船難波に向ふの時、風波烈しく遂に海路を失ひ、進むことを得ざりしかば、皇后親ら艦頭に立たせ給ひ、天神地祇を仰て、此の船のたよられ方を導かせ玉へやとて、苦を海上に投じ、其の流るゝ方に船を進められしに、遂に一島に寄するを得たり。之れ神島にして、苦ヶ島の名の起因なりとす。地島沖島は各周圍約二里にして、神島最も小なり。三島皆和泉砂岩より成り、青松蒼蔚として其の上に繁茂し、仙境の觀あり。其の奇絶の勝景に至ては、特に沖島にあり。沖島には砲臺ありて、紀淡海峽

岩出村

根來寺

の咽喉を扼す。沖島と地島との海峡を中ノ瀬戸と稱す。地島と深山の西端城ヶ崎との間を地ノ瀬戸又たは加太海峡と稱し、大阪に到る小船の航路にして、船舶の往來常に絶えず。
和歌山市より南海鐵道にて東約四里、田井ノ瀬布施屋岩出の各驛を通過すれば、岩出村に達すべし。

岩出村は紀ノ川の北岸にありて、大和街道の一驛なり。大字清水には那賀郡役所稅務署あり。人口稠密にして稍賑ふ。北方三十町の根來村大字西坂本には、世に根來寺と稱する眞言宗新義派の總本山あり。往古は堂塔伽藍許多ありて、高野山と相並びて、法風盛なりしが、天正の兵燹にかゝり、堂塔の多くは焼失せしも、爾後再建の工を起して、今尙ほ見るべきものあり。寺域六萬二千二百二十餘坪ありて、古松老柏全山を蔽ひ、櫻樹數千株枝を交じへ、二朝花期至れば、堂宇は紅雲錦霞の中に埋もれ、其の風光、最も掬すべきものあり。又根來山間より湧出する清水は、潺々として、境内を貫流す、世に根來彫根來塗と稱するものは此の地の産なり。岩出を發して、更に十五分時

粉河町

粉河寺

富士崎

龍門山

にして、粉河町に到るべし。

粉河町は戸數千五百餘、人口五千六百餘にして、商工業繁盛なる一小市街をなし、那賀郡第一の都會なり。中學校の設あり。酢菘蒟は此の地の名産なり。有名なる粉河寺は町の北端にあり。(第六十一圖)風猛山施恩寺と號す。天台宗にして、光仁天皇の御宇大伴孔子古の創立せし所なり。天正年間堂塔多くは秀吉の一炬に燬滅せしが、慶長の後再興し、今や昔日の觀を呈せずと雖も、堂宇莊嚴にして、南海の一靈場たるを失はず。粉河の東南凡そ十五六町、紀ノ川の北岸に富士崎あり。品質剝岩の奇巖重疊河中に突出し、巖頭の松樹枝を連ぬる所、辨財天社あり。東南の孤島の側に富士山に似たる岩石、河中に突起す。富士崎の名之れに起ると傳ふ。河水清く、島を挟んで流れ、白帆點々風を孕んで河を上下するの狀、畫も亦如かざるの趣あり。對岸龍門村の蛇紋岩より成る龍門山は、高さ七百五十六米に達し、俗に紀州富士とも稱し、延文四年、南朝の驍將鹽谷伊勢守戰没したる所にして、絶頂まで三十町あり。頂上に無塵ノ池と名くる小池あり。麻布津峠は其の東一里餘の所に連り、高

舟岡山

野街道の衝に當る。

粉河町より東一里半にして、名手驛に達すべし。名手より東約二十町伊都郡内に進めば、紀ノ川は茲にて妹脊川と稱せらる。川中に舟岡山と名くる小島ありて、一層の風景を添へ、郡中の勝地と稱せらる。之れより東二里を距て、妙寺驛あり。

妙寺驛

妙寺驛は紀ノ川北岸に沿ふ一小市街にして、大和街道の一驛なり。和歌山方面より高野山に登るものは、此の次驛高野口(名倉)よりするもの多し。名倉より高野山舊女人堂迄三里十六町と稱す。紀ノ川南岸の九度山は、高野街道に當る一小村にして、西南は紀ノ川に注ぐ丹生川を以て繞らさる。此の地にある善名稱院には真田昌幸の墓ありて、幸村隠棲の古跡なり。境内牡丹を以て著はる。九度山村の西八町にして、慈尊院あり。其れより南一里にして、天野村に到るべし。縣社丹生都比賣神社は高野街道往還の傍にあり。神殿凡て五彩を施し、別に應神天皇を祀れる一殿あり。樓門を出づること數町にして、神池あり、輪橋を架し、池畔に喬松あり。境内又老櫻多し。之れより南

善名稱院

丹生都比賣神社

高野山

花坂を経て、東方に進むこと二里にして、高野山に達すべし。高野山は高さ七百十八米、有名なる眞言宗の本山なる金剛峯寺の茲に存在するを以て、往古より海内の善男善女茲に賽して、善縁を後世に期せんことを願ふ者甚だ多く、山上別に一天地をなす。(第九十三圖甲)

金剛峯寺

金剛峯寺は弘仁七年僧空海入唐歸朝の後、遍く天下を周遊して、此の地を相し、嵯峨天皇の敕允を蒙り、國司の力を藉りて、高野山の曠原を變り夷げ、七堂伽藍を創立し、眞言の一宗を天下に弘めたる所にして、爾後堂塔僧坊の數増加して、會ては坊舎の數一千に達したることもありと云ふ。寺域二里半四方に亘り、現今尙ほ坊舎の數百三十餘に及ぶ。爾來衆庶は固より雲上の貴紳も攝祿運歩の勞を厭ひ給はず、登山し給ひしこと幾度なるを知らず。之れに登らんには四方に七道を開けりと雖も、其の街道とも稱すべきは上方道と町石道なり。町石道は和歌山口とも稱へ、麻生津峠を越え、花坂に到り、羊腸たる花坂五十町を登りて、大門に達する道を云ひ、從來高野山參詣の本道たりし所なり。上方道は橋本町より紀ノ川を渡り、學文路(河根)を経て神谷に

町石道

上方道



高野山總圖 (一其)

至り、名倉高野口よりの登山路と合し、羊腸たる不動坂の險坂を登り、舊女人堂に入るなり。花坂不動坂共に古榆老杉鬱蒼として繁茂し、境自ら幽邃なり。熊野口は熊野地方より十津川に沿ふて上り、中津川立里等の村落を経て、千百零七米に達せる陳ヶ家の峠を過ぎ、奥ノ院峠を超え、奥ノ院を経て達するものにして、道路峻峻行程宜しからず。町石道なる花坂の坂上にある



和歌山縣 (其 二) 伊紀名所繪所 (其 二)

大門は、其の高さ二十二間、表行十五間、奥行九間、銅瓦を以て之れを葺み、二重の樓門をなし、巍然として高大なる實に人目を驚かす。之れより幾多の僧坊左右に連なり、行くこと十五町にして金堂あり。(第六十圖甲) 椶材を以て成れる二層の樓殿にして、開祖の作なる丈六尺の金色坐像の藥師如来を本尊とし、金扉の内に安置す。其の莊嚴なるまた言語に絶せり。金堂の傍に

奥ノ院

墓碑

高さ十六丈の大塔ありしが、天保十四年大火に罹り、現今の者は假建築にして、巨鐘を懸く。附近の灌頂堂御影堂准胝堂孔雀堂東塔西塔等は同時に延焼の難を受け、後東塔を除くの外再建せられたり。是れより東二町にして、當山の主坊金剛峯寺に遡すべし。金剛峯寺は前は中尾崎に臨み、後は五ノ室谷に至る。主殿は東西三十間、南北三十五間あり。本尊は弘法大師にして、歴朝の尊儀を安置す。殿内には梅ノ間柳ノ間書院奥書院等ありて、柳ノ間は豊臣秀次の自裁せるところにして、今尙存す。凡て殿堂宏麗を極む。大學林は其の西に隣る、古義眞言宗唯一の大學林にして、中學林小學林皆此の内にありて、構造高大なり。一ノ橋は一名大渡橋と稱し、奥ノ院に入る第一橋なり。之れより御廟に至る十八町の間は、貴賤道俗の墓碑立錐の餘地なきまで並立し、殊に舊諸侯の墓碑は高大を極む。試みに其一二を擧げんか、平敦盛熊谷蓮生法師會我兄弟武田信玄織田信長明智光秀豊太閤與沖等一々枚舉に遑あらず。此等の墓碑は皆當山に産せざる花崗岩類を以て製せられ當時運搬の勞眞に想ふべきなり。奥ノ院は御廟の在る所にして、承和二年三月大師入定の地

灌漑

六木

とす。四面寶形造にして、瑞籬を周らし、固むに蒼蔚たる杉檜を以てし、繞らすに清涼たる玉水を以てす。幽邃閑寂眞乎の靈地たり。其の前面に燈籠堂あり。堂内常燈夜燈日夜煌々たり。

蓋し本山は海拔七百十八米、附近幾多の峯巒累積して、冬期は積雪絶えずと雖も、晩春に至り桃櫻綻ぶれば滿溪花を以て埋まり、其の好景言ふべからず。溪流の此地に起るもの、東流するものは、玉川と合して、大瀧の瀑布となり、落ちて有田川の上流をなし、摩尼山より滴るものは東北に迂回して丹生川となり、香ノ瀧の瀑布兒が瀧の飛泉相合して細川となり、九度村に出て紀ノ川に注ぐ。此等の諸川水常に多く山麓の田野を灌漑するは、一に蒼蔚たる當山の森林あるに因るなり。往古より培養し來りし、六木と稱する檜杉樅梅松楨は五千町歩の間巨幹老樹枝を交へ、根を接し、尺寸の空地を除さず。其の幽邃の狀實に筆舌の形容する能はざるところなり。

今や高野山に於ける概略を述べたれば、吾人は歩を北學文路に向け、紀ノ川を渡り、大和街道の一驛橋本町に至るべし。

橋本町

隅田八幡神社

橋本町は伊都郡中第一の都邑にして、紀ノ川北岸にあり。戸數千三十人口五千四百四十餘、市街廣く、商賈軒を連ね、郡役所の所在地にして、關西鐵道の一驛なり。東方より高野山に登るには、橋本驛にて下車するを宜しとす。橋本驛より學文路河根神谷等を経て女人堂に至るまで四里十九町と稱す。本町の東一里餘を距つる隅田村には隅田八幡神社あり、神功皇后應神天皇仲哀天皇を合せ祀る。之れより鐵道は五條高田を経て、奈良大阪に通ず。

秋月

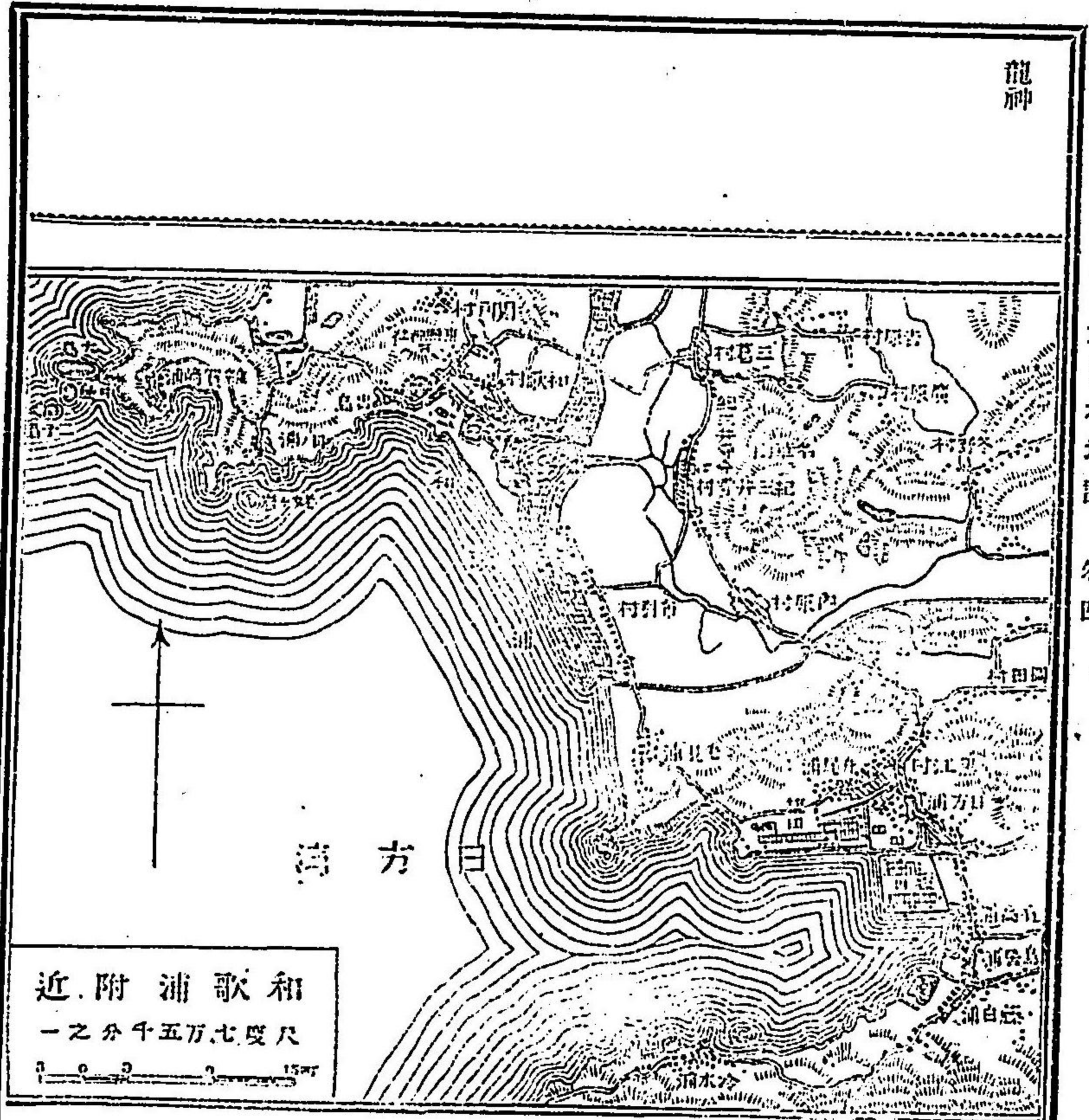
日前國懸神社

再び和歌山市に歸り、市の東南方より龍神街道を進めば、三十餘町にして宮村大字秋月に達すべし。秋月は海草郡の郡役所所在地にして、人口二千五百二十餘、稍繁盛の驛なり。本邑の日前國懸兩神宮は官幣大社にして、二宮並びて鎮坐す。本社は元毛見村濱ノ宮にありしを、垂仁天皇の御宇此に遷し祀れるなり。日前ノ宮は神鏡を靈體となし、石凝姪命思兼命を相殿とし、國懸ノ宮は天日矛を靈體となし、劍女命玉屋命を相殿とす。此の二種の神寶は天照大神の瓊々杵命に賜ひたる、三種の神寶に添へさせられたるものにして、いとも畏き神宮なり。宏壯なる社殿は天正の兵亂に秀吉の壞る所となり、時

伊太祈會神社

の宮司紀忠雄兩宮の御靈體を奉じて、難を高野山の麓に避けたりしが、後歸りて小祠を營めり。徳川頼宣國主となるや、兩宮を再造し、神領を寄附し、稍其の面目を一新せり。國懸宮は境内の東にありて、日前宮は西にあり、境内廣潤樹木繁茂し、竹藪蔚蒼たり。前苑の芝生には櫻樹多く、社殿は善美を極め、賽人常に絶ゆることなし。秋月の南方凡そ一里なる三田村大字和田には籠山神社あり。官幣中社にして、五瀬彦命を祀る。命長髓彦と戦ひ流矢に中り、雄水門より此處に至りて薨じ給ふ、依て御遺骸を此の地に葬る。社殿の東方に二重玉垣を施されたる所、乃ち其の御陵墓なり。

宮村を出て、尚ほ街道を東南に進めば約二里にして西山東村大字伊太祈會に至るべし。伊太祈會には國幣中社伊太祈會神社ありて、五十猛命大屋津姫命抓津命の三神を祭祀す。三神共に素盞烏尊の御子にして、樹木蔚蒼境内幽雅なり。之れより龍神街道を進めば、漸く邊避の地に入り、下神野村大字神野市場よりは道路漸次峻峻となり、九百十九米に達する生石の峰の東方峻坂を越え、有田川を渡り、復た山間溪谷を辿りて、千三百零七米に達する城ヶ



森を越え、龍神村に到る。此間
 總て車馬を通ぜず。本村は實に
 和歌山市を距る東南十八里三十
 町なり。位置日高川の上流山間
 の僻地にあれども、大字龍神に
 は炭酸泉なる龍神温泉ありて、
 功驗著るしきが故、浴客常に絶
 えず。旅舍の大なるもの數軒あ
 り。
 再び和歌山市に歸り、更に熊
 野街道を進行すれば、市の南端
 北出島より行くこと南方約一里
 餘にして、名草山の西麓雜賀川
 の河口に到るべし。雜賀川は一

和歌浦

名和歌川又は藻屑川とも云ひ、紀ノ川の分岐せる下流にして、河口の和歌浦は又た明光浦と稱し、前に海灣を擁し、長汀曲浦を咫尺に收め、風光最も明媚にして遊客四季絶えず。(第十六圖乙) 河口の西岸和歌浦町は戸數八百餘、人口五千七百六十餘にして、繁盛なる市街なり。前面の浦は東西二十餘町、江水洋々として波靜かに、東名草山金剛峯寺を翠微の間に眺め、南方蒼海漫々の間に鹽津浦を望み、船舶の出入多く、碧水に白帆の點々たる海濱の綠松と相映じて、一層の妙趣を添ふ。和歌浦にある一石橋不老橋を渡りて、南に行けば片男波に到るべし。片男波は和歌浦南の海濱を稱し、一帶に綠色紫色等を帯べる品質剝岩類輝岩等の砂礫散布す。和歌浦東部の入江は干瀉多く、蘆葦繁茂せり。海苔及び牡蠣は此の地の名産にして、有名なる蘆邊茶屋茲にあり。蘆邊浦腕山の南麓に玉津島神社あり。江中一小島あり、妹脊山又は郭公山とも稱し、石橋を以て通ず。之れを三斷橋と名づく。山上には多寶塔高く聳え、石階を下れば拜殿あり、觀海樓と號す。南方和歌浦を望み、江水を隔て、名草山に對し、山水の勝に富む。(第九十三圖乙)

片男波

玉津島神社

東照宮

南龍社

出島浦

金剛峯寺

東照宮は、和歌浦西方なる山上にあり。元和六年徳川頼宣の創建せし處にして、徳川家康を祀る。結構壯麗にして、麓の大鳥居より山上の社前に至るまで、石築左右に立併び、丹塗の神橋林檎の蒼翠に映じて、一段の幽邃神威の尊嚴を添ふ。其祭典の壯觀なること近縣に見ざる所なり。東照宮の西麓に南龍社あり、縣社にして紀藩の鼻祖徳川頼宣を祀る。公は家康の子にして、英邁聰明の人なり。當國に封ぜらるゝや、大に士氣を奮興し、風俗を改良し、教育を播布し、産業を奨励して、遠く今日縣下繁榮の基をなせり。東照宮の西の山腹に天神山ありて、上に天満宮の社殿あり。

出島浦は和歌浦町の西端にありて、漁戸多く魚市場あり。日々開市して、近隣の地方に輸出すること夥しく、又た盛に蒲鉾を製す。田ノ浦雜賀崎浦は共に出島浦より西に連り、海中に突出す。村民多くは漁獵を業とす。大島中島二子島等の大小の島嶼點々其附近に散在せり。

本街道南數町にして、紀三井寺護國院金剛峯寺に至るべし。寺は名草山の中腹にありて、眞言宗西國第二の札所なり。本堂の上にあるは開山堂にして、

琴ノ浦

黒江町

日方町

其の南に三重塔鎮守祠あり。その他鐘樓大師堂如意輪堂等皆宏大なる建築なり。當寺は眺望に富み、和歌山吹上和歌浦雜賀崎の全景を一望に收め、遠く淡路島若島を望み、南海の絶勝をなす。名草山西麓の海岸一帯は古來名勝の地として、多く和歌に詠まれたる名草の濱なり。名草の濱の南方毛見崎モミザキより舟尾に至るの濱邊は琴ノ浦と稱し、此の濱を歩むに松嶺濤聲相和して、琴瑟の調をなし、因て此の名ありと云ふ。舟尾より熊野街道に出づれば直に黒江日方の二邑に達す。

黒江町は和歌山市の南方三里の所にあり。南方は日方町に連る、戸數千三百餘、人口七千八百二十餘を有し、人口稠密商工業甚だ盛なり。大阪商船會社大阪田邊線は加太和歌山市に寄港して、毎日一回の發着あり。此の地は古來より黒江塗と稱し、主として日用の漆器を産し、其産額の多き本邦第一に居れり。明治三十一年町立黒江漆器學校を設け、其業を奨励し、今や此地の製品は海外に輸出せらるゝに至れり。日方町は戸數七百二十、人口五千にして、黒江町と相並びて商業盛なり、傘は此の地の名産として世に知らる。

加茂谷

日方町を出て藤白峠を越えて、有田川を渡り、湯淺町に至る道路は、頗る峻悪にして熊野の舊道なり。藤白山脈と長峯山脈との間を加茂谷と稱へ、多く梅樹を栽培し、就中小南仁義を最も多しとす。開花の季は其の美觀豈ふるに物なし。西方海岸の熊野新道を西南に進むこと、約二里半にして鹽津浦に達す。鹽津浦は商業稍盛なる處にして、港内水深く碇泊に便なり。大阪和歌山市等を経て、大阪商船會社の汽船往來す。之れより梅林を以て名ある小南を通過して、濱中村に至れば、舊和歌山藩主累代の菩提所なる長保寺あり。

鹽津浦

天台宗にして、長保二年一條天皇の敕願により、慈覺大師の門徒の開基したる古刹にして、堂宇の彫鏤質朴なり。西南一里半なる椒の濱には、沖十八町の所に浦の初島あり。東にあるを地島と云ひ、周囲三十一町ありて、南北に長く、古松鬱蒼たり。西にあるを仲の島と云ひ、周囲二十一町、島中樹木なく、篠茅等繁茂す。島の東北對岸なる大崎村は船舶繫泊の一小良港にして、漁業を事とするもの多し、人口三千五百餘あり。

長保寺

箕島町は椒ノ濱より熊野街道に沿ふて、行くこと南方約三十町、有田川の

浦の初島

の所に浦の初島あり。東にあるを地島と云ひ、周囲三十一町ありて、南北に長く、古松鬱蒼たり。西にあるを仲の島と云ひ、周囲二十一町、島中樹木なく、篠茅等繁茂す。島の東北對岸なる大崎村は船舶繫泊の一小良港にして、漁業を事とするもの多し、人口三千五百餘あり。

箕島町

有田川の兩岸は、蜜柑の産を以て名あり。世の紀州蜜柑と稱して其の聲價を博したるもの、大部分は此の附近の産出なり。土人の傳説に山れば、天正年間嘗て徳川頼宣此の地を巡行し、村民の貧しきを見て大に嘆じ、肥後八代より蜜柑の種子を得て、之れを植ゑしめ、遂に左右兩岸數里に亘る今日の橘園となるに至れるなりと。其質の良好にして、甘美なること他國に比類なし。其の熟する時は滿山綠葉の間黄顆累累として、其の美觀云ふべからず。所謂『其の花時には東風海上を渡りて阿淡の境に香を送り、果熟の候には豈彩赫々として朝暾も影を讓れり』と云ふも必ずしも誇大の言に非るなり。戸々之れを載す。

北淡

河口北岸にあり。西方北淡に續き、戸數千六百人口九千四百を有す。有田郡内第二の都會にして、有田川の兩岸に産する蜜柑の集散中心點をなし、商業盛なり。其の蠟燭は此の地の名産とも稱すべし。西方の北淡は有田川の海口を擁し一小港をなす。此の地は郡内の物産を輸出する要點にして、殊に有田川兩岸に産する蜜柑の如きは年々多額の輸出ありて、皆此の港より船舶に搭載す。

蜜柑

有田川の兩岸は、蜜柑の産を以て名あり。世の紀州蜜柑と稱して其の聲價を博したるもの、大部分は此の附近の産出なり。土人の傳説に山れば、天正年間嘗て徳川頼宣此の地を巡行し、村民の貧しきを見て大に嘆じ、肥後八代より蜜柑の種子を得て、之れを植ゑしめ、遂に左右兩岸數里に亘る今日の橘園となるに至れるなりと。其質の良好にして、甘美なること他國に比類なし。其の熟する時は滿山綠葉の間黄顆累累として、其の美觀云ふべからず。所謂『其の花時には東風海上を渡りて阿淡の境に香を送り、果熟の候には豈彩赫々として朝暾も影を讓れり』と云ふも必ずしも誇大の言に非るなり。戸々之れを載す。

有田川

摘みて函に入れ、北湊より諸國に輸送す。實に本郡の富源と稱すべし。

有田川は古名阿部川と云ふ。伊都郡高野山四近に水源を發し、高野山より熊野地方に至る街道中の一村落大瀧の山中にて一大瀑布となり、有田郡東北隅に入りて、湯川川修理川等を合し、曲折迂回して、松原村に至れば、兩岸迫り、河中の巨巖に遮ぎられて、轟然瀑布となりて落下し、水勢漸く緩となりて、漫々たる大流をなす。舟楫を通ずるは、松原より以西河口まで僅に五里の間なり。河口南岸に連る岬を宮崎と稱し、廣灣の北端なり。

次の瀧は金田の東北なる五^ノ月村大字延坂の山中に在り。又九延坂の瀧とも云ふ。高さ三十餘丈、幅四間あり。巖巖の頂嶺より直下し、早月谷川に注ぎて有田川に入る、奇石怪巖左右に駢列し、眺望最も佳にして、其の壯觀那智ノ瀧に次ぐ、故に此の名ありと云ふ。延坂の東北生石ヶ嶺の山腹には黒藏ヶ瀧あり。高さ十丈幅二間。日高郡の國境白馬山の半腹には純白ノ瀧あり、高さ十八丈、幅二間落下して修理川に注ぐ。其他田殿越の山中には姥が瀧、釜中の山田には不動ノ瀧等瀑布甚だ多し。

次ノ瀧

湯淺町

湯淺町は有田郡第一の名邑にして、戸數二千七百人口九千八百あり。和歌山市より南方十一里半を距て、廣灣の灣頭にあり。南は廣村に連り、人家櫛比し、市坊繁華なり。郡役所稅務署此の地にあり、古來熊野街道の一驛にして、海陸運輸の便あれば旅客の來往頻繁なり。市内に醬油の醸造家多く、其の醬油は有田郡の物産として著名なり。又蠟燭の産あり。湯淺城は町の東別所の丘上にありて、湯淺權守宗重の築城なりと傳ふるも、現今城址として見るべきものなし。廣村は湯淺町の南方に連続せる村落にして、人口二千七百を有する郡中の一大村なり、廣灣内には毛無島、藻島、鷹島、黒島東北より西南に列なり、孰れも人の住居するものなく、湯淺町の西北の海岸は白堊紀化石の産地として其の名高く、地質學者の之を訪ふもの少からず。

湯淺町の西北約一里半を距つる保田村大字千田には須佐神社あり。縣社にして、素盞鳴尊を祀る。和銅六年の創建にして、祭日には參詣人群集し雜鬧を極め、其競馬は世に名高し。千田の東北數町糸賀村の中番に雲雀山得生寺と號する淨土宗の寺ありて、堂内に中將姫の像を安置し、姫の舊跡として名

廣村

須佐神社

大乘寺

あり。

大乘寺は湯淺町を距る東北始んど二里なる御靈村大字徳田にあり。隨祇尼山と號し、鎮西派の淨土宗にして、阿彌陀如來を本尊とす。永祿十二年法山上人の開基せるところにして、境内廣からざるも、小富士の稱ある鳥屋が城山及び愛宕山の勝景を眺むべく、風景佳なり。南方約一里同村の大字吉見西ノ谷河町には西ノ谷温泉ありて、嘉永年間に發見せられたる單純泉なり。

由良港

熊野街道は湯淺町より三百二十三米の鹿ヶ瀬峠を越え、原谷萩原を経て御坊町に至る。今先づ海岸の模様を述べんに、白崎は遠く西方海中に突出し、其の東南の山良灣は深く灣入し、灣の南縁に由良港あり。山良村は人口三千五百を有し、水深くして巨船をも繫泊し得べき良港なり。灣口には蟻島煙島鹿角菜島等あり。小浦崎を回れば比井崎村に達す。此の村は又た海深き良港なり。日御崎は日高郡の最西端海中に突出せる岬角にして第二等回轉白色の燈臺なり。此の邊波浪動もすれば高く、往々にして船客の苦む所なり。湯淺町の西北十町許の處にある栖原は、巨商富佐多く有田郡屈指の名邑な

御坊町

り。御坊町は日高川の河口北岸にありて、戸數千餘人口五千七百、商戸櫛比し、其の繁盛なること郡中第一位なり。郡役所區裁判所稅務署等ありて、和歌山市を距ること約十七里、熊野街道の名邑なり。俗に日高の御坊と稱する本願寺の大伽藍は此の地にありて、湯川直光の創立に係かる。御坊町に煙草の産あり。本町を距る東北一里なる矢田村鐘巻の道成寺は天台宗にして、天香山と號し、大寶元年文武天皇紀道成に勅して建設せしめし古刹にして、本尊は前堂後堂とも千手觀音菩薩にして、前堂のものは弘法大師の作にして、後堂のものは開祖義淵僧正の作なり。共に其製作の優秀を以て知らる。本寺は彼の裨史に有名なる安珍清姬の古跡と稱する所にして、境内に安珍塚あり。此の附近藤井島の兩地は紙の産を以て郡中に名あり。

道成寺

日高川

日高川は源を日高郡の東隅龍神村の山中に發し、小又川丹生野川鷲野川三津ノ川の諸流を入れ、蜿々屈折して西流し海に注ぐ。上流は激湍頗る多く、其の最も甚だしきものは、恰も瀑布の觀ありて、日高川五瀧と稱して、椴皮瀧鳴瀧手早瀧大瀧黒鳥瀧等の名あり。大瀧は全く筏を下す能はず。傍の巖を

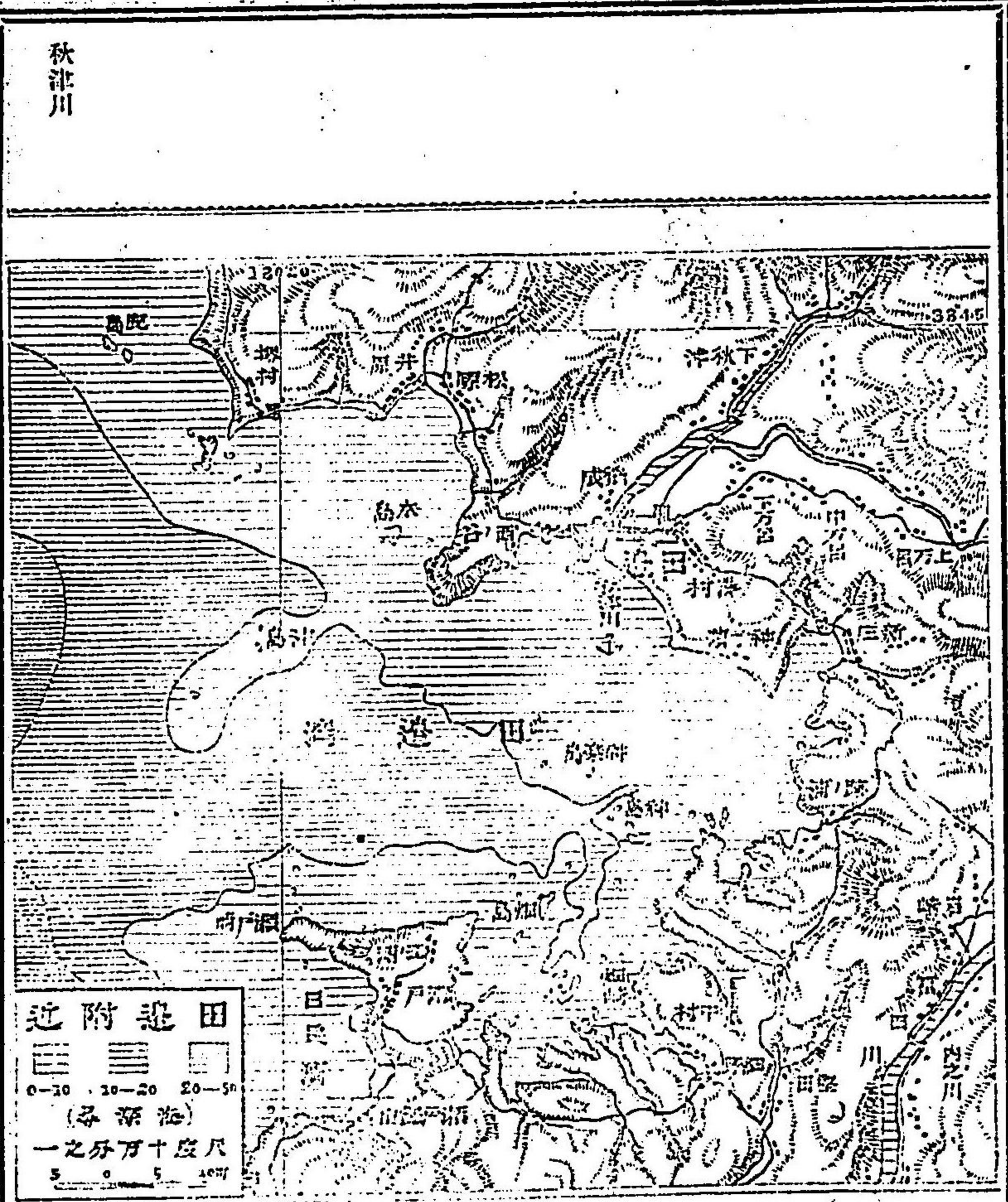
印南南部町

穿ちて漸く通じ、手早瀧は棹の操縦宜しきを得ば流下するを得べし。河流四十八里の間舟楫を通ずるは僅に下流七里に過ぎずと雖も、灌溉の利は割合に大なり。上流の諸村よりは桧笠を産す。日高川の沿岸川中村大字田尻の山中には鶯川ノ瀧ありて、高さ二十丈本郡最大の瀧なり。田尻より日高川に沿ふて下ること二里の船着村大字高津尾川には炭酸泉冷泉あれども、多くは村民の採酌して浴用に供するのみ。

田邊町

更に御坊町に歸り、海岸に沿ひ、熊野街道を東南行すること三里にして印南浦あり。又た其の東南三里の地に南部町あり。南部町は南部川の河口南岸にありて、戸數九百九十人口五千四百なり、印南町と共に街道の驛路に當る一小港にして、商估軒を並べ、稍繁盛なり。此の附近海岸一帯の地は海草魚類の收獲大なりと云ふ。南部町より堺村松原を過ぐれば、直に西牟婁郡内に入り田邊町に到るべし。

田邊町は和歌山市を距る二十七里餘、日高郡界を距る一里餘にして、戸數千五百人口八千四百、田邊灣に臨み、秋津川の下流に跨る縣内有數の大都會



田邊町附近
0-10 10-20 20-30
(各深海)
一之万十度尺

なり。其の廣さ東西六町、南北四町餘ありて、市坊十三に分かれ、戸口稠密商工繁盛の地なり。此の地は舊田邊藩の城下にして、瀬戸岬其の南に斗出して一小灣を畫き、船舶の碇泊に適する港なり。郡役所、區裁判所、支部、稅務署、中學校等市内にありて、晒葛粉、鹽辛等は此の地の名産なり。

秋津川は郡の北部な

田邊城

關雞神社

秋津村の山中に發源し、南流して三栖川に會し、田邊灣に注ぐ。田邊城は錦水城と號し、其の海口にありしが、廢藩の後毀ちて、現今纔に墨石を存するのみ。慶長年間淺野氏の築く所にして、徳川頼宣の當國に移れるとき、藩祖安藤直次に此の城を賜ひ、世々相繼ぎて居城せり。

關雞神社は田邊の南、湊村字神田にあり。縣社にして、熊野十二社權現を祀る。始め允恭天皇の己未八年此の地に勸請し、田邊ノ宮と稱へたりしを、後熊野の別當泰救の曾孫なる湛快の時、當社を熊野神社に擬して、更に同神社より勸請し、新熊野と稱したり。治承四年源頼朝の兵を伊豆に擧ぐるや、湛快の子湛増源平二氏の内何れにか去就を定めんと、七日間祈請を凝らし、社前にて赤白の雞各七羽を闘はし、白雞の勝に歸したるを見て源氏に參したり。是れより當社を關雞神社と稱するに至れりと稱す。

湯崎温泉

田邊町の南方海灣を隔て、一村あり。瀬戸鋸山と云ふ。(第十五圖)其の西部は則ち瀬戸岬にして、岬南に湯崎温泉あり。第三紀砂岩の間より湧出し炭酸泉にして、崎ノ湯濱ノ湯元ノ湯屋形ノ湯礦湯疝氣ノ湯粟湯目洗湯等の入湯に分

白良濱

かれ、自然の岩窟を以て浴場に充つる者あり。昔は齊明天智持統文武の諸帝行幸ありし處にて効驗著しく、且つ此の地海中に突出し、風景絶佳なるを以て、四方より來浴するもの多く、頗る繁盛し、旅亭亦少からず。田邊町より毎日渡船の便あり、一時間を出て達するを得べし。瀬戸より鋸山に至る一帶の海濱を白良濱と云ふ。第三紀砂岩の分解より來る石英砂皎然として恰も積雪の如く、玻璃製造の原料に供す。其の鋸山と稱するは往古鉛礦を採掘精煉したる所なればなり。今尙諸所に其の舊坑を存す、此の附近海岸は怒濤の浸蝕作用と風化作用とに歸因する奇岩洞穴島嶼等の風光の目を樂ましむる者に富み、逗留數週にして、尙ほ其の飽くを知らざるなり。

大邊地
中邊地

田邊町より東牟婁郡に通ずる熊野街道は、天然の地勢に據り別れて二となる。一は中邊地と稱し道を東北の山間に取り、上栖村栗栖川近露の諸驛を経て三越峠を越え、本宮に達するものにして、潮見十丈大坂の諸山其の間に延亘し、阪路頗る險峻なり。他は大邊地と稱し、田邊町より道を東南の海岸に取り富田坂を経て周參見村に出て、馬轉坂長柄坂を上下し、江住田並等の諸

驛を経て東牟婁郡の南端串本驛に達し、左折古座川を渡り古座町に達するものにして、道路重みに海岸に沿ふを以て中邊地に比すれば稍平坦なりと雖も、尙ほ其の間馬轉坂長柄坂等の坂路ありて、道路險悪なるを免れず。

今や更に田邊町よりする所謂大邊地に添ふて進行せんに、田邊の東南方二里餘にして、安堵が峯に發源する富田川岸に出づべし。川を渡れば道は川に平行して下流に向ひ、砥石の産を以て名ある富田村を過ぎて、富田坂を越ゆれば日置川に達すべし。

日置川は西牟婁郡最大の川にして、水源を大和の境に發し、南流して將軍川前川等の小流を合せ、西南に流れて日置浦に至り海に朝す。下流四五里の間稍水運の便ありと雖も、上流は奔流激湍にして、唯木材を流下せしむるに止まる。上流の熊野には高さ六十丈幅二間なる百間瀧あり。其の下流一里にして雨乞瀧あり。高さ九丈幅一間半共に深潭多く奇觀云ふべからず。河口の日置は、人口三千七百を有する一小良港にして市街稍賑ふ。日置川を経て南行すること二里半にして周參見村を過ぐれば、道路は海岸に沿ふて走る。

日置川

日置村

周參見村

二色港

串本町

大島

周參見村は大邊地街道の衝に當る大村にして、人口四千二百を有し良港あり。大阪商船會社の定期船此處に寄港するを以て海運の便を得、市街繁盛なり。西牟婁郡東南端の二色港は濠港とも稱し、海灣深く陸地に入り、形狀宛も壑の如し。海波常に靜穩にして、船舶の避難に便なり。二色港の南方には汐ノ岬あり、海中に突出すること殆んど二里、南海の一大岬にして、又た本縣の最南端なり。潮流急にして海波暴く、航海險惡の海路たれば、岬端に第一等不動白色の燈臺を置、海客に便にす。

串本町は汐岬の東北方にありて、大島と海峡を隔て、相對し、(第十四圖乙)大邊地の驛路に接近したる名邑にして、人口三千四百餘あり。附近各地の物産概ね此の地より出入するが故、商業盛に行はれ市街繁盛なり。

大島は縣内最大の島嶼にして、周圍四里餘、大島須江檜野浦の三浦に分割す。大島浦は串本と相對する良港にして、船舶の繫泊に便なり。(第六十五圖甲)檜野浦の岬角には第二等旋回白色燈臺の設けあり。(第六十五圖乙)此の地は明治二十三年九月十六日トルコ軍艦の沈没せし處にして、其の遭難者の遺骸を葬りし

橋杭岩



墓地あり。
 那智よりして串本に至るの旅客は、其の橋杭浦を過ぐるに當り、三十餘座の奇巖、瑤簞の如く玉笋の如く、浦口よりして遠く海口に羅列するを見るなるべし。齋藤拙堂は南遊志に於て記して曰く、「大島小長短同じからずと雖も、亦皆地を抜き特立し、西土の云はゆる砥柱と云ふ者に類す。土

人此の浦を名づけて橋杭となす。杭は即ち柱にして、名づくる所の意は乃ち同じ。外に三島の之れを擁するありて、布帆島巖の間を行く。布帆已に妙に、點綴又正なり、天然の好畫圖と謂ふべし」と。橋杭の風致は即ち先生の靈筆によりて已に説き盡くされて餘蘊なし。吾人又何をか贅せんや。(第十四圖甲)

抑も橋杭岩が此の如く奇觀を呈するは何故なるやと云ふに、是れ泥板岩の割目を通じて迸出せる石英粗面岩の岩脈が、後に波浪風雨の削剝作用を受け、割合に柔軟粗鬆にして抵抗力弱き四周の泥板岩は最初に削剝せられ、割合に堅硬にして抵抗力強き石英粗面岩脈は後に残りて、屹然とし聳ゆる岩壁を形成せしならん。斯の如く風雨の削剝作用と波浪の浸蝕作用とは、思ふが儘に抵抗力弱き泥板岩を削剝したるも、尙ほ其の破壊的作用は少しも衰ふることなく、更に岩壁を爲せる石英粗面岩に向つて専ら其の破壊力を逞ふするに至るも、其の組織泥板岩に比して割合に堅緻なる石英粗面岩は、容易に削剝し盡くされず、單に僅に其の弱點の存する所、割目のある所に沿うて削剝せられたるに止まり、斯くて一連の屏風狀を爲せし岩壁は、連絡を斷たれて、遂

古座町

古座川

に大小長短同じからざる三十餘座の石柱の所謂橋杭を形成するに至りしなり。されば此の地方の卓越風東風を受くる方面は東側海割合に深く、岩壁の風化崩壊より来る岩塊の海面上に露はるゝを見ざるも、其の反對の方面即ち西側には、岩壁の風化崩壊より来る岩塊の磊々として海上にあるを見、干潮の際は殆ど一の角礫原の有様を呈するに至るなり。

古座町は古座川の河口にあり、人口二千九百餘、水運の便を得商業盛なる大邊地の一驛なり。此の地附近一帯の海濱は捕鯨の業最も盛にして地方の富源を爲す。高池町は古座町の北方に連なり、人口二千九百餘亦繁盛なる市街なり。高池の附近に里俗蟲喰岩と稱する者あり。岩面凸凹參差遠く之れを望めば恰も蟲の爲に蝕せられたるが如し。是れ浦神灣沿岸のイワヤ(第三十三圖)と共に第三紀層の裂罅に沿ふて噴出せる凝灰質流紋岩が、風雨の削剝作用を受けたる結果に外ならざるなり。

古座川は佐本七川小川の三村に源を發し、合して古座に至り海に入る。下流數里の間舟楫の便あり。其の下流月野瀨には犀ノ温泉ありて、凝灰質流紋

浦神

勝浦

赤島温泉

那智瀨

岩の裂罅より湧出し、多少の浴客あり。古座町を距る東北方二里餘にして浦神驛に達す。附近沿岸玉浦と稱する所あり。里俗玉石と稱する者を出だす。磷酸を含める泥板岩中の結核に外ならざるなり。對岸の海濱より浦神灣内小島點綴せる風景を賞しつゝ、浦神を過ぎ、下里を経て太田川を渡り、海拔五十八米の二河坂ニカサカを超え、湯川温泉場を過ぐれば天満に至る。天満は那智川の沿岸に臨み、中邊地大邊地の合路に當る驛也なり。南方の勝浦は勝浦灣に濱する良港にして、和歌山市及び伊勢諸港尾張熱田等に汽船の定期航海あり。附近に赤島の鹽類泉ありて道路峻ならず、但し天満より此處に至る者多くは海路を取る。浴場旅舎の備あれば浴客亦少からず。

天満より中邊地を進みて一里許にして、市野野に至れば土地漸く高きを加へ、綠翠の間遙に白布の懸下せるが如きを認めん。是れ那智川の水源たる那智の第一瀑布なり。瀑布は那智山腹流紋岩の絶壁に懸り、直下すること八十餘丈と稱するも、編者の空盒晴雨計により實測する所に山れば百五十米突五十十餘丈に過ぎず。從來本邦第一の瀑布と稱せられたるも、水量多からず、瀑

夫須美神社

壺甚大ならず、加之山淺く、谷深からず、壯絶と云ふよりも、纖巧と云ふべく、雄大豪壯の風に乏しきは瀑布の爲に惜むべきなり。(第七圖)瀑布の下拜殿あり、飛瀧神社と云ひ、瀑布を神體とす。瀑水は巖石水苔の間を流下して、文覺ノ瀧に落ち平流となる。此所より樵徑を登ること四町にして、一溪流あり、劔ヶ淵と名づく、即ち第一瀑布の水源にして、遠く海洋を望み得て絶景なり。溪流を浜り尙進むこと四町にして第二の瀧に至るべし。三面山にして、老樹巨木森鬱として繁り、神境に入るの思あらしむ。瀧は高さ十丈八尺、巾三間上部に於て傾斜を存すが故に又如意輪の瀧とも稱す。之れより一山を越えて五町餘を進めば第三の瀧に至る、高さ七丈八尺、巾三間瀑布の状更に奇を加へ、益、幽邃なり。以上の三瀧は所謂那智山の四十八瀧中著名なるものにして、他に山中大小の瀧數多散在せりと雖も茲に之れを略す。

那智山宇宮地に縣社熊野夫須美神社あり。仁徳天皇の御宇敕を以て創建す、本社は熊野夫須美大神伊邪那美尊事解男神を祭り、神殿凡て十三殿あり。市野野の大華表を過ぎて、磴道を登り來れば樓門あり。勅額門と稱す。數町に

青岸寺

して廣門あり、西御門と稱す。門内は即ち神苑にして、大拜殿あり。諸神殿は其三方に並列し、宏麗壯大を極む。青岸寺は其傍に在り。天台宗にして那智山と號す。寺域廣く鐘樓寶藏御供所等あり。明治十年瀑布の下にありし千手觀音堂及び不動堂を毀ちて、本尊を本堂に移せり。其の千手觀音は立像の黄金物にして、嘗て花山天皇西國二十三所御順拜の時、玉體に懸けさせ給ひ、畢りて瀑下に納め給ひしものなり。

本宮村

熊野坐神社

中邊地に沿ふて那智の傍を過ぎ、大雲取山の峻路を越え、上長井の驛に至り、再び小雲取山を経て進めば本宮村に達す。天満より約十一里にして、其の間車を通せず。殊に大雲取は縣下第一の峻嶺にして、行客の頗る困しむ處なり。本宮村は中邊地諸驛中の大村にして、稍繁盛なりしが、明治二十二年八月大洪水のため全村流失し、今や昔日の觀なし。

熊野坐神社は本村にありて、國幣中社なり。崇神天皇の御宇の創建にして社殿高壯なりしが、前年の水難によりて、社殿の大半流亡し、僅に石寶殿の二殿を留め、礎蒼たりし樹木又た悉く枯死したり。後更に舊社の後方高燥の

湯ノ峯温泉

地に社殿を造營し、二十四年三月落成せり。第二殿より第四殿に至る四社あり。結構何れも清麗を極め、境内甚だ幽雅なり。第一殿は伊弉册尊、第二殿は速玉男之命、第三殿は素盞鳴命、第四殿は天照大神を祀る。是を上四社と稱し、舊石寶殿は中四社下四社と稱し、合せて十二社あり。而して舊社は新社と相距る僅に數町なり。本宮村の南方約一里なる四村大字湯ノ峯には著名なる湯ノ峯温泉あり。湯ノ峯川に沿ひ、數ヶ所に湧出し、光明湯玉ノ湯小栗ノ湯の三泉に分つ。効驗著しければ文武天皇以下數代の至尊行幸あらせ給ひたり。浴場五ヶ所旅舎數十所ありて浴客常に絶ゆることなく繁昌せり。中邊地は本宮村に至り、西行して田邊町に達し、本宮村より熊野川に沿ふ道路は北行して大和に入る。吾人は中邊地大邊地の合する天滿驛に戻り、更に熊野街道を進まんに、天滿の北方に接して、濱ノ宮あり。此の地は昔日神武天皇の丹敷戸畔を誅せられ、行宮を置かせ給ひたる所にして、今尙ほ村社濱宮大神の境内に若宮と稱し、頓宮の遺趾並に丹敷戸畔の祠あり。本社の傍に補陀洛寺あり、自華山と號し、天台宗なり。欽明天皇の御宇に創立したるものにし

濱の宮

三輪崎村

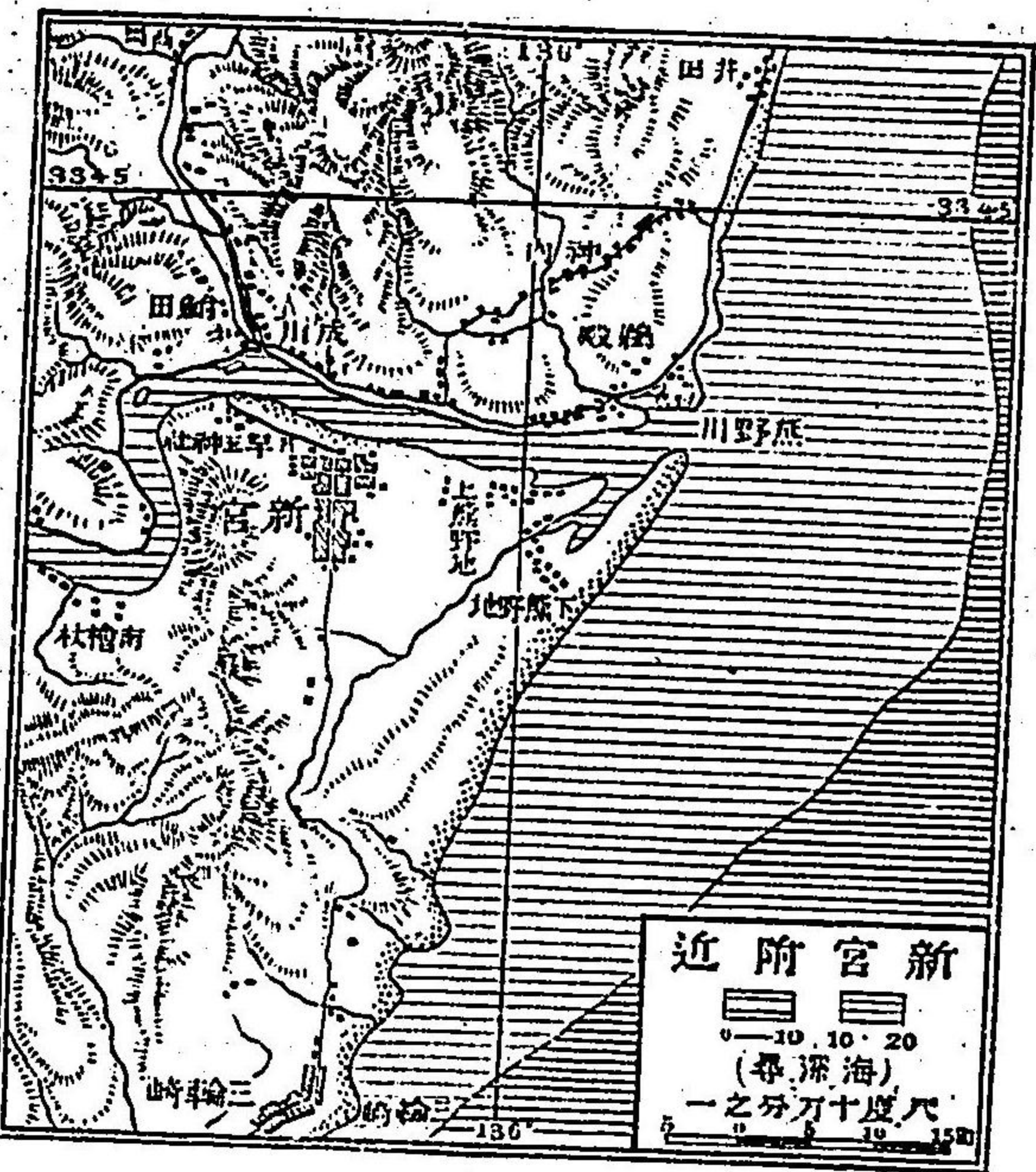
て、文武天皇の宸翰にて日本第一補陀洛山寺と書かせ給ひたる古額を存し、額字の左右に昇降二様の龍文あり。本堂は文化四年に改造したるも聊か舊形を變ぜずと云ふ。之れより宇久井を過ぎ東北行せば直に三輪崎驛に到るべし。三輪崎村は人口四千三百餘を有する大村にして一小市街をなし、捕鯨の業盛なり。孔子島鈴島の二島は海岸に近く波間に峙ち、其の眺望頗る佳なり。此の地の南方に接せる佐野は海岸一帯の松原にして、風景亦頗る佳なり。其の海濱には青黒交雜せる圓平形なる小石推疊す。潤澤平滑にして、恰も琢磨したらんが如し。之れ俗に稱する那智黒石にして、試金石又は基石として、盛んに用ひらる。蓋し熊野川の上流北山川瀨八町附近に發育せる變質粘板岩の熊野川流水の爲めに運搬せられ、更に海波の爲めに海邊に打上げられたる者ならんか。

佐野

新宮町

●新宮町は和歌山縣の東端熊野川海口を距る、約一里の地にありて、戸數三千三百餘人口一萬六千餘を有する大市街にして、水野氏の舊城地なり。町の廣さ南北九町、東西三町餘、市坊二十四あり。戸口稠密し商估軒を並べ、商

熊野速玉神社



七年に至り、再建したりしも大に舊形を損せり。本社は熊野夫須美神社熊野坐神社と共に熊野三山と稱し有名なり。本社の南約七町を距て神倉山ありて山頂に高倉神社あり。今は昔日の美観なしと雖も、山上よりは近く市街を瞰

業甚だ盛にして、和歌山市に亞げる縣下第二の都會なり。郡役所區裁判所稅務署新宮中學校等この地にあり。新宮城址は市街の東端一丘阜の上にあししが、今は已に之を毀ち見るべきものなし。熊野速玉神社は町の北部にありて縣社なり。社殿宏壯にして、輪奐の美を盡したりしが、明治十七年火災に罹り、社殿一字を殘さず灰燼に歸し、明治廿

熊野川

下し、遠く滄海を望み、其の眺望絶佳なり。市街の南方字熊野地の田圃中に秦徐福の墓碑と稱する者あり。墓域方十間にして、老樹蔚然たり。徐福は秦の始皇帝の苛政を避け、童男童女五百人を率ゐ、遁れて此の地に來り、土地を拓き農業を營み、餘生を送りしとの傳説あり。

熊野川は水源を奈良縣吉野郡の山中に發し、十津川と稱し、本縣に入りて熊野川又新宮川と稱す。本宮にて音無川を入れ、請川にて請川を合せ、九重村字宮井に至りて、大和より來る處の北山川と會し、漸く巨流となりて、東南に流れ、新宮町に至りて海に朝す。其の間十數里舟楫を通じ、此の附近重要の交通機關なり。北山川の下流九重村の附近は無熾炭の産出を以て有名なり。本宮より新宮に通ずる熊野川の流域を九里八町と稱し、水清く流早くして、兩岸の奇巖怪石に激し、大小の瀑布斷岸に懸り、風景頗る奇絶なり。屏風島の下流網代が淵は碧水深くして、巨巖淵に臨み、顛倒せんとするの奇觀實に名狀すべからざるなり。輕舸に棹し急湍を下らんか、其壯絶富士川急流の遠く及ぶ所にあらず。

大日本地誌卷四終

頁	行	誤	正
六	一四	十一分の一	十二分の一
二〇	一	地方	北方
二〇	九	噴出	迸發
二二	四	東線	東線
二五	四	西岸	兩岸
二五	一	東地	東北
五五	挿圖「攝津御山の下に(生瀨の北方)を脱す		
六三	一〇	掛保	掛保
八六	六	神林川	上林川
一〇〇	八	噴出岩	火成岩
一五四	二	紀伊川の下に(紀ノ川)を脱す	
二八二	三	城崎部	城崎郡
三三一	二	三説何り	三説あり
三二九	六	及丹	及丹波
三六〇	六	なぬ	なり
三六六	一	興福寺	興福寺
四五五	五	明治廿六年	明治廿七年
四五一	四	栗太	栗太
四七〇	七	神戸高等學校	神戸高等商業學校
四七七	一	神宮皇學館	神部署
五二一	七	温度比較の少きを以て	温度比較の少きを以て
五三二	八	獨且	獨且
五四九	二	是入州	入紀州
五五九	六	本部	本邦
五六三	三	時流	暖流
七四八	八	道路に	道路と

○ 明治三十八年十二月十九日印刷
明治三十八年十二月廿一日發行
定價金參圓

大日本地誌

著作權所有

第四卷 英付

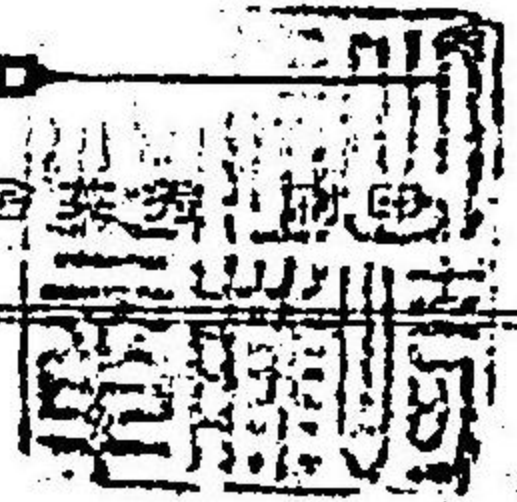
編者 山崎直方
編者 佐藤傳藏

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 飯田三千太郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌元 東京日本橋區本町博文館

場工一第



日大兌發館文博

本美スロク總入字文金皮背判大册各

理學士山崎直方君 理學士佐藤傳藏君共著

發行要旨

地理の書世に多し而も其抽寫其觀察皆平凡普通の地誌たるに止まり、又地形地勢より説き出して産業の盛衰、法制、宗教、教育、軍事等に及びたるものあるを聞かず。本書は歐洲に於ける最新の體式に鑑み、如何に自然の地誌と其目的を異にし、人文の關係を詳述して人為の加工が如何に各地の歴史を推考して、其の推移を明らかにし、その趨勢を左右して、其の地誌を知るに至るべきものなり。本書は、その趨勢を左右して、其の地誌を知るに至るべきものなり。本書は、その趨勢を左右して、其の地誌を知るに至るべきものなり。

第一卷 關東

第一編 地文

第一章地形(概説、相模、武蔵、安房、上野、下野)第二章地質(一)汎論(概説、地質の類別) (二)三波川系 (三)古生代 (四)中生代 (五)新生代 (六)噴出岩 (七)深成岩 (八)火山岩 (九)温泉 (十)第四紀 (十一)霜・湿度 (十二)豆南諸島及び小笠原島の氣象

方面地圖(着色版)九枚
寫真銅版八十八頁二百餘個入
紙數九百餘頁正價金貳圓五拾錢
小包送料金拾五錢

本 地 誌 全 部 拾 卷

總紙數約壹萬壹千七百餘張每卷地圖寫真數十葉入

第二編 人文

第一章沿革(一)先史時代(石器時代、佩玉時代) (二)太古より寧樂朝時代に至る(上古、大化以後) (三)平安朝時代(四)鎌倉幕府時代(五)南北朝時代(六)後醍醐氏時代(七)諸族割據攻伐の時代(八)上杉氏の勢力時代(九)北條氏の勃興(十)織田豊臣氏の時代(十一)江戸幕府時代(十二)維新以後第二章政治、宗教(一)行政(二)司法(三)軍事(三)教育(四)初等教育(五)中等教育(六)其他(五)宗教(六)神社(七)佛敎(八)其他(六)交通(七)道路(八)鐵道(九)電氣鐵道(十)其他第三章産業(一)農業(二)土壌(三)米(四)麥(五)外六目(六)林業(七)關東地方の森林(八)外四目(九)水産(十)製鹽業(十一)生物類(十二)其他(六)工業(七)製糸(八)機械紡績(九)其他(五)鑛業(六)金屬鑛類(七)非金屬鑛類(八)商業(九)商業都會(十)商業機關(十一)會社事業(十二)金融機關

第三編 地方誌

東京府及伊豆七島小笠原島(東京市)地勢、河渠、道路、麴町區、神田區、日本橋區、京橋區、芝區、麻布區、赤坂區、四谷區、牛込區、小石川區、本郷區、下谷區、淺草區、本所區、深川區、接續地、交通、沿革、神奈川縣(横浜市、港内、吉田、南山手、西太田、野毛、神奈川町、港、沿革(其他)埼玉縣數項、群馬縣數項、千葉縣數項、茨城縣數項、栃木縣數項

銅版地圖

箱根火山の圖、赤城附近の圖、榛名火山赤城火山の圖、日光火山の圖、東京灣の圖、鎌倉沿革圖、東京附近鐵道線路の圖、東京市の圖、横濱市の圖、(以上)其他、國造配置の圖、後北條氏全盛時代の圖、徳川氏初世諸侯分布之圖、浦和町、前橋市、高崎市、宇都宮市、水戸市、桐生町、足利町、八王子町、熊谷町、栃木町、千葉町、小田原町、土浦町、銚子町等總計十七

博文館發兌大日

各册大判背皮金文入總スロ美本

第二卷 奥羽

方面地圖(着色版)八枚
寫真銅版八十一頁二百餘個入
紙數九百餘頁正價金貳圓五拾錢
小包料金拾五錢

第二卷

それ、奥羽の地たる、山嶽重疊、河川縱横、文物交通は、關東地方に及ばざれど、自然の壯大、地形地勢の複雑なるに至りては、本邦多く其比を見ず。火山蟠居の數甚だ多く、海灣出入の線頗る繁く、地質また錯雜して、學者の研究に値ひせるもの極めを多し。沿革は此地方特色なる石器時代より、蝦夷と大和民族との争闘史、戰國制を試みたり。其他政治宗教教育地方誌に關しても皆最近の材料に於て殊に詳密なる叙述へて、明ならんとを期せり。また第一卷に比して精巧に、新に地質地形の二圖を添へて、閱覽に便ならしむ。

第一地編文

第一章地形 (概説、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後) 第二章海洋並に海岸線(太平洋沿岸、津輕海峡及陸奥灣、日本海岸、海流及潮、庄内地震、陸羽地震、三陸海嘯) 第三章地質(汎論、始原大統、古生大統、中生大統、新生大統、噴出岩、温泉) 第四章氣象(氣温、氣壓、風向及び風力、降水、霜雪、濕度)

第二人編文

第一章沿革 (石器時代—佩玉時代—上古拓植移民時代—中古豪族勃興の時代—鎌倉時代—南北朝時代—戰國時代—豊臣氏時代—徳川時代—明治維新第二章政治宗教 (行政、司法、軍事、教育、宗教、交通) 第三章産業 (農業、

本 地 誌 全 部 拾 卷

總紙數約壹萬壹千餘頁每卷地圖寫眞數十枚入

銅版地圖

○奥羽東北地方地形概圖 ○磐梯火山の圖 ○岩手火山の圖 ○岩木火山の圖 ○松島灣附近の圖 ○奥羽東北地方地質概圖 ○平泉沿革圖 ○仙臺市の圖 (以上)

其他
藏王火山遠望 ○吾妻火山 ○駒ヶ嶽遠望 ○岩手山 ○八甲田山 ○國造配置の圖 ○月山遠望 ○森吉山 ○寒風山 ○地質府位圖 ○古器物 ○福島町地圖 ○白河町地圖 ○平町地圖 ○青森町地圖 ○盛岡市地圖 ○秋田市地圖 ○山形市地圖 ○米澤市 ○弘前市地圖 外數圖

第三地方編誌

編文 (林業)、(水産)、(工業)、(鑛業)、(金屬鑛類—非金屬鑛類)、(商業)、(商業都會—商業機關—會社事業—金融機關)

福島縣 白河町 ○原の町 ○中村町 ○福島町 外數項
宮城縣 白石町 ○岩沼町 ○鹽竈町 ○仙臺市 ○吉岡町 ○吉田町 ○古川町 外數項
岩手縣 一ノ關町 ○平泉 ○水澤町 ○花卷町 ○盛岡市 ○岩手山 ○一戸町 ○福岡町 ○遠野町 ○釜石町 外數項
青森縣 三月町 ○八戸町 ○青森市 ○弘前市 ○黒石町 外數項
山形縣 米澤市 ○赤湯町 ○上の山町 ○山形市 ○天童町 ○楡岡町 ○大石田町 ○舟形町 ○小松町 ○酒田町 外數項
秋田縣 院内町 ○秋田市 ○能代町 ○花輪町 ○土崎 外數項

博文館發兌大日

各册大判背皮金文入總ス美本

第三卷 中部

中部の地たる海岸線は關東奥羽に比して及ばざるも火山脈の形状、河流の壯大頗る研究に値すべきものあり、殊に此の地方には中京名古屋の如き多岐に亘るは、沿河長野の如き繁盛なる都會を有するが故に、人文發達の上注目すべき事多く、沿革はまた徳川時代の争鬪史に富み産業は工業、鑛業、林業に於て他地方に卓越し、政治、宗教、教育、地方誌に關して記すべき事甚だ多し。今此篇を編むに當つて、著者は凡て最近の材料に依り、勉めて詳細に又努めて明瞭ならん事を期し、其の如何に苦心經營の結果に成りたるやは、本書を細く人の必らず首肯する所ならん。地形地質圖及び寫真版皆共に精巧無比。

方面地圖(着色版)九
銅版八十六頁二百餘個入
寫真版千頁正價金貳拾五
紙數壹千頁正價金貳拾五
小包送料金拾五錢

第三卷

第一地

第二人

編文

第一章地形 (概説—尾張—三河—遠江—駿河—甲斐—伊豆—美濃—飛騨—信濃) 第二章海岸并に海岸線 (相模灣、伊豆海并其沿岸—駿河灣並に其沿岸—遠江灘及其海岸—伊勢海及び其沿岸—海流及び潮—近時に於ける主要なる地變) 第三章地質 (一)汎論 (二)始原大統 (三)古生大統 (四)中生大統 (五)御坂統及三倉統 (六)新生大統 (七)噴出岩 (八)地體構造 (九)鑛泉 第四章氣象 (氣溫、氣壓、風向、降水量、霜雪、溫度) 高山氣象(富士氣象、御岳氣象)

第一章沿革(一)石器時代(二)上古(三)竊取朝より平安朝に至る(四)鎌倉時代(五)南北朝時代(六)諸族割據攻伐時代(七)豐臣氏の時代(八)徳川氏の時代(九)維新以後 第二章政治宗教 (一)行政(二)司法(三)軍事(四)教育(五)宗教(六)交通

本誌地全拾卷

總紙數約壹萬頁每卷地圖寫眞數十枚入

編文

第三章產業 (一)農業(二)林業(三)水産(四)工業(五)鑛業(金屬鑛類、非金屬鑛類)(六)商業、商業都會、商業機關、會社事業、金融機關)

第三編 地方誌

愛知縣 概説豐橋町○岡崎町○有松町○鳴海町○大高町○熱田町○名古屋市○清洲町○外敷十
靜岡縣 概説富士山○沼津町○原町○吉原町○大宮町○蒲原町○興津町○清水町○蓮山○下田町○
山梨縣 概説上野原縣○猿橋縣○大月縣○谷村町○日下部町○勝沼町○甲府市○丹波仙臺○垂崎縣外
岐阜縣 概説岐阜市○長良川○加納町○笠松町○大垣町○關ヶ原村○高田町○養老公園○大田町○
長野縣 概説八百津町○外敷十
長野縣 概説小諸町○上田町○長野市○諏訪町○飯田町○伊那町○高遠町○松本町○大町○中野町

銅版地圖

○中部地形概圖○富士火山頂上附近地圖○富士附近地圖○天城火山附近地圖○伊豆大島地圖○小笠原島父島地圖○淺間火山地圖○中部地質概圖○名古屋市街圖(以上)

其他 金ヶ嶽富士遠望○箱根天城富士遠望○天城火山遠望○八丈島遠望○島島○ハツケ嶽遠望○立科山遠望○硫黃嶽根石嶽遠望○淺間火山遠望○角掛山小棧敷○龍の塔山遠望○角掛山より南方に大棧敷小棧敷を望む○諏訪湖遠望○御岳頂望○國造配置○徳川時代諸侯配置○岡崎町地圖○豐橋町地圖○靜岡市地圖○沼津附近地圖○濱松町地圖○知多半島海岸地圖○甲府市地圖○岐阜市地圖○大垣町地圖○高山町地圖○長野市地圖○上田町地圖○松本町地圖○下田附近地圖○諏訪湖附近其他

每編各專門
諸大家執筆

帝國百科全書

全部二百冊
每卷紙數約三百廿頁
總紙數約六萬五千頁

第一編 世界文明史	第十五編 邦語英文典	第二十九編 商法	第四十三編 民法債權編釋義
第二編 日本新地理	第十六編 新撰代數學	第三十編 民法物權編釋義	第四十四編 稅關及倉庫論
第三編 倫理學	第十七編 新撰幾何學	第三十一編 財政學	第四十五編 東洋教育史
第四編 肥料學	第十八編 地質學	第三十二編 西洋哲學史	第四十六編 政治學
第五編 宗敎哲學	第十九編 新撰林何學	第三十三編 日本帝國憲法論	第四十七編 政治學
第六編 新撰算術	第二十編 森林學	第三十四編 近世美學	第四十八編 日本風俗論
第七編 農產製造學	第二十一編 民法親族編釋義	第三十五編 哲學	第四十九編 日本運送會法
第八編 萬國新地理	第二十二編 國際法	第三十六編 商工地理學	第五十編 日本社會學
第九編 支那文學史	第二十三編 國際私法	第三十七編 提要造林學	第五十一編 日本法制史
第十編 農學	第二十四編 國稅	第三十八編 商業經濟學	第五十二編 支那文明史
第十一編 修辭學	第二十五編 日本歷史	第三十九編 氣候及土壤論	第五十三編 畜產學
第十二編 論理學	第二十六編 民事訴訟法釋義	第四十編 最新統計學	第五十四編 畜產學
第十三編 栽培學	第二十七編 法理學	第四十一編 西洋歷史	第五十五編 森林保護學
第十四編 植物營養論	第二十八編 日用化學	第四十二編 分析化學	第五十六編 國法學

第五十七編 菌學	第七十六編 農藝化學	第九十七編 新撰動物學	第一百十七編 日本佛敎史
第五十八編 船舶學	第七十七編 新撰解剖幾何學	第九十八編 保險通論	第一百十八編 日本佛敎史
第五十九編 應用化學	第七十八編 新撰日本文典	第九十九編 世界宗教制度論	第一百十九編 園藝各論
第六十編 星學	第七十九編 議會及政黨論	第一百編 日本文明史	第一百二十編 兒童心理學
第六十一編 農用器具學	第八十編 土地改良論	第一百一編 日本文明史	第一百二十一編 兒童心理學
第六十二編 新撰三角法	第八十一編 佛蘭西文典	第一百二編 水產學	第一百二十二編 世界美術史
第六十三編 有機化學	第八十二編 佛蘭西文典	第一百三編 支那法制史	第一百二十三編 經濟政策論
第六十四編 邦語逸文典	第八十三編 佛蘭西文典	第一百四編 支那法制史	第一百二十四編 政治學
第六十五編 無機化學	第八十四編 佛蘭西文典	第一百五編 支那法制史	第一百二十五編 政治學
第六十六編 新撰微積分學	第八十五編 東洋歷史	第一百六編 支那法制史	第一百二十六編 應用定暈分析
第六十七編 世界宗教史	第八十六編 行政裁判法論	第一百七編 支那法制史	第一百二十七編 應用定暈分析
第六十八編 栽培各論	第八十七編 行政法論	第一百八編 支那法制史	第一百二十八編 宗敎進化論
第六十九編 農業經濟學	第八十八編 養蠶及製絲論	第一百九編 支那法制史	第一百二十九編 佛敎哲學
第七十編 經濟學	第八十九編 銀行新論	第一百十編 支那法制史	第一百三十編 佛敎哲學
第七十一編 應用機械學	第九十編 行政法各論	第一百十一編 支那法制史	第一百三十一編 社會倫理學
第七十二編 植物學新論	第九十一編 行政法各論	第一百十二編 支那法制史	第一百三十二編 社會倫理學
第七十三編 近世氣象學	第九十二編 支那哲學史	第一百十三編 支那法制史	第一百三十三編 韓國新地理
第七十四編 敎育學	第九十三編 支那哲學史	第一百十四編 支那法制史	第一百三十四編 韓國新地理
第七十五編 農政學	第九十四編 支那哲學史	第一百十五編 支那法制史	第一百三十五編 清國商業地理
	第九十五編 支那哲學史	第一百十六編 支那法制史	第一百三十六編 西洋音樂史